

長	野	県		
埋	蔵	文	化	財
セ	ン	タ	ー	
年	報		42	

2025年度

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報 42
～ 2025年度～

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター



①中野市 南大原遺跡舞台地区全景（西から）



②中野市 南大原遺跡舞台東地区
SK353 木棺墓遺物出土状況（南から）



③中野市 南大原遺跡南大原地区
SB127 須恵器坏出土状況



④中野市 南大原遺跡南大原地区
SB127 墨書の須恵器坏出土状況

口絵 2



⑤長野市 川田条里遺跡全景（南から）



⑥松本市 安塚古墳群 第15号古墳石室（南東から）



⑦松本市 南栗遺跡全景（北東から）



⑧松本市 南栗遺跡 SB6020 合口状態で出土した甕（北西から）

口絵 4



⑨飯田市 五郎田遺跡 ST504 掘立柱建物跡（南から）



⑩飯田市 正泉寺遺跡 SB84 竪穴建物跡遺物出土状況（東から）

目 次

口絵写真

- 1 ①中野市 南大原遺跡舞台地区全景
- ②中野市 南大原遺跡 舞台東地区 SK353 木棺墓出土状況
- ③中野市 南大原遺跡南大原地区 SB128 5点重なった状態で検出された須恵器坏
- ④中野市 南大原遺跡南大原地区 SB128 墨書の須恵器坏出土状況

- 2 ⑤松本市 安塚古墳群第15号古墳石室
- ⑥長野市 川田条里遺跡全景
- 3 ⑦松本市 南栗遺跡全景
- ⑧松本市 南栗遺跡 SB6020 合口状態で出土した甕
- 4 ⑨飯田市 五郎田遺跡 ST504
- ⑩飯田市 正泉寺遺跡 SB84 遺物出土状況

I	2025年度の事業概要	1
II	発掘作業の概要	3
	(1) 南大原遺跡	4
	(2) 川田条里遺跡	10
	(3) 南栗遺跡	14
	(4) 安塚古墳群	18
	(5) 西浦遺跡	22
	(6) 五郎田遺跡	23
	(7) ママ下遺跡	28
	(8) 正泉寺遺跡・座光寺石原遺跡	29
	(9) 宮崎下遺跡	33
	(10) 藪越遺跡	34
	(11) 高屋遺跡	35
III	整理作業の概要	36
	(1) 長沼城跡	37
	(2) 塩崎遺跡群	39
	(3) 真光寺遺跡・真光寺古墳群	41
	(4) 川原遺跡	43
IV	普及公開活動の概要	45
	(1) 施設公開	46
	(2) 現地説明会等	47
	(3) 速報展・講演会等	48
	(4) 展示室・普及啓発用教材等	51
	(5) 講座・出前授業・職場体験	52
	(6) 出版物	53
V	指導者招へい	54

VI	会議研修会への参加	55
	(1) 会議委員会等	55
	(2) 研修会等	55
VII	学校関係機関への協力等	56
	(1) 職員派遣・技術指導等	56
	(2) 学校等への協力	58
	(3) 調査資料の利用	59
	(4) インターンシップ等	60
	(5) 県有施設利用の応急的保存処理	60
	(6) 派遣等の受入	60
VIII	組織事業の概要	61
	(1) 組織	61
	(2) 職員	61
	(3) 事業	62
IX	調査研究ノート	63
	(1) 飯田市川原遺跡出土の晩期土器とその文様	64
	(2) 飯田市西浦遺跡出土和鏡について	68
	(3) 安塚古墳群の中世火葬遺構	74
	(4) 長沼城絵図の基礎的考察	78
	(5) 長野市柳原地区における治水石標と地役権設定契約	86
	(6) 長野県の近現代遺跡	92

奥付

I 2025年度の事業概要

本年度の発掘調査事業は、国関連7件（一部長野市・ネクスコを含む）、長野県3件、長野市1件、民間事業1件、その他1件の計13件となった。このほかに長野県からの研修等受託事業及び普及啓発や地域協力などの自主事業も行った。

1 発掘調査事業

国関連19億3305万円、中央新幹線5億6566万円、長野県3億2406万円、その他2億737万円の計30億3014万円（2026年3月1日現在の見込）の受託費により、9箇所の発掘作業と5箇所の整理作業を行った。

（1）発掘作業

中野市南大原遺跡：上今井遊水地整備事業に伴い調査を実施した。本年度は計122軒もの竪穴建物跡が検出され、特に弥生時代中期後半の建物跡から多数の管玉が出土した。また、奈良時代の建物跡からは墨書土器が重なった状態で出土するなど、千曲川流域の拠点集落の様相がより明らかとなった。

松本市南栗遺跡：松本JCT建設事業に伴い、昨年度に引き続き調査を実施した。本年度は119軒の竪穴建物跡を検出し、なかでも壁柱穴が巡る特徴的な形状を持つ9世紀中頃の建物跡や、刀子・砥石が出土した墓跡の可能性のある土坑など、平安時代の集落構造や葬送習俗を考える上で貴重な成果が得られた。

松本市安塚古墳群：国道158号（松本波田道路）改築事業に伴い、遺跡範囲西端を調査した。中世以降のマウンドや礎石建物跡、集石、火葬遺構が確認され、本古墳群周辺が中世以降も継続して「葬地」として利用されていたことが判明した。

飯田市正泉寺遺跡・座光寺石原遺跡：座光寺上郷道路建設に伴い調査を実施した。昨年度に続き、石組カマドを持つものを含む多数の奈良・平安時代の竪穴建物跡を確認し、集落が北西方向へ広がる様相を捉えた。

飯田市ママ下遺跡：中央新幹線建設事業に伴い調査を実施した。弥生時代から奈良・平安時代に至る竪穴建物跡や多数の土坑を検出し、土曾川流域での長期間の土地利用の実態が明らかとなった。

飯田市宮崎下遺跡：座光寺上郷道路建設に伴いトレンチ調査を実施し、堆積状況の観察と遺構の有無を確認した。

飯田市藪越遺跡：国道153号拡幅工事に伴い、古墳時代から奈良・平安時代を中心とする竪穴建物跡や土製紡錘車、刀子などが検出され、天竜川右岸における当時の生活基盤の一端が確認された。

（2）整理作業

長野市長沼城跡：2024年度に完了した発掘調査成果に基づき、本年度より本格整理作業を開始した。二ノ丸推定地からの金属製品や陶磁器の分析、中近世史料の精査も進め、城郭の変遷と廃絶後の土地利用について研究を深めている。

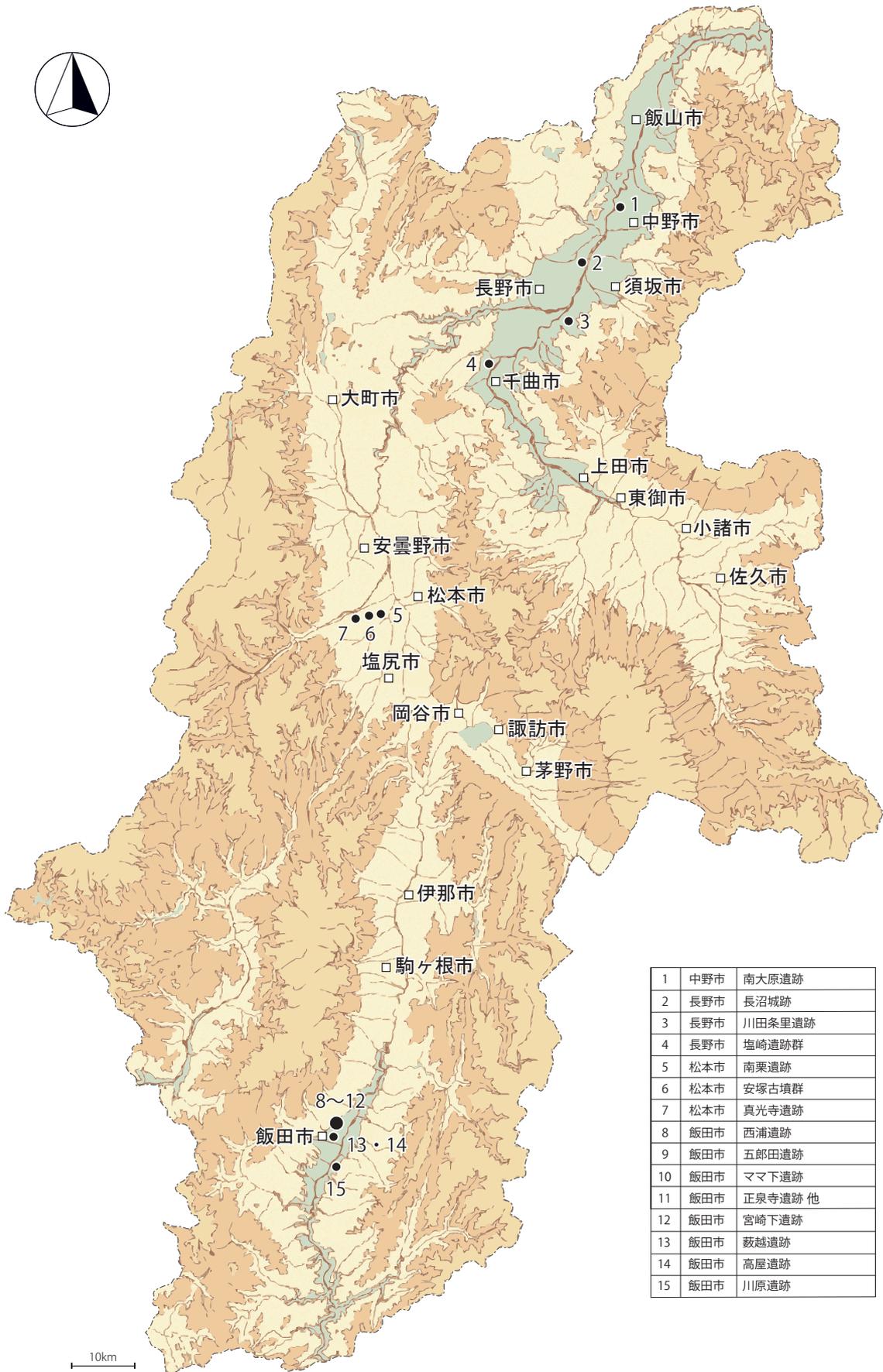
長野市塩崎遺跡群：国道18号（坂城更埴バイパス）改築に伴う長期の整理作業を継続した。本年度は図版組作業や原稿執筆を重点的に行い、弥生時代から中世に至る調査資料の体系化を図った。

松本市真光寺遺跡・真光寺古墳群：国道158号（松本波田道路）改築に伴う整理作業を実施した。中世の火葬施設や土葬墓を含む多量の遺構・点検・確認作業を計画的に進めた。

2 研修、普及公開事業

埋蔵文化財保護行政等にかかる研修を実施し、職員の資質向上を図った。普及公開事業では、地域展を長野市で開催し、長沼城跡の調査成果を講演会も通じて広く公開した。施設公開や速報展では、事業団の他部局や中央日本4県と連携し、市民向けに業務内容や調査成果を公開するとともに、本年度も異分野（音楽療法）とコラボした事業も実施した。このほか、現地説明会や、学校や社会教育と連携した事業を積極的に展開した。

（川崎 保）



1	中野市	南大原遺跡
2	長野市	長沼城跡
3	長野市	川田条里遺跡
4	長野市	塩崎遺跡群
5	松本市	南栗遺跡
6	松本市	安塚古墳群
7	松本市	真光寺遺跡
8	飯田市	西浦遺跡
9	飯田市	五郎田遺跡
10	飯田市	ママ下遺跡
11	飯田市	正泉寺遺跡 他
12	飯田市	宮崎下遺跡
13	飯田市	藪越遺跡
14	飯田市	高屋遺跡
15	飯田市	川原遺跡

図1 2025年度（R7年度）調査・整理対象遺跡

Ⅱ 発掘作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代・内容	主な遺物
南大原遺跡	中野市	上今井遊水池整備事業	18,000	2025.4.30～ 2025.12.16	縄文：遺物集中 弥生：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡 古墳：竪穴建物跡、溝跡 古代：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡	縄文：土器、石器 弥生：土器、石器、玉づくり関連遺物（管玉、勾玉、未成品、剥片） 平安：土器、陶磁器、石器、金属製品（八稜鏡、鎌、鉄鏃、足金物等）
川田条里遺跡	長野市	若穂 SIC 整備事業	6,312	2025.4.15～ 2025.12.17	古墳：水田跡、畦畔 古代：水田跡、畦畔 鎌倉～室町：掘立柱建物跡、柵列跡、土坑、溝跡、炉跡、竪穴状遺構、貼床状遺構 近世：水田跡	古墳：土器、木製品 古代：土器、陶磁器、木製品 中世：土器、陶磁器、漆器、釘、鉄滓、種実、馬歯 近世：陶磁器
南栗遺跡	松本市	松本 JCT 建設事業	5,200	2025.4.17～ 2025.12.16	古代：竪穴建物跡、鍛冶関連遺構、土坑、溝跡、柵列跡 時期不明：自然流路跡	古代：土器（土師器、須恵器、灰釉陶器）、土製品（ミニチュア土器）、石器（砥石）、鉄器（鉄斧、刀子、鎌等）、鍛冶関連遺物（羽口、椀形滓、粒状滓、鍛造剥片等）
安塚古墳群		松本波田道路建設事業	4,900	2025.4.17～ 2025.11.28	古墳～奈良：古墳 古代：土坑 中世以降：礎石建物跡、火葬遺構、集石、土坑、溝跡 近世：集石 時期不明：竪穴状遺構、柵列、自然流路	縄文：土器、石器 古墳～古代：土器 中世：土器、陶磁器、金属製品（銭貨）、骨 近世：陶磁器
西浦遺跡	飯田市	中央新幹線建設工事	454	2025.7.22～ 2025.8.28	古墳：竪穴建物跡、土坑、溝跡	古墳：土器、石器（打製石包丁、打製石斧）
五郎田遺跡			3,422	2025.4.14～ 2026.1.6	弥生：竪穴建物跡、土坑、溝跡 古墳：土坑、溝跡 古代：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑 時期不明：掘立柱建物跡、溝跡	弥生：土器、石器 古墳：石器・石製品（石鏃、有肩扇状形石器、石包丁、砥石、勾玉など） 古代：土器、金属製品（鉄製紡錘車、刀子など）
ママ下遺跡			2,406	2025.4.14～ 2025.11.28	弥生：竪穴建物跡 古墳：竪穴建物跡、土坑、氾濫跡 古代：竪穴建物跡、土坑、溝跡、氾濫跡	縄文：土器、 弥生：土器、石器 古墳：土師器、須恵器、石器、石製品、土製品 古代：土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、石器（打製石包丁、打製石斧、磨製石鏃、砥石ほか）、土製品（紡錘車）、石製品（白玉、紡錘車）
正泉寺遺跡			3,930	2025.4.14～ 2025.12.18	縄文：土坑 弥生：流路跡 古墳：竪穴建物跡、土坑 古代：竪穴建物跡、土坑、掘立柱建物跡、溝跡、流路跡	縄文：土器 弥生：土器、石器（打製石斧、打製石鏃、有肩扇状石器など） 古墳：土器、金属製品 古代：土器、石器（砥石）、金属製品（鉄斧、鉄鎌、鉄鏃、紡錘車など）
座光寺石原遺跡			70		時期不明：溝跡	縄文～弥生：石器
宮崎下遺跡			5,000	2025.11.25～ 2025.12.18		
藪越遺跡			600	2025.4.17～ 2025.12.18	古墳：竪穴建物跡、土坑、溝跡 古代：竪穴建物跡、土坑、溝跡	縄文：土器 弥生：土器、石器（打製石斧、磨製石斧、砥石など） 古墳：土器、土製品、石器 古代：土器、土製品（紡錘車）、金属製品（刀子）
高屋遺跡	1,440	2025.4.1～ 2025.9.18	弥生：円形周溝墓、土坑、溝跡、流路跡 古墳：竪穴建物跡、土坑溝跡、流路跡、遺物集中 古代：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、流路跡 中世：土坑、溝跡、流路跡	弥生：土器、石器（打製石斧） 古墳：土師器、須恵器、土製勾玉、金属製品 古代：土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、金属製品		

(1) 南大原遺跡

みなみおおはらいせき

上今井遊水池整備事業

所在地及び交通案内：中野市大字上今井字南大原1089ほか

上信越自動車道信州中野インターチェンジから北西に2.3km。

遺跡の立地環境：千曲川は1870～1872（明治3～5）年に現在の位置に瀬替えされており、遺跡形成時には旧千曲川左岸の曲流部に発達した自然堤防及び後背湿地上に立地する。

発掘期間等

調査期間	調査対象面積	調査担当者
2025.4.30～ 2025.12.16	北大原・舞台東7,500㎡ 舞台西 7,500㎡ 南大原 3,000㎡	上田典男 依田健太 町田賢一 山田清朝

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	121 (135)	弥生時代、古墳時代、平安時代
掘立柱建物跡	19 (24)	弥生時代、平安時代
遺物集中	3 (4)	縄文時代、弥生時代
焼土跡	6 (8)	
土坑	1968 (2731)	縄文時代、弥生時代、平安時代
溝跡	18 (34)	弥生時代、平安時代

() は合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文、弥生、平安時代
石器	縄文、弥生、平安時代
玉つくり関連遺物	弥生時代（管玉、勾玉、未成品、剥片）
金属製品	平安時代（八稜鏡・鎌・紡錘車・鉄鎌・足金物ほか）

発掘調査の概要

本年度は、本調査対象範囲となる約13万㎡のうち、18,000㎡を3地区に分けて地籍ごとに調査を実施した（舞台地籍については便宜的に東西に2分した）。調査はいずれも（公社）日本文化財保護協会に支援委託して行った。以下、3地区ごとに調査成果をまとめる。（上田典男）



図2 遺跡の位置（1：50,000 中野）※本調査位置

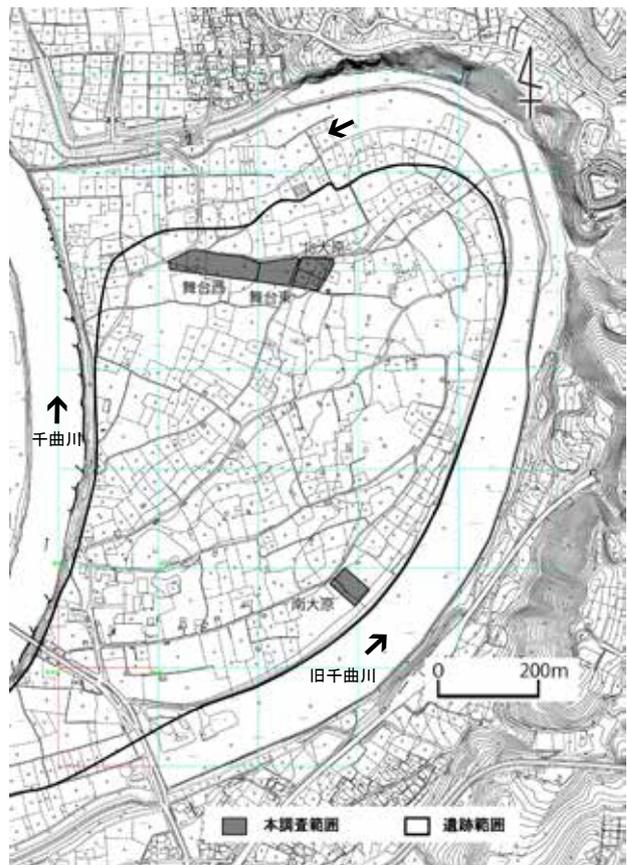


図3 調査位置図

北大原・舞台東地区の調査

北大原地区では、平安時代と縄文時代の遺構・遺物が明らかとなっている。

平安時代の遺構については、竪穴建物跡8軒（SB01～SB08）・掘立柱建物跡1軒（ST01）・小土坑約350基が検出されている。竪穴建物跡と掘立柱建物跡については、調査区北部に集中して検出され、竪穴建物跡が掘立柱建物跡の東西両側で検出されている。東側はSB01～SB03・SB07の4軒で、それぞれが独立した形で検出されている。

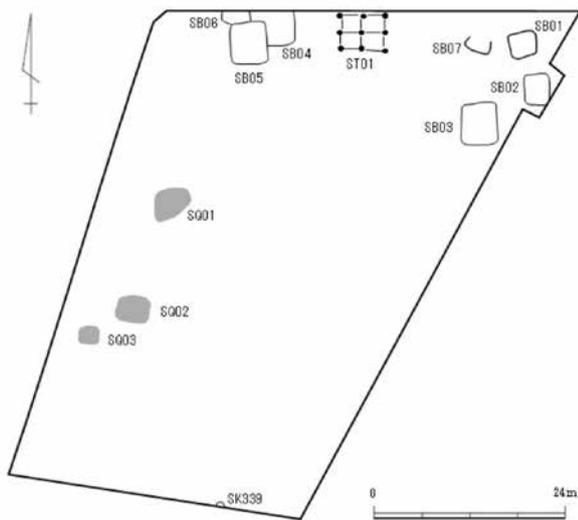


図4 北大原地区 遺構概略図

一方、西側においては、SB04～SB06・SB08の4軒が切り合った状態で検出されている。

竪穴建物跡は、出土した土器からいずれも10世紀前半に位置付けられる。これらの竪穴建物跡においては、いわゆる「カマドじまい」の状況を良好に捉えることができた。SB01では、火床を除いて完全に解体され、火床上に完形に近い土師器の坏が置かれていた。SB02では、火床上に数点の土師器と黒色土器の坏が置かれ、カマドの構築材として利用された石材が、隣接するピット上面に置かれていた。SB03では、使用されたカマドが解体され、その隣に未使用のカマドの石組が再構築されていた。SB04とSB05では、カマド袖部の一部を除いて解体され、火床上に土師器と黒色土器の坏が正位で置かれていた。

ST01は2間×2間の総柱建物である。時期を特定できる遺物は出土していないが、当地区で検出された竪穴建物跡と棟軸方向をほぼ同じくしていることから、同時期と判断している。

縄文時代の遺構としては、土坑1基（SK339）と土器集中3箇所（SQ01～SQ03）が検出されている。土坑は、検出幅55cm、深さ33cmを測る小土坑で、底部付近から土器片が出土している。土器集中から出土した土器はいずれも小片であるが、前期から中期に位置付けられる。また、遺構には伴わないが、縄文時代と考えられる打製石斧と石錘が出土している。当該期の遺構と遺物は、平安

時代とは対照的に、調査区南半部に分布する傾向が認められる。

舞台東地区では、竪穴建物跡28軒（SB09～SB36）、掘立柱建物跡1軒（ST02）、木棺墓1基（SK353）、土坑約600基が検出されている。時期を特定できる遺構は、縄文時代後期の土坑1基（SK379）を除いて、平安時代に位置付けられる。

竪穴建物跡は、調査区北半部に集中して検出されている。東側では間隔をあけた状態で、西側では密集した状態で分布している。また、全体的に良好な状態で検出できた竪穴建物跡の数は限られ、多くは床面がわずかに検出された程度である。

これらの竪穴建物跡の特徴として、カマド以外に炉跡を有する建物が比較的多く認められたことである。SB18・SB22・SB26がその代表例である。床面上から鉄滓が少なからず出土していることから、鍛冶工房としての機能が考えられる。ま

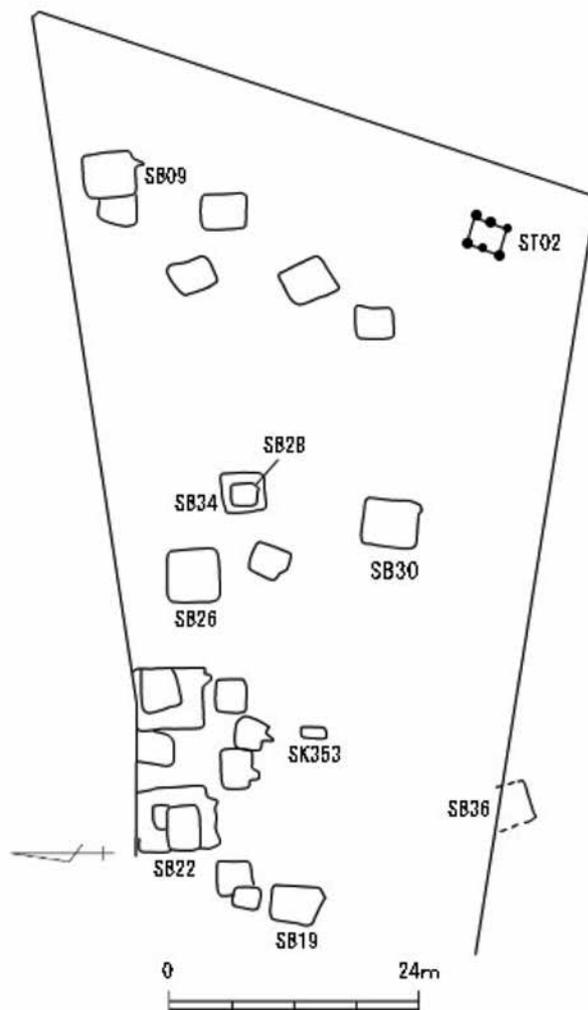


図5 舞台東地区 遺構概略図

た、数軒の竪穴建物跡では「カマドじまい」の様子が良好な状態で検出されている。SB09では、土師器坏が火床上に正位で置かれた状態で検出されている。SB22では、袖石が内側に倒された状態で検出されている。SB28では、カマド内に土師器坏・黒色土器碗・羽釜が詰め込まれた状態で検出されている。SB30では、構築材としての石材が、カマド火床を中心に集石された状態で検出されている。

掘立柱建物跡（ST02）は、調査区南東部で検出されている。1間×2間の側柱建物である。時期を特定できる遺物は出土していないが、埋土の特徴から、平安時代に位置付けられるものと考えられる。

木棺墓は、SK353の1基が検出されている（口絵②）。墓坑の平面形は隅丸長方形をなし、主軸方向は南北方向を示している。墓坑の中央部では棺の痕跡を検出することができ、棺内には人骨が遺存していた。頭部は棺の北側にあり、特に上顎骨・下顎骨および歯を中心に、比較的良好に遺存していた。一方、胴部から足部にかけてはわずかに骨の痕跡が認識できる程度であった。以上から復元される被葬者の身長は160cmである。

また、棺外足部には土器の副葬が認められた。副葬された土器は、土師器と黒色土器の坏である。これらの土器から10世紀前半に位置付けられる。この時期は北大原地区から舞台西地区にかけての集落形成時にあたり、唯一の埋葬遺構であることから、「屋敷墓」と位置付けることができる。



図6 SB26 土師器盤出土状況

この他、当地区では、特筆すべき遺物として、SB26の炉上面から土師器盤が約16個体分出土している。底部は、輪高台からなるものと突出した平高台からなる2タイプが認められる。これらの個体は完存するものはなく、意識的に割られた状況を示している。（山田清朝）

舞台西地区の調査

舞台西地区は、東の台地部（北大原地籍）から西の千曲川へと下っていく地形にある。遺構検出は東側から行い、舞台東地区同様に黄褐色土を検出面としていたが、機械掘削中にその上の黒褐色土中から焼土や礫などカマドの一部がみつき、西側では黒褐色土上面を検出面とした。黒褐色土上には千曲川の洪水堆積層が何層も重なっており、古代以降は集落を形成した痕跡は見られなかった。なお、SD2・3は洪水堆積層内部にあり近世以降とみられ、耕地に係る水路とみられる。検出した遺構は竪穴建物跡（SB）43、掘立柱建物跡（ST）1、土坑・ピット（SK）178、溝跡（SD）9である。このうちSB41～43については調査区北壁において断面のみの確認となっている。

竪穴建物跡は、出土遺物から10世紀前半と11世紀半ば以降との2時期で、いずれも東西方向に列をなすように並んでいる。建物跡の切り合いは多くても3回で、それがない単独が多いことから、短時期につくられた集落と考えられる。竪穴建物跡の多くは時期に関わらず南東部にカマドをもつ。カマドは、自然礫や直方体に加工した礫を袖石として構築されているが、多くは建物廃絶後に壊され、天井石が正位置にあったのはSB13・33のみである。遺物の多くはカマドの前や西側からまとまってみつき、カマドじまいの祭祀で置かれたものとみられる。たとえば、SB14からは暗文で文字が描かれた黒色土器の碗、SB20からは須恵器の大甕と灰釉陶器碗などが出土している。

SB11・16は、屋根の炭化材が放射状に残るいわゆる焼失住居である。SB16では南側にある炭化材の上に八稜鏡が鏡面を上にして置かれており、建物廃絶に伴う祭祀行為と考えられる。

SB19は建物の中心に橙色、灰色とグラデーションをもつ被熱痕跡があり、高温で焼かれた状況を示す。周囲から鉄滓が出土していることから鍛冶関連の遺構とみられる。なお、遺跡から羽口は今のところ1点しか出土していない。SB19からは灰釉陶器や緑釉陶器、鉄製品が出土しており、ほかの建物跡とは異なる状況を示している。また、埋土上から上肢骨と土師器片が並んで見つかり、建物廃絶後には墓地として使われたようである。竪穴建物跡としたもののなかには、SB9・31・32のようにカマドをもたないものもあり、単に住居としてではなく工房や小屋的な建物もあったのだろう。

掘立柱建物跡は西側の1棟（ST1）のみで、2×2間の総柱式である。遺物は出土していないが、SB30と建物軸方向がほぼ同じで、これと同時期の建物と考えたい。

SD1は調査区東側にある南西—北東方向の断



図7 舞台西地区 SB16焼失住居



図8 舞台西地区 SB16出土八稜鏡

面逆台形の溝である。SB17・40に切られ、遺物は出土していないが、集落構築前につくられたなんらかの区画溝だろうか。（町田賢一）

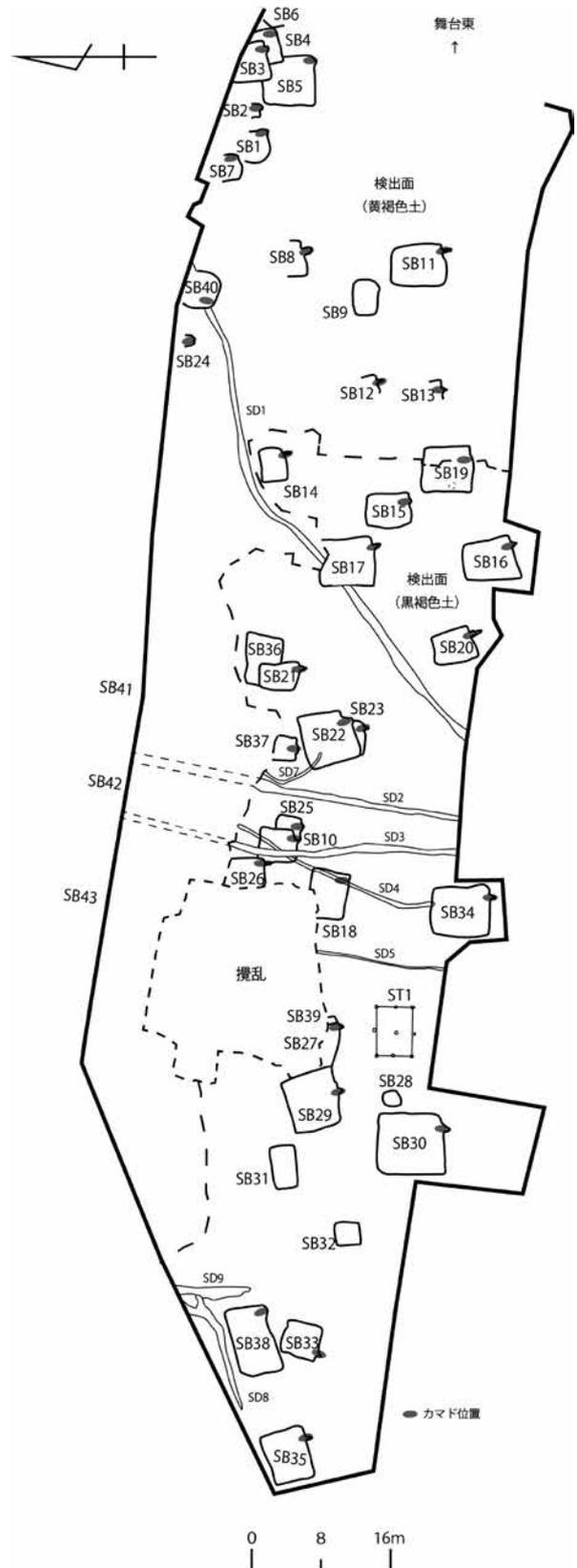


図9 舞台西地区 遺構概略図

南大原地区の調査

南大原地区は、旧千曲川左岸の旧河道に隣接した立地にある。地山に近い黄褐色土上面を切り込む黒色の遺構埋土が検出されたため、黄褐色土を検出面とし、弥生から平安時代までの遺構を検出した。層序の堆積において、舞台西地区のように明確な千曲川の洪水堆積層は確認されなかった。

検出した主な遺構は、竪穴建物跡（SB）42、掘立柱建物跡（ST）16、土坑・ピット（SK）884、溝跡（SD）1である。竪穴建物跡の内訳としては、弥生時代中期後半18軒、古墳時代前期6軒、古代18軒となった。

弥生時代中期後半のSB119からは、管玉が11点出土している。出土した管玉は、完成品が欠けたものが多いのが特徴としてあげられ、管玉の原材料である碧玉の石核など管玉製作に関わる遺物の出土はみられなかった。また、SB147では7点の管玉が出土しており、18軒のうち9軒の竪穴建物跡で管玉の出土が確認された。

鉄器加工を思わせる砥石の出土や5カ所以上の炉をもつSB153・SB154が見つかったものの、いずれからも鉄製品、鍛造剥片等は出土しなかった。炉付近から土壌サンプルを採取しており、今後の分析が期待される。

弥生時代中期後半の竪穴建物跡はいずれも中央土坑をもつ構造となっていた。

古墳時代前期のSB139は、竪穴建物跡内の南東が四隅のピットを囲むように3～5cm程の砂利石を四角形状に集石していた。ピットは貯蔵穴と考えられこれを囲う何らかの遺構と思われる。集石近くから完形の坏が2点出土していることが特筆される。

奈良時代の竪穴建物跡、SB127の床面から須恵器の坏が5枚重なった状態で出土した（口絵③は上1枚削がした状態）。下2枚に同じ文字が墨書されている（口絵④）。SB138は、1辺6m近くの大型の竪穴建物跡で南西方向に初期のカマドがあり、新たなカマドが北西方向に造り替えられていることが判明した。古代の竪穴建物跡でカマドの造り替えがおこなわれたのは、この1軒となっ

ている。

古代の竪穴建物跡は遺物から8世紀代～10世紀前半の間に位置づけられ、南東、南西方向にカマドをもつ傾向がある。カマドの多くは建物廃絶後に壊され火床もしくは袖の横に坏が正位で置かれており、建物、カマド廃絶に伴う祭祀行為の一部と考えられる。

掘立柱建物跡（ST）では柱間1間の建物が多く弥生時代中期後半の可能性が高い。ST106、ST107は1×1間、ST114は2×2間の総柱式で古代の竪穴建物跡と主軸が同じであることから、同時期のものである可能性が高い。

溝跡（SD109）は古代のSB137に切られ、調査区東西方向に延びるが途中で切れる。断面はU字状で底面に掘削痕が残るため、区画溝と考えられる。少量の弥生土器片の遺物を含むが、調査区西の壁断面から溝の時期は古くても古墳時代前期と考えられる。

（依田健太）



図10 南大原地区 SB119



図11 南大原地区 SB146 中央土坑をもつ竪穴建物跡

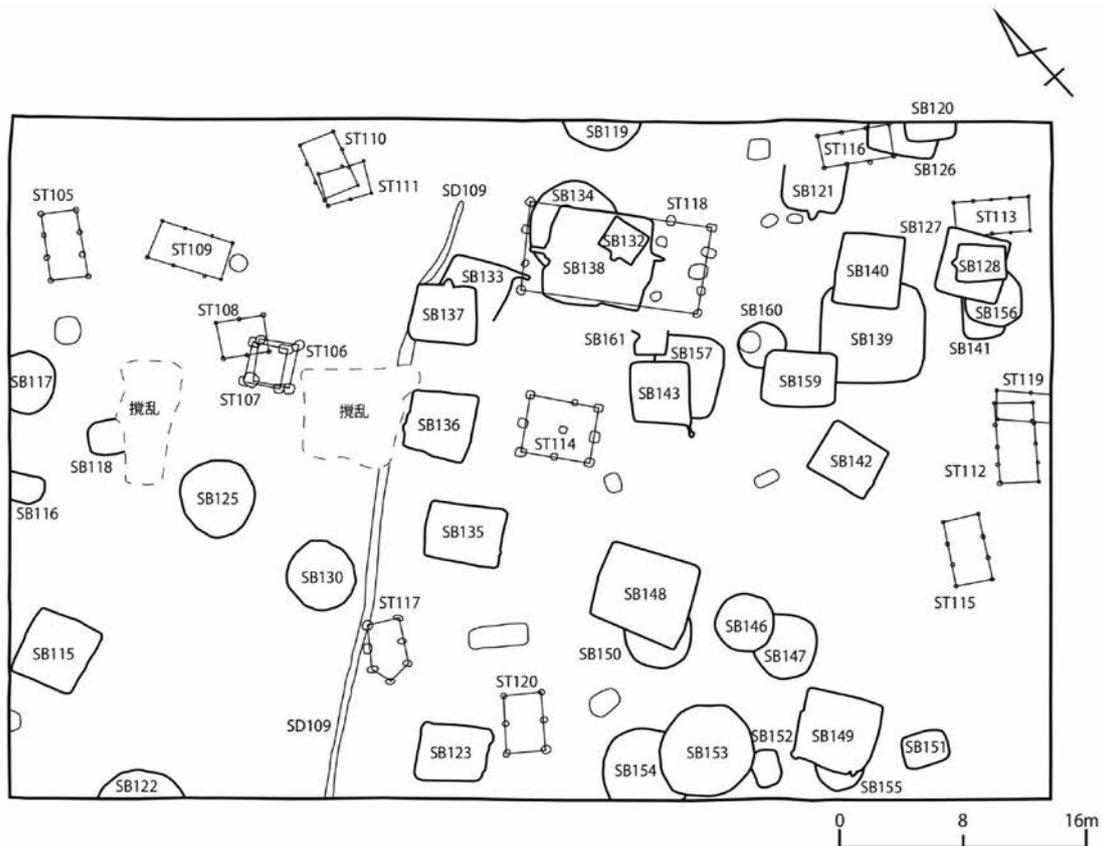


図12 南大原地区 遺構概略図



図13 南大原地区 SB139 竪穴建物内集石



図14 南大原地区 SB142カマド

令和7年度調査の成果

本年度の調査成果で注目されるのは、8世紀代～10世紀前半まで連綿と集落が営まれてきた南大原地籍に対して、北大原・舞台地籍は10世紀前半に突如として集落が形成され、それが一旦途絶え、再び11世紀代に集落が形成される状況が把握できたことである。興味深いのは、双方とも10世紀前半で集落が途絶えることである。こうした集落の消長の要因は、千曲川の氾濫状況のみならず、荘園制度等の社会情勢の動きが絡んでいると考えたい。

また、南大原地籍の弥生時代中期後半の竪穴建物跡はいずれも中央土坑を有し、管玉が複数個出土する状況であった。管玉製作を明確に示す遺物の出土は少なかったものの、弥生時代中期後半に一般的な集落とは異なる状況が把握された。いずれにせよ、今後の調査の進展及び出土遺物の分析が期待される。
(上田典男)

(2) かわだじょうりいせき 川田条里遺跡

国補（仮称）若穂スマート IC 整備事業

所在地及び交通案内：長野市若穂川田1934-1ほか。上信越自動車道長野 IC より北東約 7 km。

遺跡の立地環境：長野盆地の東部に位置し、千曲川右岸の後背湿地に立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.4.15～12.17	6,312㎡	中野亮一 小山峻輝 鹿田奨之

検出遺構

遺構の種類	数	時期
掘立柱建物跡	29 (31)	中世（鎌倉～室町時代）
柵列跡	10 (11)	中世（鎌倉～室町時代）
土坑	806 (906)	中世（鎌倉～室町時代）
溝跡	21 (28)	中世（鎌倉～室町時代）
炉跡	1 (1)	中世（鎌倉～室町時代）
竪穴状遺構	8 (8)	中世（鎌倉～室町時代）
貼床状遺構	2 (2)	中世（鎌倉～室町時代）
水田跡	6 (8)	弥生時代～近世
畦畔	2 (6)	弥生時代～平安時代 (芯材を伴う畦畔 2 (6))

() 合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	古墳時代、平安時代、中世、近世
木製品	古墳時代～平安時代（畦芯材）、中世（漆器）
その他	釘・鉄滓・種実・馬歯（中世）

調査の概要

本遺跡は、1989～1990年度に上信越自動車道建設に伴う発掘調査を当センターが実施し、弥生時代中期から近世に及ぶ水田跡を検出した。また、1999年度に長野市教育委員会は、川田小学校に隣



図15 遺跡の位置（1：50,000長野）

接する川田保育園（現 認定こども園川田）の改築工事に伴う発掘調査を実施し、15世紀後半（室町時代）の川田氏館跡に関する工作遺構を発見した。

国補（仮称）若穂スマート IC 整備事業に伴う発掘調査は、2022年度から当センターが着手し、2023年度調査で、長野市教育委員会が発見した川田氏館跡の遺構群より約200年古い13世紀頃（鎌倉時代）の屋敷地がみつき、当該地の土地利用が中世前期に遡る新たな発見となった。

本年度発掘調査の目的は、上信越自動車道地点から広がる水田跡の確認と、川田氏館跡などに関連する中世の遺構範囲の広がり把握することである。

調査区は安全対策を考慮しつつ、保護措置が必要とされた合計6カ所を設定し、調査を進めた。また発掘作業は、(株)鳥田組の支援を受け、実施した。

検出面は4面で、第1検出面から第3検出面が中世の遺構検出面に該当し、ここでは第1検出面を中世 a 面、第2検出面を中世 b 面、第3検出面を中世 c 面と呼ぶ。第4検出面は、奈良時代頃の水田跡検出面である。

中世 a 面では15世紀後半の内耳土器が出土し、中世 b 面・c 面からは、ともに13世紀から15世紀初めの陶磁器が出土した。中世 b 面・中世 c 面の時期差はあまりないと考えられる。

中世の遺構調査（図16～18）

中世 a 面は、市道町川田大門線（以下「市道」と呼ぶ）南側の T14 調査区のみで検出した。

同調査区の掘立柱建物跡（ST04）は、鉄片や

鉄を溶かすために使う坩堝片などが出土していることから、鍛冶等を行う工作遺構であったと考えられる。

中世 b 面では、多くの掘立柱建物跡、溝跡、土

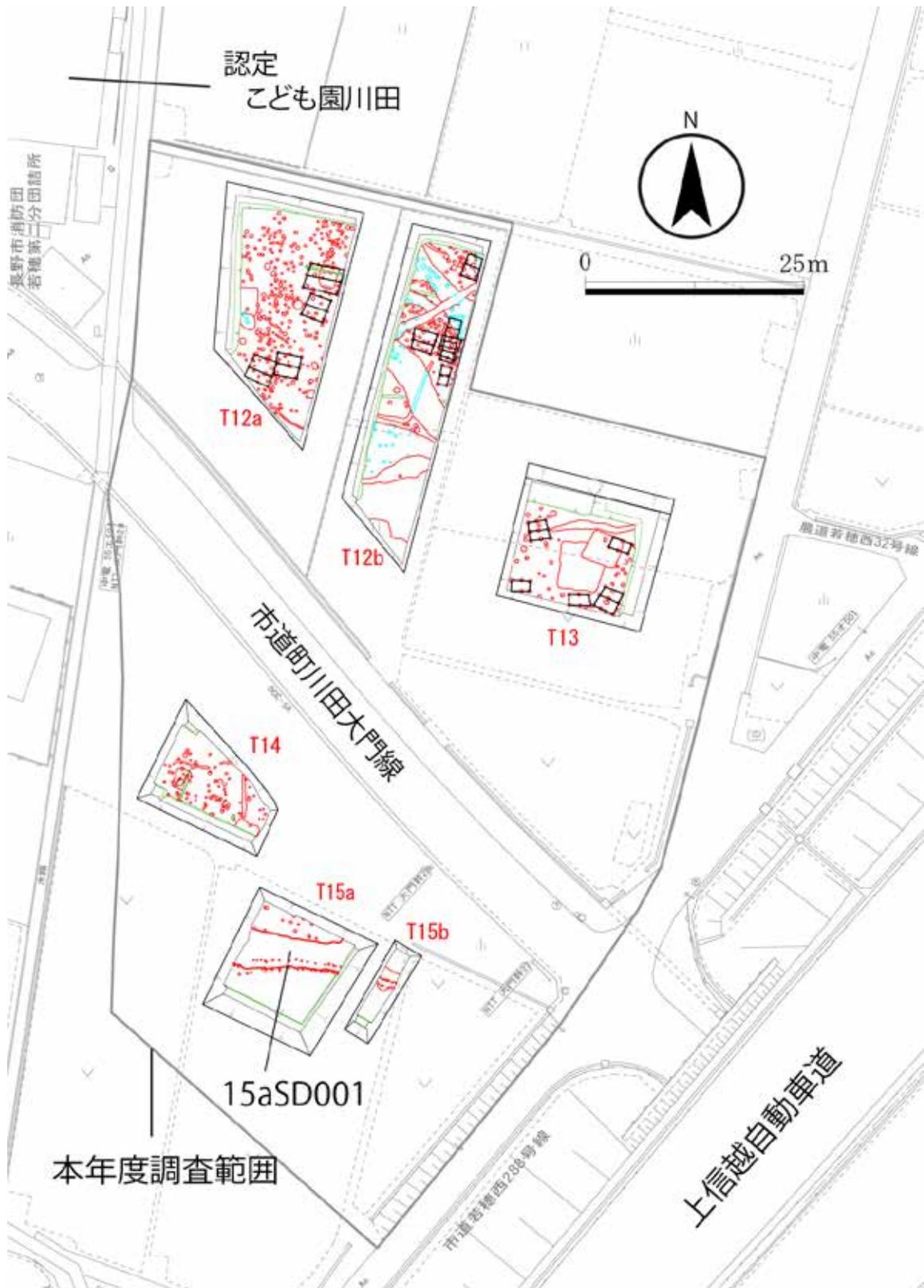


図16 第2検出面（中世 b 面）遺構分布図



図17 T15a調査区 SD001 (東から)

坑などを検出し、本年度調査範囲の全域に遺構が分布する(図16)。

市道南側のT15a調査区では、幅約3m、深さ約40cmの溝跡(T15aSD001)が見つかり、この溝跡は、底部が東から西に傾斜し、ほぼ東西方向に直線状に延びる。市道北側から続く中世遺構はこの溝跡を境に、南側に広がらない(図17)。

また、溝跡に沿う杭列もみつき、一部は検出面から深さ1m以上に達した。溝跡とそれに沿う杭列は、中世集落(館跡)の南端を示す遺構と考えられ、今年度調査の大きな成果である。

中世c面では、硬い床面をもつ貼床状遺構

(T12aSX002)と、地面を方形に掘り込んでつくられた竪穴状遺構を検出した(図18)。

中世の建物は掘立柱建物が主流であり、竪穴建物や貼床を使う建物は少数である。発見された貼床状遺構の周囲で鉄滓や羽口片などが出土したため、T12aSX002は鍛冶に関連する場所であった可能性がある。

また、竪穴状遺構は貼床状遺構に隣接して2基検出した。貼床状遺構との関連が想定される。中世館跡の周辺に「工作遺構」がある例は、長野市栗田城跡などでも確認されている。

中世の出土遺物

中世b面・中世c面で出土した土器・陶磁器類は、カワラケ、能登半島の珠洲のすり鉢、尾張型の片口鉢、中国の青磁・白磁などが出土した。出土遺物からは多様な地域と広く交流があったことがうかがえる。

今後の整理作業の結果によっては補正する可能性もあるが、中世b面・中世c面の出土遺物は、2023年度調査出土の鎌倉時代期遺物より約100年新しく、1999年度調査出土遺物よりはやや古いと



図18 T12a調査区 SX002 (東から)

思われる。そのため、川田条里遺跡での営みは、長期にわたったことが推定される。

発掘調査範囲で、水田跡以外に建物跡・溝跡など集落の生活に関わりの深い遺構を確認できるのは中世に限られる。中世期に川田氏館跡が存在したことと関係があるのだろう。

水田跡の調査（図19・20）

水田層の調査は、主に調査区壁面の断面観察を実施する一方で、地表面から約130cm下の泥炭層直下の水田層は、検出が容易かつ遺存状況が良好なため、すべての調査区で面的調査を実施した。なお、水田跡は調査範囲全域で検出している。

調査区壁面の断面観察では、中世面より上層に2面、下層に4面の少なくとも計6面の水田層を確認した。上層の2面は、中世面より上層で、唐津焼などが出土したことから近世の水田と判断した。下層の4面は、2023年度調査時に行った放射性炭素年代測定で、6世紀後半～8世紀後半頃という測定値が得られた泥炭層を挟み、上・下の層にある。泥炭層の上層の1面が平安時代、泥炭層の下層の3面は古墳時代から奈良時代と推定した。なお、中世期の水田跡は確認できなかった。

面的調査を実施した泥炭層直下の水田層では、直交する畦畔などを確認し、当時の水田区画が一部明らかになった。この水田層は、同じく泥炭層直下で発見された上信越自動車道調査地点B2区第3水田層に相当すると考えられる。また、T13調査区でみつかった水田区画は一辺約5mとやや小区画で、上信越自動車道調査地点の結果を参照すると、奈良時代頃の水田の可能性はある（図19）。

さて、2023年度調査において泥炭層下の水田畦畔に高床倉庫の建築部材など再利用した芯材を確認した。これを受け、本年度調査では芯材の確認のため、検出した畦畔の断割りや調査区外周にてトレンチを入れ、断面観察を実施した。

その結果、T12b調査区において、泥炭層直下の水田調査で畦畔を伴う畦畔2条を確認した（図20）。ただし、この2条の畦畔は当初泥炭層直



図19 T13調査区 水田面検出状況（南東から）



図20 T12b調査区 畦畔材出土状況（西から）

下で畦畔の検出を試みた際に発見されたものではなく、水田層を掘り下げる過程で発見した。そのため、泥炭層直下ではなく、さらに下層の水田層に伴う芯材を検出した可能性がある。その芯材の年代測定を実施し、より確度を高める検討を今後行う。

現在、遺跡周辺の古環境復元のため、複数の調査区を対象に、プラント・オパール分析や放射性炭素年代測定、花粉分析等を実施している。その結果を踏まえ、遺跡周辺の古環境が川田集落の営みに与えた影響等を引き続き検討する。

来年度の調査

来年度調査は調査対象範囲の北側部分が主となる。本年度調査で発見した水田跡と中世遺構がどこまで広がるのか、その把握に努めたい。

（中野亮一）

(3) 南栗遺跡

みなみくりいせき

松本 JCT 建設事業

所在地および交通案内：松本市島立4981-1・5007-2ほか、和田1480-4ほか。長野自動車道松本 IC から南に 3 km。

遺跡の立地環境：鎖川左岸の自然堤防背後の緩斜面に立地。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.4.17~12.16	5,200㎡	廣田和穂 大泰司統 鈴木時夫 二ノ宮由大

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	119 (254)	古墳時代末~平安時代
掘立柱建物跡	0 (11)	奈良時代~平安時代
土坑	374 (647)	奈良時代~平安時代、中世
溝跡	7 (19)	奈良時代~平安時代、中世
柵列跡	6 (6)	奈良時代~平安時代
自然流路跡	19 (19)	

() 内は合計数

地区別遺構数

	竪穴建物跡	土坑	溝跡	不明遺構	柵列	自然流路
1区	14	37	4	2		1
3区	77	291	3		6	18
6区	28	46				
合計	119	374	7		6	19

3区遺構数内訳

	竪穴建物跡	土坑	溝跡	柵列	自然流路
北工区2面	24	86		1	5
北工区1面	33	110	2	2	4
南工区2面	20	95	1	3	9
合計	77	291	3	6	18

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・土製品・陶磁器	奈良時代~平安時代 (須恵器、土師器、灰釉陶器)、羽口
石器・石製品	奈良時代~平安時代 (砥石)
金属製品	奈良時代~平安時代 (鉄斧、刀子、鎌等)



図21 遺跡の位置 (1:50,000 松本)

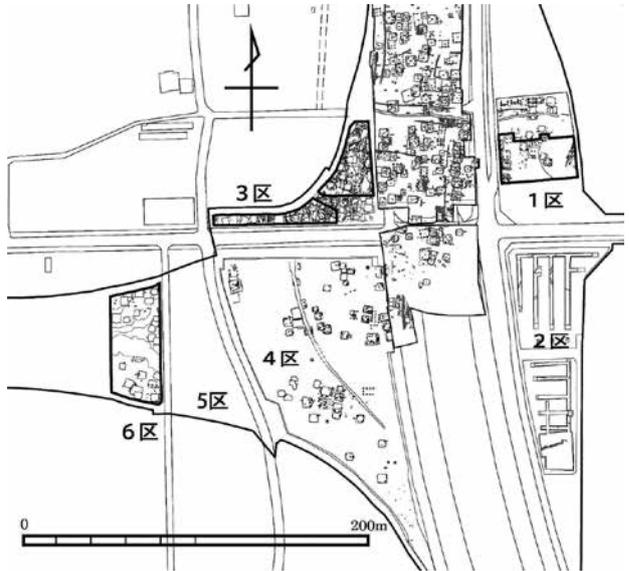


図22 南栗遺跡本年度調査区 (1・3・6区：太枠部)

調査の概要

南栗遺跡は、1983~1999年に圃場整備に伴う発掘調査を松本市教育委員会が行い、1985・1986年に当センターが長野自動車道の建設に伴う発掘調査を実施した。

2022年からは、中部縦貫自動車道と長野自動車道を結ぶ松本 JCT の建設に伴う発掘調査を当センターが継続的に実施している。

今年度の調査区は昨年度同様、長野自動車道建設時における調査区の東西両側に接している。なお、発掘調査の実施にあたり、(株)シン技術コンサル、(株)島田組の支援を受けた。

本年度調査では奈良時代・平安時代の遺構・遺物が主と考えるが、今後の整理作業の結果を踏まえ、補正することがある。以下、地区別に調査状況を報告する。



図23 1区遺構分布図



図26 SB1028 カマド調査状況 (西から)



図24 高速道路東側の1区全景 (東南東から)



図27 SK1073 遺物出土状況 (南西から)



図25 SB1028 (正面) SB1027 (手前左手) (西から)

1区

1区(図23・24)では、特徴的な遺構として重複する竪穴建物跡SB1027、SB1028(図25・26)があり、壁柱穴が巡る。同類の形状はこの2基のみであり、近い時期と考えられる。時期はSB1028が出土遺物から9世紀中頃と推定した。SK1073(図27)からは刀子と砥石が出土し、墓跡の可能性はある。正確な時期は不明だが、埋土からは9世紀・11世紀頃の土器が出土した。

3区

3区(図28・29・30)は昨年度に引き続き2面の調査となった。昨年度、農作業道部分の調査完了を優先したため、北側の工区と南側の工区に分けて調査を実施した。南側工区の1面目は昨年度終了したため、本年度は南側工区2面目の調査から開始し、北側工区1面目、2面目と調査を進めた。特徴的な遺構として、1面目ではカマドが3基並ぶSB3135、床面に地床炉を2基持つSB3144、付属遺構2基にそれぞれ甕が埋設されていたSB3139(図31)がある。2つの甕は9世紀後半から10世紀頃と思われ、出土状況から多少の時期差がある。2面目では建築部材と思われる炭化材が出土したSB3090、カマド火床面の最下部から合わせ口で置かれた土師器杯を検出したSB3172(図32)がある。2つの坏は9世紀初め頃と思われる。昨年度、1面目は平安時代以降、2面目は奈良時代頃と推定したが、整理作業の結果によっては面の解釈や時期の再検討を要する。

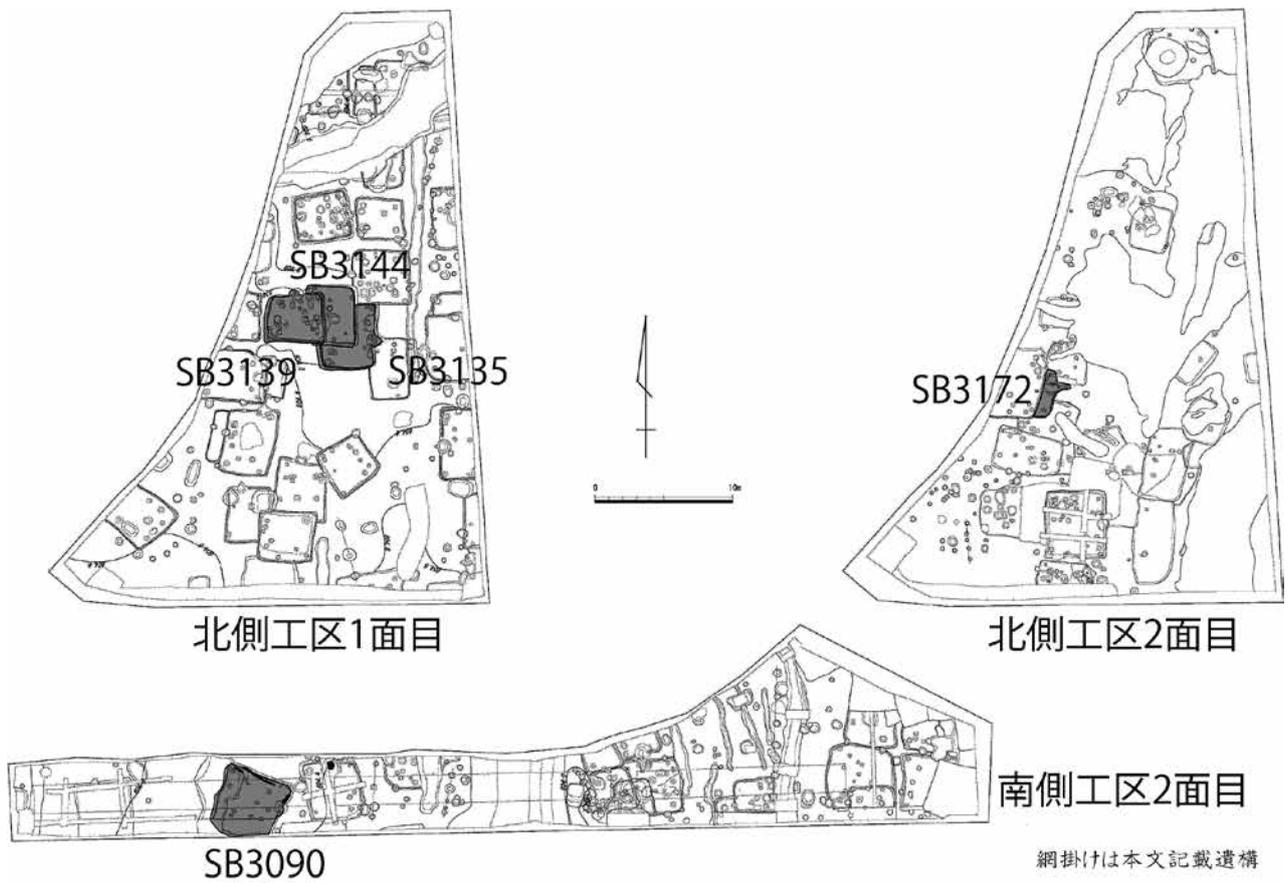


図28 3区遺構分布図



図29 3区南側工区2面目全景（東から）



図31 SB3139 P18断面（南から）



図30 3区北側工区1面目全景（北から）



図32 SB3172 カマド遺物出土状況（北から）

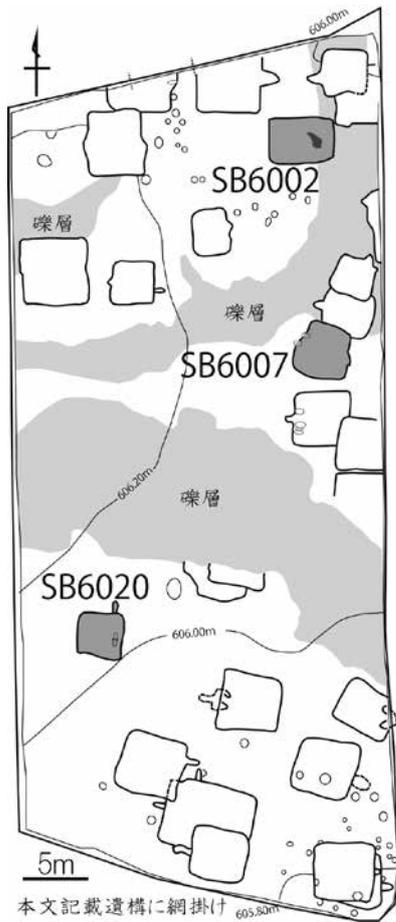


図33 6区遺構分布図



図34 6区全景（南南西から）

6区

6区（図33・34）では数軒の竪穴建物跡について、耕作の削平がカマド煙道部にまで及ばず、SB6007（図35）のように、建物の廃絶後にカマドに用いた袖石などを引き抜いて積み替える等、意図的な破壊と思われる。また、SB6002（図36）からは鍛冶炉と思われる遺構を検出した。SB6020（図37）の埋土からは、完形の長胴甕2個体が合口状態で出土した。寝かせた甕の上部は崩れ



図35 SB6007 カマド調査状況（東から）



図36 SB6002 鍛冶炉とした痕跡（南西から）



図37 SB6020 合口状態で出土した甕（北西から）

ており、図37はその部分を取り除いた状態の写真である。甕内部の土砂から歯等の出土はなかった。（大泰司 統）

参考文献

- 松本市教育委員会1984『松本市島立南栗遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター1990a『南栗遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター1990b『総論編』
- 松本市教育委員会2000『芝沢遺跡Ⅰ・Ⅱ 南栗遺跡Ⅳ・Ⅴ』
- 松本市教育委員会2001『南栗遺跡Ⅵ』

(4) やすづか こぶんぐん 安塚古墳群

一般国道158号（松本波田道路）改築工事

所在地及び交通案内：松本市和田133-3ほか。アルピコ交通上高地線新村駅から南西へ750m。

遺跡の立地環境：梓川の右岸、東筑摩郡山形村から流れる唐沢川が形成した扇状地の扇端部に立地する。調査対象地は古墳群の南端に位置する。遺跡の東側には秋葉原古墳群（1982年度に松本市教育委員会調査）が隣接し、西側には真光寺遺跡・真光寺古墳群（2020～2024年度に当センター調査）が分布する。

発掘期間等

調査期間	調査対象面積	調査担当者
2025.4.17～11.28	4,900㎡	河西克造

検出遺構

遺構の種類	数	時期
古墳（石室）	1（4）	古墳～奈良時代 （第16号古墳は礎石建物跡と判明）
マウンド	1（1）	中世以降（礎石建物跡・集石の基礎）
礎石建物跡	1（1）	中世以降
火葬遺構	10（10）	中世以降
集石	3（5）	中世以降2、近世以降1 （R5確認1基は遺構ではないと判明）
土坑	42（117）	古代1、中世以降12、時期不明29 （R5確認9基は遺構ではないと判明）
溝跡	4（9）	中世以降
自然流路	2（2）	中世以前
竪穴状遺構	2（3）	時期不明
柵列	1（1）	時期不明

（ ）合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文、古墳～古代、中世、近世
石器	縄文
金属製品	中世（銭貨、刀子）
その他	中世（骨） 古墳～古代、中世、時期不明（炭化物）

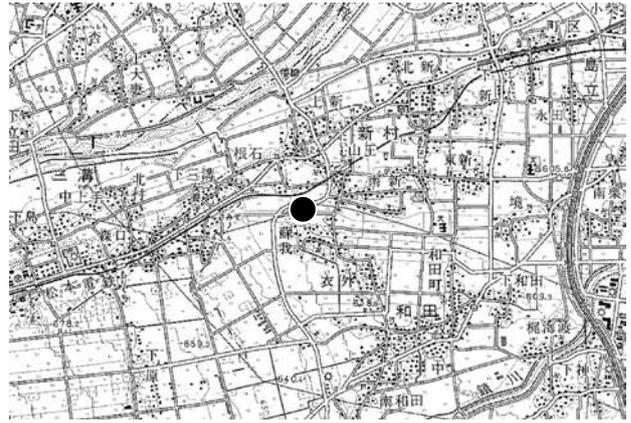


図38 遺跡の位置（1：50,000 松本）

調査の概要

安塚古墳群は、1978年に圃場整備事業に伴う発掘調査を松本市教育委員会（現松本市文化観光部文化財課）が実施し、9基の古墳を調査した。

松本波田道路事業用地は、遺跡範囲の南端を東西方向に横断し、調査対象面積は21,000㎡に及ぶ。事業用地内では、2020・2023年度に松本市教育委員会が行った試掘調査で2基、2023年度に当センターが行った確認調査で2基の古墳が確認されている。

当センターによる調査は、2022年度に開始し、本年度は4年目となる。

調査では、便宜上、既存の水路等を境界として1～21区の調査区を設定した。調査区の西端を1区とし、東側へ順次番号を付けた。

本調査は2024年度から実施し、同年に第13号古墳を調査した。この古墳の調査の結果、遺跡範囲の南端にも、松本市教育委員会の調査で発見された古墳と同じ構造をもつ7世紀から8世紀の古墳の存在が明らかとなった。

本年度の調査は、2～4区、5区（西）、6～9区で本調査を実施し、12・13区で遺構の存否を確認するためのトレンチ調査を実施した（図39）。なお、調査では（株）島田組の支援を受けた。

第15号古墳の調査

第15号古墳は、第13号古墳の西側に位置し、現地保存されている安塚第6号古墳の真南に位置する。

第15号古墳は、古墳～奈良時代の包含層（基本土層IV層）で確認され、石室（横穴式石室）のみが遺存した（口絵2⑥）。周溝と墳丘は確認され



図39 安塚古墳群 全景（西から・松本市街地方向を臨む）

ておらず、その存否は不明である。石室の最大の特徴は、半地下式の構造をもつ点で、地山を掘削して石室を構築する。また、石室の形状は長方形で、側壁の石は開口部側が遺存しない。形態は第13号古墳と同様に胴長で、無袖と推測される。石室の長軸はN17°Wで、南東に開口部を持つ。この開口部は、竪穴状に立ち上がる形状である。規模は長軸約2.7m、短軸約0.8mを測り、奥壁と側壁には梓川から運搬したと推測される石を用いる。奥壁は地山を掘削して大振りの石を3個立て並べ、側壁は掘り方に埋めた土を基礎とし、石の間にシルト質の土を入れ込み平積みに積み上げられている。石は縦目地が通る状態で積み上げられている点の特徴である。石室の中央部には立柱石と推測される石があることから、石室内は2室に分かれていたものと推測される。床は掘り方底に砂礫を主体とした敷土が施され、敷土の上面から骨片が出土した。

掘り方には砂礫を含む黒褐色土を充填するが、西側の側壁では黒褐色土の下層から炭化材と焼土が確認された（図40）。石室の長辺沿いに溝状の落ち込みを掘削し、落ち込み内に炭化材（自然木）を設置したものである。石室構築時、火を伴



図40 第15号古墳 側壁の下層から出土した炭化材

う行為がなされたと推測される。

なお、石室の検出面と埋土から須恵器等が出土した。遺物は破片が多いが、器形の特徴から8世前半と推測される。古墳の存続期間を示す時期と判断できる。

マウンドを伴う礎石建物跡と集石の調査

本年度、安塚古墳群の遺跡範囲の西端（2区）では中世の包含層が遺存し、中世以降の遺構を確認した。遺構は、礎石建物跡及び集石と、両遺構の基礎を成すマウンド状の遺構（以下、「マウンド」と呼ぶ）、火葬遺構で、葬墓に関するものが主体を占める。安塚古墳群の遺跡範囲内が中世以降も「葬地」として利用されたことが判明し、



図41 中世以降のマウンドと礎石建物跡、集石（西から 点線：建物の範囲、丸印：火葬遺構）

本年度調査の大きな成果と言える。

2区で確認されたマウンドは、長辺約11m、短辺約8m規模で、約0.4mの盛り上がりを確認した（図41）。安塚古墳群一帯は、近世初頭以降に新田開発の開墾や水田耕作がされているが、調査ではこのマウンドを避けて耕作されていることがわかった。

マウンドは盛土を複数層重ねて造成し、盛土上面には礎石建物跡と扁平な河原石を楕円形に並べた集石を構築する。礎石建物跡の形状は正方形で、2間四方で側柱構造と推測される。規模は約4m四方である。礎石の配置から堂宇と思われる。礎石は、方形に近い建物跡の内部を中心に硬化面が分布し、硬化面から中世（16世紀）の内耳土器と銭貨（銭種不明）が出土した。また、建物内部を中心に火葬骨と炭化物が散在（図42）したため、信仰もしくは宗教に関する礎石建物跡と考えられる。

一方、集石の分布範囲では、石で囲まれた内部から微細な火葬骨と炭化物が出土したが、その下部に落ち込みは確認できなかった。さらに、マウンドの盛土を除去した面で中世墓と火葬遺構を確



図42 マウンドに散在する火葬骨と炭化物

認した（図43）。中世墓には、拳大から人頭大の石を巡らせ、内部から骨がまとまって出土した墓や、墓の底面から木質部が付着した銭貨（銭種不明）と2枚重なる銭貨（北宋銭、銭種不明）が出土した事例がある（図44）。中世墓と火葬遺構の詳細な時期は不明であるが、中世墓と火葬遺構の上層を破壊してマウンドが造成されている興味深い事例である。

火葬遺構の調査

2区と3区では、遺体を焼却した火葬遺構が10基確認された。特に2区では、マウンド（礎石建物跡）の周囲を巡るように火葬遺構が分布し（図



図43 マウンドの下層から発見された中世墓（北から）



図45 石が積まれている棺台



図44 中世墓の底面から出土した木質部が付着した銭貨（左）と2枚重なる銭貨（右）



図46 坑底溝から出土した火葬骨と炭化物

41)、マウンドの盛土を切る火葬遺構も確認された。

火葬遺構は、形状・規模の点で分類が可能であり、形状は、長方形で西側に煙突状の突出部を設け、規模は、長辺が約1.2～1.5m、短辺が約0.8～0.9mを測るものが大半である。狭川真一氏が示した一般的な規模よりやや大きいものである（狭川2011）。

火葬遺構は、壁が被熱により赤色化し、短辺方向には棺を安置するために設置した棺台の石が2列並ぶ。さらに、棺台と棺台の間には溝（以下、「坑底溝」）が設けられ、この坑底溝が突出部に接続する。火葬遺構を掘削した結果、埋土の中層には微細な火葬骨と炭化物の混合層が堆積し、その下では長辺方向の壁沿いに短い炭化材が並び出土した。さらに棺台近くと坑底溝から火葬骨と炭化物（炭化材）が確認された。これらの出土状況から、壁沿いの短い炭化物は薪、坑底溝内の炭化物は棺もしくは棺の下で燃やした材木の可能性がある。

今回調査した火葬遺構は、棺台と炭化物（炭化材）などが良好に遺存し、火葬の実態を把握することができた。なお、火葬遺構からは、銭貨が出土した。宋銭が大半を占めるが、永樂通宝（明銭、初鑄年：1408年）が確認された。そのため、マウンド（礎石建物跡）と併存した火葬遺構があると推測できる。

なお、県内において、堂宇と火葬遺構が一体的に検出された例はなく、宗教考古学の視点からもこれらの遺構は極めて重要である。

今後の課題

本年度の調査で、安塚古墳群の調査対象範囲の西側部分が終了した。来年度以降は、残る東側部分を調査し、調査対象範囲全域の遺構分布と土地利用を把握し、それを安塚古墳群の遺跡範囲内で位置づけ、総括することが課題となろう。

（河西克造）

参考文献

狭川真一2011「火葬土坑の検討」『中世墓の考古学』高志書院

(5) 西浦遺跡

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市上郷飯沼2702-5
JR 元善光寺駅から南西約1km。

遺跡の立地環境：天竜川右岸、南東に向かい緩やかに傾斜する低位段丘面、標高約446mに立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.7.22～2025.8.28	454㎡	村井大海 和田晋治 遠藤恵実子 中山雅士

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	2 (18)	古墳時代
土坑	49 (833)	古墳時代
溝跡	4 (35)	古墳時代

() 合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	古墳時代
石器	古墳時代 (打製石包丁、打製石斧)

調査の概要

西浦遺跡は、リニア中央新幹線建設工事に伴い2022年度から発掘調査が実施されており、これまでに弥生時代から古墳時代の竪穴建物跡、方形周溝墓、溝跡などがみついている。本年度の調査区は、2022年度調査のB・C・D区と2024年度調査のB-2区に囲まれた個人住宅だった部分で、建物基礎の鋼管杭が残る。

竪穴建物跡は、2軒が確認された。調査区東隅のSB401は、B区で調査されたSB103の西半部分である。調査区北東隅のSB402は、建物跡の南半部分にあたる床面と主柱穴のみが残存し、主柱穴内から器台の脚部が出土した。これらの竪穴建物跡はいずれも古墳時代前期に属する。



図47 遺跡の位置 (1:50,000 飯田)



図48 本年度調査区

溝跡は、SD401とSD402が調査区内で直交して確認された。南北方向のSD401はC区SD113、B-2区SD309の、東西方向のSD402はB区SD103の延長上に位置する。いずれも規模は上幅30～40cm、深さ約40cmを測り、古墳時代前期のものである。SD401の東側を中心に当該期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が発掘されている。SD401と並行するSD404も含め当該期の集落を区画する柵や塀の基礎の布掘りと推定される。

本年度で西浦遺跡の調査は、すべて終了した。
(和田晋治)



図49 調査区全景 (南から撮影)

(6) 五郎田遺跡

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市座光寺4010ほか及び飯田市座光寺4074ほか。JR 元善光寺駅から南南西約1 km。

遺跡の立地環境：天竜川右岸、南東に向かい傾斜する低位段丘面、標高約430mに立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.4.14～2026.1.6	3,422㎡	村井大海 遠藤恵実子 中山雅士 和田晋治

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	29 (125)	弥生時代、奈良・平安時代、不明
掘立柱建物跡	5 (20)	古墳時代～奈良・平安時代、不明
土坑	419 (1338)	弥生時代、古墳時代 奈良・平安時代
溝跡	20 (44)	弥生時代、古墳時代、不明

() 内は合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代中期・後期、古墳時代、奈良・平安時代
石器・石製品	弥生時代、古墳時代 (石鋏、有肩扇形状石器、石包丁、砥石、まが玉など)
金属製品	奈良・平安時代 (鉄製紡錘車、刀子など)

調査の概要

五郎田遺跡は、2021年度から継続して調査を実施しており、弥生時代から平安時代にかけての集落跡がみつまっている。

本年度は、弥生時代中期～後期、奈良時代及び平安時代の集落跡を調査した。調査区は、2021・2022年度及び2024年度調査区に隣接する1-H地区、2023年度に確認調査を実施した地点に隣接する2-A区及び2-B区、2023年度調査区に隣接する3-B区、3-C区、3-D区である(図51)。なお、本年度の発掘調査は1-H区、2-A区、2-

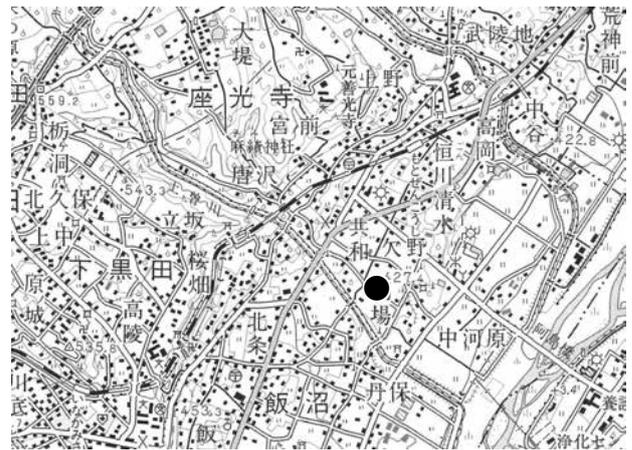
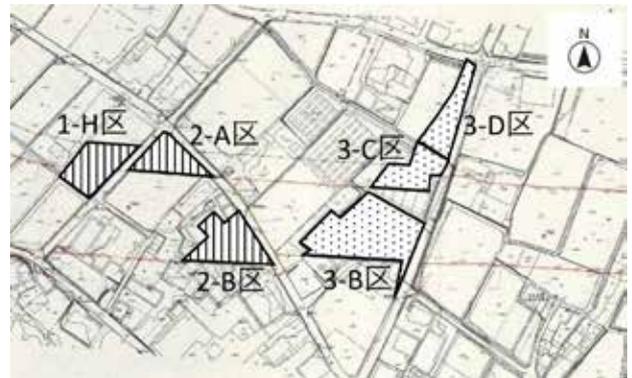


図50 遺跡の位置 (1:50,000 飯田)



■■■■■■ シン技術コンサル発掘作業技術支援導入範囲

■■■■■■ 国際文化財発掘作業技術支援導入範囲

図51 今年度調査区及び調査範囲 (S = 1:4,000)

B区を株式会社シン技術コンサルによる、また3-B区、3-C区、3-D区を国際文化財株式会社による発掘作業技術支援をそれぞれ導入して実施した。

弥生時代中期の遺構及び遺物

弥生時代中期の遺構は3-C区及び3-D区から検出した。6軒の竪穴建物跡を検出し、内3軒は2023年度調査で検出した竪穴建物跡の続きである。平面形は方形、またはやや形の崩れた方形で、大きさは3～4mほどものと、6～7mを測る比較的大形のものの2種がある。SB502からは炉跡を検出している。地床炉で竪穴建物跡のほぼ中央に位置する。これらの竪穴建物跡から北原式の土器及びそれに伴う石器が出土した。

また、2023年度に弥生時代中期後半から後期初頭にかけて3回にわたる土器の廃棄または投棄を想定するような遺物の出土状況を観察した、SD201の続きを3-B区から検出した。本年度調

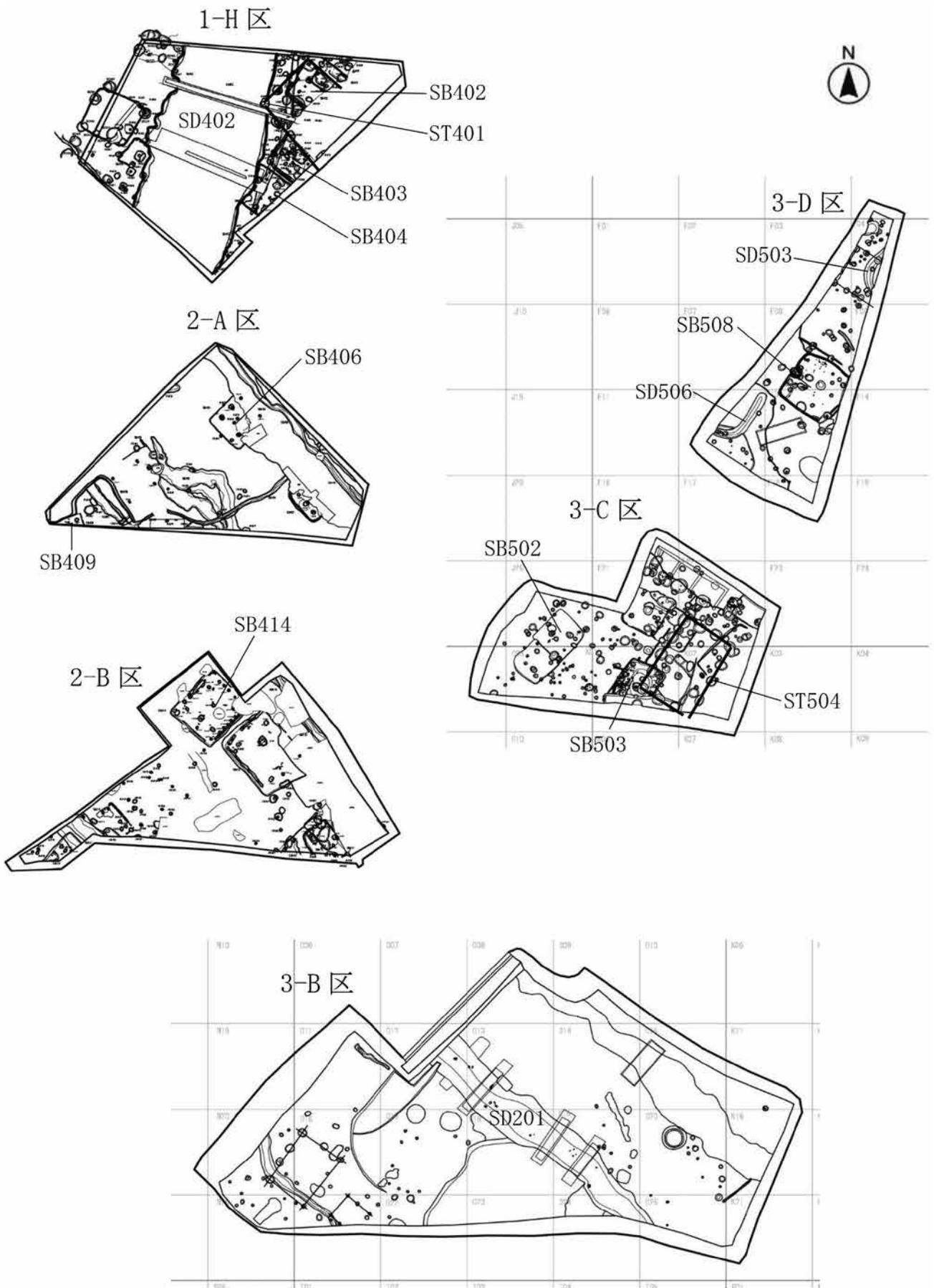


図52 調査区全体図 (S = 1 : 500)



図53 SB502 全景



図55 SB406 全景



図54 SD201 遺物出土状況



図56 SB406 土器埋設炉断面

査では北原式から所謂恒川式の土器が投棄されたような状況で出土したが、遺物出土状況の観察から、時期差を想定することはできなかった。

弥生時代後期の遺構及び遺物

弥生時代後期の遺構は、1-H区、2-A区、2-B区から竪穴建物跡を7軒、また、3-D区から方形周溝墓の溝を1条検出した。

SB402は、約5.5m四方の方形を呈する。炉跡は、住居の中心より西側に位置する。中島式の甕が埋設された土器埋設炉である。

SB406は、SD404に北東部を3分の1ほど削平されている。平面形は長辺約5m、短辺約4mの長方形である。支柱穴は4つで、炉跡は北西側柱穴間のほぼ中心に位置する炉縁石を伴う土器埋設炉である。埋設された土器は中島式の甕である。

SB414は約5m四方の方形を呈する。炉跡は地床炉が2基あり、竪穴建物跡ほぼ中央と南西側柱穴間のほぼ中心に位置する。支柱穴は4つで、壁際に周溝を伴うほか、壁柱穴が並ぶ。これらの竪



図57 SB414 全景

穴建物跡から中島式の土器及び石器が出土した。

これらの竪穴建物跡の分布域から北東方向に100mほど離れた3-D区から、方形周溝墓の溝と推定するSD506を検出した。1辺の長さは5mほど、深さは50cmほどで断面形は逆台形を呈する。この溝跡から中島式のほぼ完形の壺が出土した。同時期の壺とは口縁部の形状が異なり、器面が丁寧に磨かれるなど特徴的な土器で、方形周溝墓に供献した特殊な土器の可能性はある。



図58 SD506 全景



図60 SB503 全景



図59 SD506 遺物出土状況

古墳時代の遺構及び遺物

3-D区からSD503を検出した。須恵器片と高坏の脚部が出土したため、古墳時代の溝と推定する。深さは、30cmから50cmほどで、断面形は半円形である。検出範囲が狭いため、全体を推定することは難しいが、古墳の周溝の可能性はある。

奈良時代の遺構及び遺物

奈良時代の遺構は、3-C区と3-D区から竪穴建物跡を6軒、掘立柱建物跡を2棟検出した。

SB503は約4m四方の方形を呈する竪穴建物跡である。北西側の壁のほぼ中央にカマドがあり、支柱穴を4つ確認した。カマドから鉄製刀子や須恵器坏が、また柱穴から須恵器坏と須恵器盤が出土した。須恵器坏にはヘラ切りのものがみられるため、奈良時代前期のものと推定する。

SB508は約6m四方の方形を呈する竪穴建物跡である。カマドは北西側の壁のほぼ中央にあり、支柱穴を4つ確認した。床の張替えを1度行っていることを確認したが、カマドはそのまま利用し

たようで、カマド内部全体に強い被熱の痕跡が認められた。遺構埋土から須恵器坏や土師器坏をはじめとする多くの遺物が出土しており、ヘラ切りの須恵器坏や高台をもつ須恵器坏がみられる。そのため、奈良時代前期のものと推定する。

SB503及びSB508と軸方向をほぼ同一とする竪穴建物跡を4軒検出した。また、カマドを検出した事例では、カマドの位置は北西側の壁のほぼ中央に位置することで共通する。以上のことから、これらの竪穴建物跡は、同一の区画を意識して造られたと推定でき、ほぼ同時期の奈良時代前期のものと考えられる。

ST504は梁行3間(約5m)桁行4間(約7.5m)の掘立柱建物跡である(口絵⑨)。各柱穴は直径1m以上、検出面からの深さは1m程度ある。非常に大形の掘立柱建物跡である。この掘立柱建物跡はSB503を切るため、この遺構より新しいものと判断できるが、軸の方向は奈良時代前期と推定する竪穴建物跡とほぼ同一である。そのため、これらの竪穴建物跡と同一の区画を意識して建てられた奈良時代前期のものと考えられる。

なお、奈良時代前期は五郎田遺跡の近隣に所在する恒川官衙が成立した時期と重なる。

また、1-H区からST401を検出している。梁行3間(約5m)桁行4間以上(7m以上)、各柱穴は直径1mほどある。大形の掘立柱建物跡である。この掘立柱建物跡は、弥生時代後期の竪穴建物跡を切るため、古墳時代～平安時代のものと考えられる。なお、周辺に位置する平安時代の竪穴建物跡とは軸方向が若干ずれる。



図61 SB503 柱穴 (P2) 須恵器坏及び盤出土状況



図62 SB508 上層床面全景



図63 SB508 カマド全景

平安時代の遺構及び遺物

平安時代の遺構は、1-H区、2-A区、2-B区から竪穴建物跡を8軒検出した。

SB404は、旧土曾川の流路跡と推定するSD402に大半を切られており、全体を推定することができないが、形状は方形を呈すると思われる。床面直上から鉄製紡錘車が2本、そのほか須恵器甕の口縁部が出土している。

SB403は、3m四方以上の方角を呈する竪穴建



図64 ST401 全景



図65 SB404 鉄製紡錘車出土状況



図66 SB403 灰釉陶器皿等出土状況

物跡である。灰釉陶器の皿や鉄製品が出土した。

SB409は、検出範囲が狭く全体を推定することが難しいが、方形を呈すると思われる竪穴建物跡である。土師器坏の大きさには大小の2種が認められ、須恵器坏が出土しない。

平安時代の遺構は須恵器坏が出土するものが多く、時期は恒川官衙が機能した9世紀ごろのものが中心となるが、SB403やSB409のような恒川官衙が機能停止後の10世紀以降のものも、わずかであるが認められる。(村井大海・中山雅士)

(7) ママ下^{いせき}遺跡

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市上郷飯沼1404-2ほか
JR 元善光寺駅から南西約1km

遺跡の立地環境：天竜川右岸、南東に向かい緩やかに傾斜する低位段丘面。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.4.14～2025.12.22	2406㎡	村井大海 和田晋治 遠藤恵実子 中山雅士

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	10	弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代
土坑	223	古墳時代、奈良・平安時代
溝跡	5	奈良・平安時代
氾濫跡	1	古墳時代～奈良・平安時代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器
石器	弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代（打製石包丁、打製石斧、打製石鎌、磨製石鎌、砥石）
土製品	古墳時代、奈良・平安時代（紡錘車）
石製品	古墳時代、奈良・平安時代（白玉、紡錘車）

調査の概要

リニア中央新幹線建設工事に伴う調査である。調査区は全体に建物等による削平を受けていたが、弥生時代から奈良・平安時代にかけての土曾川右岸に広がる集落跡を確認した。

竪穴建物跡は、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の10軒を確認した。弥生時代のSB8は床面上から礫と炭化物とともに完形を含む土器がまともに出て、SB9では炉縁石と土器片を埋設した炉を確認した。古墳時代のSB4は地床炉を持つ中期のものである。土坑は223基を確認した。1・2区を中心に分布し、このうち礎石があるものや柱材が良好に残るものが数基あることから、掘立柱建物跡が複数存在することがうかがわ

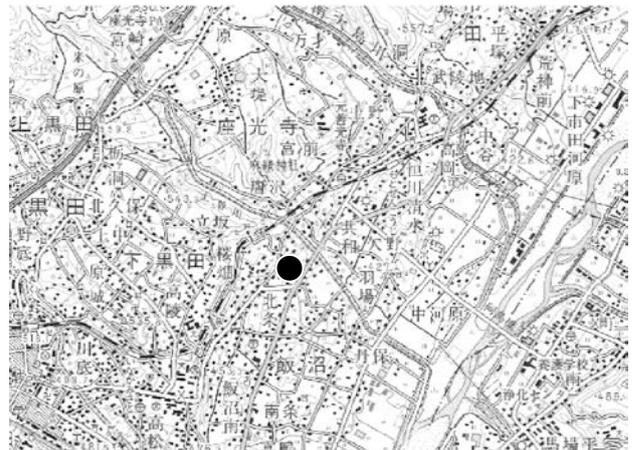


図67 遺跡の位置（1：50,000 飯田）



図68 調査区全景（南東から撮影）



図69 弥生時代竪穴建物跡（SB8）土器出土状況

れる。

1区東側は西から東に向かい緩やかに傾斜しており、黒色土が厚く堆積していた。土曾川の旧氾濫原とみられるもので、古墳時代から奈良・平安時代にかけての土器や石器とともに大型のものを含む木材が多く出土している。来年度は隣接する西側の範囲について調査を実施する予定である。

（遠藤恵実子）

(8) しょうせん じ い せき 正泉寺遺跡・ ざこう じ いしはらい せき 座光寺石原遺跡

社会資本整備総合交付金（広域連携）事業
座光寺上郷道路

所在地及び交通案内：飯田市座光寺4100-1ほか
JR 元善光寺駅から南西へ約0.9km。

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、天竜川支流の土曾川左岸の土石流堆積物上に立地

1. 正泉寺遺跡

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.4.14～2025.12.18	3,930㎡	長谷川桂子 丸山晃平 藤原直人 高橋草太

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	81 (151)	古墳時代 奈良・平安時代
土坑	186 (382)	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代
溝跡・流路跡	5 (6)	弥生時代 奈良・平安時代
掘立柱建物跡	1 (2)	奈良・平安時代か

() 内は合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代、弥生時代、古墳時代 奈良・平安時代
石器	弥生時代（打製石斧、打製石鎌、有肩扇状石器） 奈良・平安時代（砥石）
金属製品	奈良・平安時代（鉄斧、鉄鎌、鉄鋤、紡錘車）

調査の概要

正泉寺遺跡の調査は座光寺上郷道路建設に伴って開始され、今年度で2年目になる。昨年度の調査では古墳時代から奈良・平安時代の竪穴建物跡70軒、土坑196基、弥生時代の方形周溝墓などが検出されており、古墳時代から奈良・平安時代の集落と、弥生時代の墓域が確認された。

本年度の調査範囲は昨年度の調査区の北西に隣接している。便宜的に4区から8区に分割し、集



図70 遺跡の位置（1：50,000 飯田）



図71 調査区全景（南東から）

落域の広がりや弥生時代の様相を把握することを課題として調査を実施した（図72・73）。遺跡は後世のかく乱の影響で削平された範囲もあったが、調査区全体に古墳時代から奈良・平安時代の遺構が広がる様子が確認された。特に7区では竪穴建物跡や土坑の重複が著しく、遺物も多量に出土した（図74）。また南側は土曾川の氾濫によって削られており、当時の集落は現在の土曾川付近まで広がっていた可能性が示唆される。また奈良・平安時代の遺構検出面の下位（第2検出面）からは弥生時代の遺物を含む流路跡が確認された。5区では縄文中期後半を主体とする土器が出土したが、縄文時代の遺構は土坑のみであった（図75）。

奈良・平安時代の竪穴建物跡

竪穴建物跡 SB84は北東角の床面から11世紀ごろと考えられる土師器の完形の耳皿や皿など、計5点が出土した（図76、口絵4⑩）。飯田市教育



図72 調査区全景（南西から）

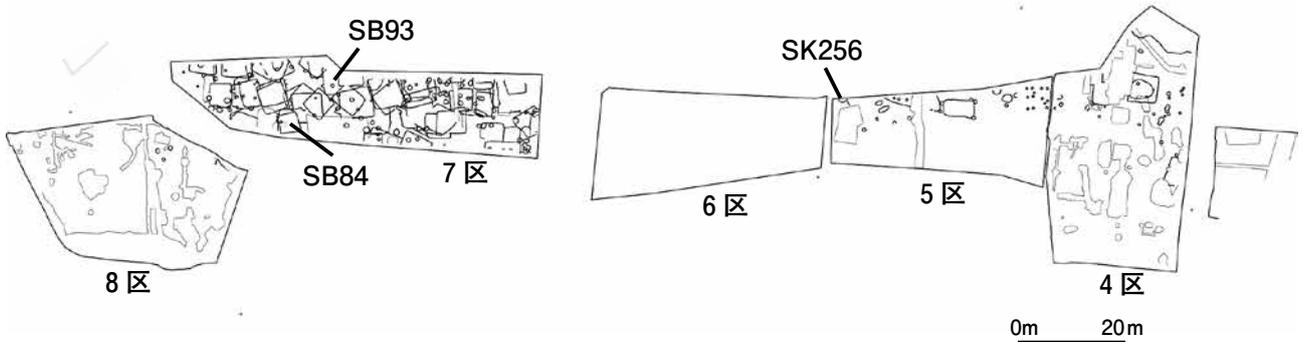


図73 調査区遺構配置図



図74 7区全景（北西から）



図75 土坑（SK256）完掘

委員会によれば飯田地域では当該期の遺物は出土例が少なく、遺構もわずかであるとの指摘を受けた。竪穴建物跡SB93は1辺約5m四方の隅丸方形で、北西壁に石組のカマドが残っていた（図77）。カマドや周囲の床面から土師器の甕や壺が出土した。遺構の重複によりカマドが破壊され、火床のみ認められる竪穴建物跡が大半を占めるな

か、このような石組カマドを持つ竪穴建物跡は複数軒確認された。さらに石を抜き取った痕跡や、カマド付近に石が置かれていた事例も多数確認されたことから、本遺跡で典型的に設置されていたカマドの形態であるといえる。また土坑も多く確認され、中には直径1mほどの円形を呈し、掘り込みが比較的明瞭な土坑が複数確認されている。



図76 竪穴建物跡 (SB84) 遺物出土状況



図77 竪穴建物跡 (SB93) カマド



図78 流路跡 (SD9) 遺物出土状況 (南東から)

その一部は規則的に並ぶことから、掘立柱建物跡の可能性が考えられる。

弥生時代の流路跡 (SD9)

7区では深掘調査で下位に黒色土の分布が認められ、弥生土器が出土したことから奈良・平安時代面の調査後に弥生時代面の調査を行った。その結果調査区南東隅より、長さ約5m、幅約3.5mから5m、深さは検出面より約0.4mから0.5mの流路跡が1条検出された(図78)。この流路跡は蛇行しながら6区方向へと延びると予想される。

埋土より弥生時代中期後半から後期初頭の甕や壺、有肩扇状石器や打製石斧、石鏃などの石器類が多量に出土した(図79・80)。これら遺物はほとんど摩耗しておらず、完形に近い土器も複数個体確認された。

今後の展望

本年度調査では、昨年度調査で確認された奈良・平安時代の集落が北西へ広がることを確認した。一方古墳時代については、昨年度と比較すると遺構遺物ともに稀薄であった。今後は時代ごと



図79 流路跡 (SD 9) 土器出土状況



図80 流路跡 (SD 9) 石器出土状況

の集落範囲について検討を行いたい。

次年度以降は6区と7区北東側を調査する予定である。7区北東側は微高地から緩斜面へと変わる地形となる。微高地上に広がった奈良・平安時代の集落範囲がどのように立地し広がるのか、地形的観点も含め全体像を把握することが課題である。加えて重複関係のある奈良・平安時代の集落変遷についても今後明らかにしていきたい。7区弥生面の流路跡については、流れる方向や全体像を把握することが昨年度に引き続き課題となる。6区では確認調査により弥生時代の竪穴建物跡が確認されていることから、集落の様相を把握することが課題となる。また縄文時代については、飯田市教育委員会が令和7年度に調査した土曾川対岸のママ下遺跡において竪穴建物跡が確認されているため、来年度調査区でも遺構が確認される可能性を視野に入れながら調査を進めたい。

(丸山晃平)

2. 座光寺石原遺跡

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.4.14~2025.12.18	70㎡	長谷川桂子 丸山晃平 藤原直人 高橋草太

検出遺構

遺構の種類	数	時期
土坑	3 (15)	不明

() 内は合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代、奈良・平安時代

座光寺石原遺跡の調査区は令和2年度調査地の東側、令和4年度調査地の北側に隣接する。令和2年度の調査では、表土下の黒色土から古墳の副葬品と考えられる金属製品や玉類が出土した。本年度の調査では、後世のかく乱（整地等）で黒色土は削平され残存せず、そのため古墳に関連する遺物は出土しなかった。遺構は削平が及ばなかった土坑が3基検出された。土坑（SK14）は令和2年度調査でみつかった竪穴状遺構（SB2）と形状が類似するが、連続性は確認できず、出土遺物もないため時期不明である。南東側へ向かって、地山が黄褐色シルト混じり砂層から砂礫層へ変化することは、令和4年度の調査結果と矛盾ない。このことは、隣接地である正泉寺遺跡8区の調査状況からも明らかである。本年度の調査をもって、座光寺上郷道路建設に伴う調査は全て終了した。
(長谷川桂子)



図81 座光寺石原遺跡1区全景

(9) 宮崎下遺跡

みやざきした いせき

社会資本整備総合交付金（広域連携）事業
座光寺上郷道路

所在地及び交通案内：飯田市座光寺650ほか
座光寺スマート IC から南西に1.3km。

遺跡の立地環境：天竜川右岸の中位段丘上の東に
傾斜する緩斜面に立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.11.25～2025.12.18	5,000㎡	藤原直人 高橋草太

検出遺構

遺構の種類	数	時期
溝状遺構	1	不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
石器	縄文時代～弥生時代

調査の概要

宮崎下遺跡は、縄文時代・弥生時代・古墳時代・近世の遺物散布地として飯田市の遺跡等一覧表に登録されている。但し、調査歴はない。

令和6年度、当センターが実施した確認調査によって調査区北東部で溝状の遺構（時期不明）が1条確認されている。本年度の確認調査は、昨年度の調査区の南西部に隣接する5,000㎡を対象に



図83 25T 溝状遺構断面



図82 遺跡の位置（1：50,000 飯田）

土壌の堆積状況と遺構・遺物の有無を確認するため、約2m幅のトレンチを14本掘削した。

調査の結果、今回の調査区の北端に位置する25Tで、ローム層を掘込む北西から南東方向に延びる溝状の落込みを確認した。遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

25Tは、令和8年度調査予定地区に隣接することから、今後、溝状の落込みの規模や性格を明らかにすることができよう。

その他のトレンチについては、表土下には圃場整備による造成土が20～40cm堆積し、その直下には旧水田層、更に下層に黄褐色土・礫層が堆積しており、遺構は確認されなかった。

（藤原直人）



図84 トレンチ配置図

(10) 藪越遺跡

やぶのこしいせき

国補道路改築（地域連携）事業

所在地および交通案内：飯田市上郷飯沼3406-1
ほか JR 伊那上郷駅から南東約 1 km。

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、栗沢川左岸の土石流堆積物上に立地。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.4.17～2025.12.18	600㎡	関杏介 島田亮仁

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	23 (30)	古墳時代～奈良・平安時代
土坑	33 (45)	古墳時代～奈良・平安時代
溝跡	4 (9)	古墳時代～奈良・平安時代

() 内は合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代～奈良・平安時代（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器など）
土製品	古墳時代～奈良・平安時代（土製紡錘車）
石器	弥生時代～古墳時代（打製石斧、磨製石鏃、砥石など）
金属製品	奈良・平安時代（刀子）

調査の概要

飯田市教育委員会等によりこれまで発掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡の存在が明らかになっている。2022年から国道153号飯田市飯田北改良に伴い長野県埋蔵文化

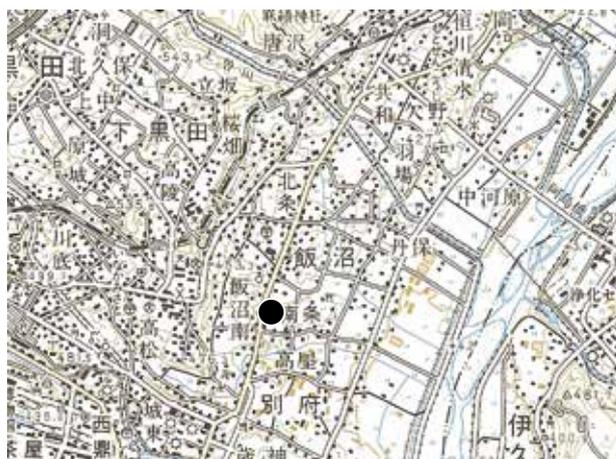


図85 遺跡の位置（1：50,000 飯田）

財センターが調査を行っている。

本年度は2022年の調査区に隣接する600㎡の調査を行った。調査区内北側から一辺が約6mの隅丸方形で、主柱に礎石をもち、壁際にも石を並べる竪穴建物跡が見つかった。同様の構造をもつ竪穴建物跡は飯田下伊那地域では4例目となる。他の遺跡の例をみると、円面硯や馬具等、貴重な遺物が出土している例が多い。藪越遺跡で見つかった竪穴建物跡も、そのような物が検出されたことから、集落内で特殊な建物であった可能性がある。

今後の課題

これまでの調査で弥生時代から奈良・平安時代を通して一定の規模で集落が存在することが分かった。来年度は弥生面と隣接区域の調査を行う予定であり、弥生時代～奈良・平安時代の集落の広がり进行を明らかにしていきたい。（関 杏介）



図86 藪越遺跡全景

(11) たかやいせき 高屋遺跡

国補道路改築（地域連携）事業

所在地及び交通案内：飯田市上郷別府1697-1ほか
JR 伊那上郷駅から南東約1km。

遺跡の立地環境：天竜川右岸の低位段丘上で、栗沢川右岸の土石流堆積物上に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2025.4.17～2025.9.18	1,440㎡	関杏介 島田亮仁

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	1 (8)	古墳時代～古代
掘立柱建物跡	(3)	古代
土坑	79 (265)	弥生時代～中世
溝跡・流路跡	29 (39)	弥生時代～中世
円形周溝墓	2	弥生時代
遺物集中	(1)	古墳時代

() 内は合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代、古墳時代（土師器、須恵器）、古代（土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器）
土製品	古墳時代（勾玉）
石器	弥生時代（打製石斧）
金属製品	古墳時代～古代（不明）

調査の概要

国道153号飯田バイパス建設に先立ち、1996・1997年度に飯田市教育委員会によって調査が行わ



図88 高屋遺跡全景（北から）

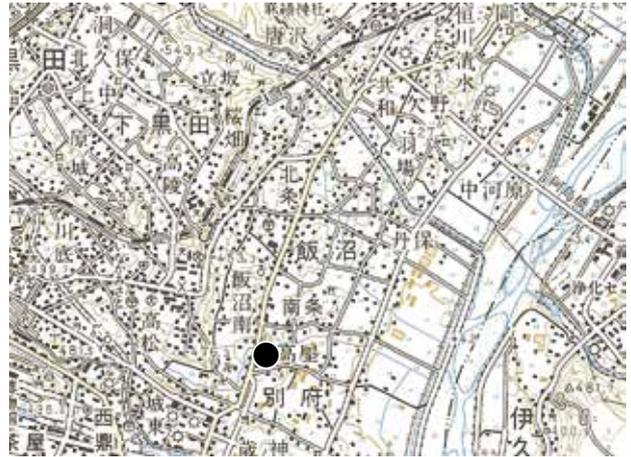


図87 遺跡の位置（1：50,000飯田）

れている。本年度調査範囲の南方の高屋交差点付近では、弥生時代から中世に至る墓域の広がり確認された。また、2022・2023年度の長野県埋蔵文化財センターの調査では、北西方向に流れる流路跡の左岸に奈良・平安時代の集落跡が見つかった。今年度は2023年度調査区（2区）の南側に隣接する1,440㎡の調査を行った。

調査の成果

遺構は後世の攪乱や削平が著しく、遺存状況は良好ではなかった。調査区北側から西側にかけて、2区で確認された自然流路跡（SD06）のつづきを検出した。堆積状況は、大きく下部の拳大から人頭大の自然礫を含む土石流堆積物と上部の黒褐色系粘土質砂に分かれている。下部では古墳時代を主体とした遺物が、上部は奈良・平安時代を中心とした遺物が多く出土した。また、平面的には左岸側（西側）に遺物が多く出土する傾向を確認した。竪穴建物跡は流路跡の右岸で1軒を確認し、長軸約3.0m、短軸約2.2mの小規模なものである。カマドや柱穴などは確認されず、遺物もわずかな為、帰属時期は不明である。また、流路跡の右岸では円形に巡る溝を確認し、埋土から弥生時代後期の壺が出土した。残存直径約8.3mの円形周溝墓と考えられる。中央部は攪乱のため埋設施設の確認はできなかった。

今後は、遺構・遺物の整理作業を進めるとともに、過去の飯田市教育委員会の調査成果や周辺遺跡の動向も含め、遺跡の様相を考えていく必要がある。（島田 亮仁）

Ⅲ 整理作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容（作業）	整理中の主な成果
長沼城跡	長野市	長沼地区河川防災 ステーション整備事業	遺構図修正・トレース 全体図作成 土器接合・復元 遺物実測・トレース 文献史料の収集 金属製品応急的保存処理 出土骨の鑑定	出土遺物から各平場の様相が分かってきた。二ノ丸推定地は、16世紀中頃から後半の瀬戸美濃焼が主体で、江戸時代に入ってから空間利用されていたことが窺える。また、金属製品の出土も多く、小鍛冶の痕跡と考えられる土坑も検出され、金属製品を再生産していた可能性がある。北三ノ丸推定地は、コメヤオオムギなどの多量の炭化物和焼けた壁材の出土から、穀物庫があったと想定した。また、カワラケや内耳鍋などの在土土師器や、他の平場ではほとんどみられない越前焼の甕などが出土しているが、いずれも小破片で、城内で使用されていた器の廃棄場所の可能性もある。武家屋敷推定地は、第1から4面までの全段階を確認できた唯一の平場で、その変遷を捉えることができた。第4面は武田氏の城改修以前の面で、15世紀代のカワラケや内耳鍋が主体に出土している。第3面は甲州系の特徴を持つカワラケが含まれており、本面が武田氏の城改修段階に当たると考えられる。第1・2面の遺物組成は中世から近世への転換を示すものであった。
塩崎遺跡群	長野市	一般国道18号 (坂城更埴バイパス) 改築工事	遺構・遺物図版組 遺構・遺物写真版組 観察表整備 原稿執筆	各時代の概要が分かってきた。弥生時代前期末～中期初頭：貯蔵穴と土器棺再埋葬を検出。遺物は水式から継続する在地の土器に加え、東海地方、東北南部、北陸・関東等の多系統の土器が出土し、特に遠賀川系の彩文土器片の出土が注目される。弥生時代中期中葉：多様な形態の木棺墓を多数検出。遺物は僅かだが、玉類に加え、石鏃・扁平片刃石斧などの出土もある。弥生時代中期後半：栗林式の2時期の堅穴建物跡、長方形土坑、平地式建物跡、井戸跡を検出。長方形土坑は北信地域の栗林期の遺跡に散見されるが、数多く確認されたのは本遺跡の特徴である。堅穴建物跡からはヒスイなど玉類の石材の石核・剥片も出土し、遺跡内で玉類の製作が行われていた可能性が判明した。弥生時代後期前半～古墳時代初頭：堅穴建物跡や井戸跡、溝跡、木棺墓、円形及び前方後方形の周溝墓等を検出。1辺15mの大形建物跡も検出した。遺物は吉田式・箱清水式を中心に北陸系や、南関東、東北地方の土器が出土。また、木棺墓出土の鉄剣は柄が長い特徴的なもので、鞘の木質が残存し表面には布痕が残る。古墳時代前期：集落跡を検出。注目される遺物は、中実角形支脚片や鉄剣がある。古墳時代中期：カマドを有する堅穴建物跡、古墳周溝などを検出。周溝からはウマ骨が出土し注目された。古墳時代末～奈良時代前半：堅穴建物跡が多く、溝跡によって区画されている。建物跡は建て替えの状況が分かる遺構が多く確認された。注目される遺物は、中空円面硯、鉄製巡方、銀装耳環、畿内系暗文土器、土製カマド材などがある。平安時代前期：小形堅穴建物跡と井戸跡、溝跡、畑跡を検出。概期の洪水砂は千曲川寄りの自然堤防端部と一部遺構埋土に確認された。出土遺物としては、鉄製焼印、石製分銅、青銅製巡方、同蛇尾、皇朝十二銭、木製の大型盤状皿が注目される。
真光寺遺跡・真光寺古墳群	松本市	一般国道158号 (松本波田道路) 改築工事	台帳類点検 遺構図点検・修正 遺構・遺物図トレース 遺構・遺構図仮レイアウト 全体図作成 遺構一覧表作成 遺物観察表作成 金属製品X線透過写真撮影・応急的保存処理 遺構写真選別	成果を報告書に漏れなく掲載できるよう、遺構記録については、図面や台帳類の点検・整理・トレース・仮レイアウト、遺構全体図作成、遺構一覧表作成、遺構写真選別などを、遺物については、選別・実測図の確認・仮レイアウト・トレース、観察表の作成などを行った。また、土坑から出土した緋銭について保存処理やその性格等について整理・検証を進めた。緋銭は、調査区中央にL字に配置された溝跡や柵列の途切れる南西側に位置する土坑から出土している。緋銭は3束出土していて、その出土状況から容器などに入れて土坑内へ納められていた可能性が考えられる。本年度1枚ずつに分離しX線透過写真撮影を行い、その銭種等を観察した。緋銭の総銭貨数は425枚で、判読できたのは404枚、そのうち最も多かったのは「皇宋通寶」（北宋1038年）48枚である。その他に「永樂通寶」（明1408年）31枚等が判読できた。緋銭が埋納された意味等については、今後周囲の遺構との関係を検証し、類似例をあたり明らかにしていく。
川原遺跡	飯田市	防災・安全交付金 (道路)(加速化)事業 ・国補ダム建設(治水ダム)事業	遺構図修正・仮版組 土器接合・復元 遺物の選別・実測 遺物観察表作成	出土遺物から各時代の様相が分かってきた。古墳時代中期：集落出土の土器はほとんどが土師器であり、様々な器種が確認された。特に甕は、その量の多さが特筆される。また、当該地域の土器の系統に乗らない直口短頸壺が出土していて、同時期の類似した資料は、国内でみつけないことができないが、百済地域に近い資料があり、その影響を受けている可能性が考えられる。出土土器・石製品の中で注目されるのは提碇と呼ばれる携帯用の小形の砥石である。腰から提げていたと考えられていて、器面には金属製品を研いだ際にみられる、微細な使用痕を確認することができる。縄文時代後期前半：配石遺構などを検出。下伊那地域に当該期の遺跡は類例が少なく、歴史的意義や位置づけが難しいが、土器の技法や壺形土器の器形に、飛騨地方の影響を受けたものがある。また、木曾谷等にも飛騨地方の影響を受けたと考えられる土器がみられるため、間接的な影響も視野に入れ考えていく。
信州大学医学部所蔵考古資料	松本市	信州大学医学部所蔵考古資料整理支援事業	骨類鑑定 収納テンバコラベル貼付 原稿執筆 目録刊行	戦後、医学部第2解剖学教室が発掘調査した縄文時代から中近世に至る土器、石器のほか人骨を含む動物遺存体があるほか、同教室で収集したと思われる長野県内を中心に国内外の研究史上重要な考古資料である。また、関連資料として埋蔵文化財センターで調査を行った信州大学中央図書館所蔵の考古資料には、旧制松本高等学校が収集あるいは寄贈された多くの貴重な資料が含まれることも明らかになった。

ながぬまじょうあと
(1) 長沼城跡

長沼地区河川防災ステーション整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査

長沼城跡は長野市穂保における千曲川左岸の自然堤防上に位置する。2019年の東日本台風（台風19号）で大規模な浸水被害を受けた当該地に防災ステーションの建設が計画され、34,500㎡が発掘調査の対象となった。2021年から始まった発掘は4年の期間を経て2024年に終了し、本年度からは報告書の刊行に向けて本格整理作業を行っている。

本年度の整理作業の主な内容としては、遺構の図面修正・トレース、全体図の作成、遺物の接合・復元・実測・トレースである。遺構の性格や遺物組成の見解等については、滋賀県立大学名誉教授の中井均氏、駿府城の発掘調査を担当されている静岡市歴史文化課の松井一明氏に御指導いただいた。また、文献調査として長沼城跡や長沼地区に関する中近世史料を129点収集し、現在解釈を加えつつ読み込みを進めているところである。普及啓発活動としてはセンターの地域展と連携し、「掘るしん in 長沼～長沼城跡発掘調査成果報告・講演会」と題して基調報告や講演会、遺物の展示会を実施した。講演会については「Ⅳ 普及公開活動の概要」において詳細を記す。このほか金属製品の保存処理や蛍光X線による成分分析、炭化物の種実同定および年代測定、カワラケ付着煤の脂質分析、出土骨の部位判定およびDNA鑑定を外部委託で実施した。本稿を執筆している現在は分析・鑑定が未了のため、その結果については来年度の年報に記載することとし、以下には整理作業を通して判明した内容を一部抜粋して記す。なお、各平場の名称については近世の長沼城の絵図に記されていたものを参考に、便宜上新たに名付けたものも使用する。

各平場の遺物の様相

二ノ丸推定地の出土遺物をみると、瀬戸美濃焼の時期が16世紀中頃から後半のものが主体である一方、唐津焼や伊万里焼なども他平場と比べて多

主な遺構

遺構の種類	数
土塁（中堀土塁・天王宮・屋敷土塁）	3
堀跡（中堀・内堀・屋敷堀・北三日月堀・南三日月堀）	5
溝跡	29
土坑	309
井戸跡	7
建物跡（竪穴・礎石・掘立柱・門）	18
礎石列・柱穴列	5
炭・焼土範囲	25
礫集中・敷石遺構	27
不明遺構	2
遺物集中	6

主な遺物

遺物の種類	内容
土器・陶磁器	カワラケ、内耳鍋、焙烙、播鉢、火鉢、風炉、瀬戸美濃焼（皿・碗・天目茶碗・播鉢・徳利・水滴など）、唐津焼（皿・碗・播鉢・徳利など）、伊万里焼（皿・碗・徳利など）、越前焼（甕）、青磁碗、白磁皿、染付皿・碗、近現代陶磁器など
土製品	土錘、土製円盤、埴塼、羽口、土鈴、焼土塊など
石製品	五輪塔、石臼、砥石、硯、碁石、浮子など
金属製品	刀、刀子、鎌、足金物、筭、小札、甲冑部品、匙、鉄砲玉、銭、釘隠し、小銅仏、和鏡片、小銅仏、キセル、鉄滓など
木製品	漆椀、曲げ物、木杭など
骨（製品含む）	動物骨（ウマ・ウシ・シカ・魚類など）、貝殻、鼈甲製櫛など



図89 土器接合風景

い傾向がある。唐津焼の時期はおおむねⅠ期～Ⅱ期を主体としながらⅢ期のものも散見され、本平場は江戸時代に入ってから空間利用されていたことが窺える。また金属製品の出土も多く、特に武具の部品とみられるものが多数確認できる。本平場では小鍛冶の痕跡と考えられる土坑を検出し

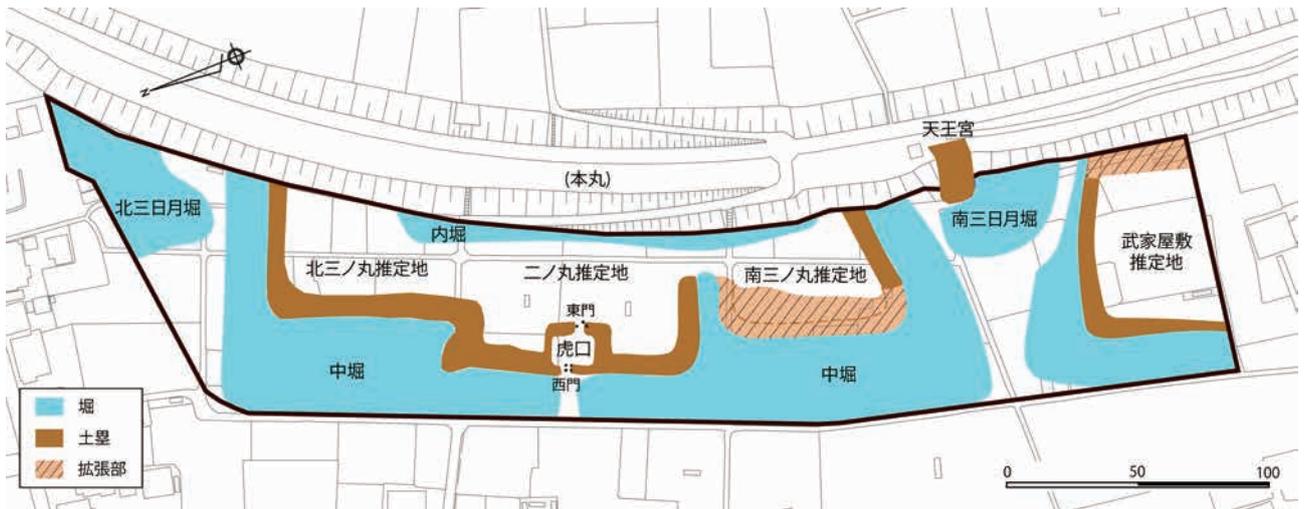


図90 長沼城跡新縄張り想定図

ており、金属製品を再生産していた可能性がある。整理指導をいただいた中井氏と松井氏によれば、城郭内部で鍛冶を行う事例は中世にしかなく、上記の痕跡が工房跡であるとするなら中世段階の可能性が高いとのことである。また大窯期から連房式期の遺物の中に、古い様相を示す中国産陶磁器や楽茶碗などの特徴的な伝世品がみられることも、他の平場の様相とは異なる点である。

北三ノ丸推定地とした平場は、コメやオオムギなどの多量の炭化物と焼けた壁材が出土していることから、穀物庫があったと想定している平場である。カワラケや内耳鍋などの在地土師が多量に出土しているが、その大半が小片である。また、他の平場ではほとんどみられない越前焼の甕や瀬戸美濃焼の内禿皿が複数個体出土している。しかし、いずれも残存率は低く、本平場で使用されていたものか否かは判断し難い。なお、出土した炭化物については、現在種実同定および年代測定を外部委託中である。その結果次第では、さらに詳細な検討ができるものと考えている。

武家屋敷推定地は、調査の中で第1面から第4面までの全段階を確認できた唯一の平場である。第4面が武田氏の長沼城跡改修（築城）以前の段階であることは調査時より予想していたが、整理作業を進めたところ、15世紀代の様相を示すカワラケや口縁が屈曲する内耳鍋が主体であることが判明し、これを裏付ける結果となった。第3面の

出土遺物には甲州系の特徴を持つカワラケが含まれることが明らかとなり、本面が武田氏の城改修段階に当たると考えられる。第2面と第1面の遺物の組成は中世から近世への転換を示すものとなっており、全面を通しておおむね平場の変遷を捉えることができた。ただし、本平場は城の本体からは外れており、城の平場はいずれも第1面の調査に留めているため、各平場の面が一致しているとは限らないことは念頭に置く必要がある。

今後の課題

土器や陶磁器については、現在組成表を作成するための作業を進めている最中であり、すべてを網羅しているとは言い難い。現在外部委託中の分析・鑑定結果と併せて、さらなる検討を加えていきたい。（伊藤 愛）



図91 中井氏・松井氏による整理指導

(2) 塩崎遺跡群

国道18号(坂城更埴バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

塩崎遺跡群は長野市南部塩崎地区に位置し、2013～2021・2024年度に発掘調査を行い、2016年度から本格整理を継続している。

整理作業の概要

塩崎遺跡群は弥生時代前期末～中世にいたる密度の高い複合集落で、発掘調査で得られた調査資料は膨大であった。これまでに遺構・遺物の図化作業・トレースを終了し、本年は掲載用の遺構・遺物図の写真・図版組作業、観察表整備、原稿執筆を行った。以下に整理を通して判明した遺跡の概要を記す。

弥生時代前期末～中期初頭の様相

円形貯蔵穴と土器棺再葬墓があり、本格的な居住は当期からとみられる。遺物は当期の遺構内のみならず後代の遺構に多量に混入していた。氷式から継続する在地の甕・壺に加え、東海地方の遠賀川系土器、水神平式・岩滑式・丸子式等の条痕文系土器、大地系や柴山出村式とも呼ばれる沈線文系土器、東北南部系土器、北陸・関東等の多系統の土器が出土した。特に遠賀川系は壺・甕・鉢・蓋といった複数器種が出土し、甕出土量は県内では突出する。特に、遠賀川系壺の彩文土器片の出土も注目される。しかし、今までの土器の種類実圧痕分析ではイネもあるが、アワ・キビが多いことが確認されており、稲作は本格化していないと考えられる。

弥生時代中期中葉

木棺墓が63基検出され、礫床や木棺周囲に礫を充填するもの等多様な形態があり、複数の遺体埋葬例も確認された。土器は僅かだが、玉類に加え、副葬品とみられる石鏃・素材剥片複数と扁平片刃石斧の集中出土もある。埋葬人骨頭部に赤色顔料が撒かれるが、ベンガラ主体ながら水銀朱も用いられていることも確認された。

当期は新諏訪町3式、伊勢宮式期にあたるが、

近年、後続する栗林式の出現時期を遡って捉える説が示されており、当期の開始は弥生中期前葉に遡る可能性がある。口縁が内湾する貝田町式壺類の条痕文系壺や口縁の短い厚口鉢、大地系壺、瓜郷式と思われる甕口縁片、北陸小松式の影響と思われる波状文・平行櫛描文の土器はあるが、平沢型壺と断定できる土器は捉えられなかった。なお、種実圧痕調査ではイネが複数確認され、稲作のウエイトが増したのであろうか。

弥生時代中期後半

栗林式1式後半、3式前後の2時期の遺構がある。当期から堅穴建物跡が確認され、長方形の土坑が多数、円形溝跡の平地式建物跡、井戸跡が検出された。栗林期の遺跡に散見される長方形土坑が、数多く確認されたのは本遺跡の特徴である。堅穴建物跡からはヒスイや緑色凝灰岩、鉄石英といった玉類の石材の石核・剥片も出土し、遺跡内で少量ながら玉類の製作が行われた可能性がある。また、クロム白雲母製の小形勾玉数点が出土した。他には扁平片刃石斧や石包丁の未成品が出土し、これらも遺跡内で製作されていたとみられる。

弥生時代後期

弥生時代後期前半～古墳時代初頭の遺構があるが、弥生時代後期の中頃は一旦途切れるようである。数多くの堅穴建物跡や井戸跡、溝跡、周溝墓等があり、堅穴建物跡では1辺12mの大形建物跡も確認された。

土器は吉田式・箱清水式を中心に北陸系の高坏・器台・甕・台付壺等がある。在地の箱清水式土器にも北陸の長頸壺の影響を受けたと思われる頸部の細い無文壺があり、僅かだが南関東の吉ヶ谷式と思われる土器、東北地方の天王山式土器も出土した。

後期末～古墳時代初頭では北陸系甕主体の方形堅穴建物跡も確認されている。畿内庄内式並行と思われる弥生時代後期末を含む時期には井戸跡や掘立柱建物跡が後背低地側に集中し、中央に堅穴建物跡多数を挟んで東側の千曲川寄りに円形・方形周溝、木棺墓が分布する集落構造とみられる。

また、後背低地寄りの場所では環濠を模倣したと思われる広域に弧状に巡る溝跡、後背低地寄りで調査区を横断する溝跡が検出された。

遺跡東端部にある墓群では、直径6～15mの大形化した円形周溝墓、前方後方墳形周溝墓、鉄剣やガラス小玉・刀子を副葬する木棺墓が検出された。木棺墓出土鉄剣は柄が長い特徴的なもので鞘の木質が残存し、表面に布痕が残る。また、弥生時代後期の金属製品では銅釧、刃のない板状鉄斧（素材か）、鉄鏃・釣針・ヤリガンナ・螺旋状指輪、不定形な不明の鉄製品が出土した。しかし、複数炉をもつ竪穴建物跡は存在するものの、明確な鉄加工の痕跡は捉えきれなかった。

古墳時代前期

畿内の布留式並行と思われる時期で、弥生時代後期末から継続する集落跡の可能性があり、竪穴建物跡は自然堤防上に散在し、後背低地側に井戸跡が集中する。墓は明確に捉えられていないが、鉄剣を出土した土坑が1基検出された。土器は小形丸底土器、柱状脚高坏を特徴とする。井戸跡内からは大量の壺・甕が出土し、他に完形土器を大量に出土した土坑が数基ある。注目される遺物には石川条里遺跡高速道地点や篠ノ井遺跡群でも出土している中実角形支脚片や鉄剣がある。

古墳時代中期末

自然堤防の中央西よりにカマドを有する竪穴建物跡数軒、千曲川寄りの自然堤防端部に古墳周溝2基検出された。直径15mの古墳周溝 SM1009ではウマ骨が散在して出土し、SM1020からは焼成前底部穿孔の縦長の粗製壺が複数出土した。SM1009のウマ骨は周溝内に土坑を伴い埋葬されたものではないが、当期のウマ骨は注目される。竪穴建物跡から滑石製白玉、混入品で剣形石製模造品が出土している。

古墳時代末～奈良時代前半

当期の遺構は竪穴建物跡多数と掘立柱建物跡、溝跡があるが、奈良時代後半の遺構はない。掘立柱建物跡は柱穴跡の検出数は多いものの、建物跡と認定しえたものは少なく、井戸跡は不明瞭である。当期の集落の特徴は竪穴建物跡の数の多さ

と、溝跡によって区画されていることである。また、竪穴建物跡は建て替えも確認され、同一建物跡でカマドの造り変えや、床の貼り直し、柱穴の掘り直しや棟方向を90度反転させた建て替えも確認された。類似場所に近似時期の竪穴建物跡が重複する例もある。また、竪穴建物跡の廃絶時に柱を抜き取り、掘り出した土が床面に残された状況がわかる例も確認された。

注目される遺物として中空円面硯等の硯、鉄製巡方、銀装耳環、畿内系暗文土器、新潟県に類例がある土製カマド材がある。

平安時代前期

遺構は平安時代前期にかけての小形竪穴建物跡と井戸跡、後背低地寄りに調査区を縦断する溝跡、畑跡がある。集落跡は石川条里遺跡の条里型水田施工期直後頃が中心時期と思われる。平安時代の洪水砂は千曲川寄りの自然堤防端部と一部平安時代の遺構埋土に確認され、洪水時期以後の遺構は中世まで確認できない。竪穴建物跡は自然堤防中央付近と後背低地寄りに散在し、その中間の自然堤防中央西側付近は遺構が分布しない空白域がある。

土器食器類は黒色土器に須恵器坏が加わり、一部灰釉陶器が伴う。注目される遺物は円面硯、鉄製焼印、石製分銅、青銅製巡方、同蛇尾、皇朝十二銭の「隆平永宝」（796年初鑄）、井戸跡から出土した大形盤状皿、曲物等の木製品がある。

坂城更埴バイパス関連調査は塩崎地区の自然堤防から後背低地を横断するように調査したが、令和6年調査の善光寺街道下で調査区を横断する可能性がある溝跡、後背低地寄りに同じく調査区を縦断する溝跡が確認され、これらは当地域に推測されている松本の信濃国府と上越の越後国府を繋ぐ東山道支道の道路側溝や道路側溝と用水を兼用する溝跡とも思われた。しかし、明瞭な道路面は確認できず東山道支道に伴うものと断定できない。

（市川隆之）

(3) 真光寺遺跡・真光寺古墳群

一般国道158号（松本波田道路）
改築工事

真光寺遺跡・真光寺古墳群は松本市波田三溝の梓川右岸に形成された河岸段丘上に立地する。

遺跡の東方には安塚古墳群や秋葉原古墳群、さらに東方には、奈良時代から中世の集落遺跡である新村遺跡が分布している。

整理作業の概要

真光寺遺跡・真光寺古墳群では、2021年4月から2024年9月にかけて発掘作業を行った。発掘作業で検出した遺構は下表の通りである。

検出遺構

遺構の種類	数	時期	備考
竪穴状遺構	12	中世以降	
掘立柱建物跡	4	中世以降	
土坑	754	中世以降	火葬施設、土葬墓を含む
溝跡	36	中世以降	
古墳	2	古墳末～奈良	
柵跡	2	中世以降	
石列	1	中世以降	
火床	2	中世以降	
不明遺構	5	中世以降	

2024年10月より基礎整理作業に並行して本格整理作業を開始し、本年度も本格整理作業を継続して行った。整理作業では、調査成果を発掘調査報告書に漏れなく掲載できるように、記録類の点検や出土遺物の観察などを行った。

遺構記録についての主な作業は、記録類や台帳類の点検、遺構図の記録整理・デジタルトレース・仮レイアウト、遺構全体図作成、遺構一覧表作成、遺構写真選別などを行った。

遺物整理については、昨年度中に土器の接合、復元及び土器・石器の実測作業を開始した。そして、本年度は、実測図の確認・選別・仮レイアウト



図92 遺構図面確認作業

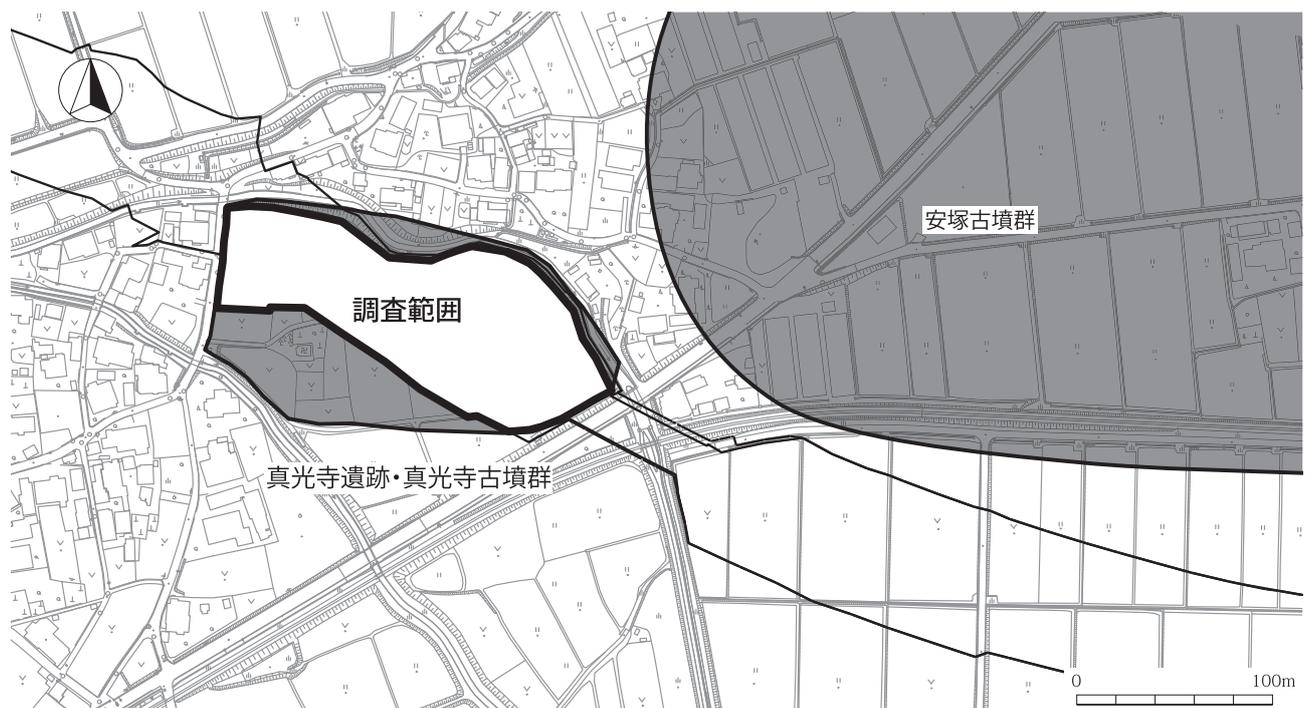


図93 調査範囲と周辺遺跡

ト・デジタルトレース、遺物観察表作成などを行った。また、金属製品については、県立歴史館においてX線透過写真撮影を行い、一部については保存処理も行った。出土骨については年代測定、遺構からサンプリングした炭化物については樹種同定及び年代測定をそれぞれ業者に委託して行った。

緡銭について

調査区中央にL字に配置された溝（SD10・13・17・19）や柵列（SA01・02）の途切れる南西側に位置する土坑（SK159）からは緡銭が出土



図94 土坑（SK159）出土緡銭 X線透過写真（永樂通寶）

した。緡銭は3束出土していて、その出土状況から容器などに入れて土坑内へ納められていた可能性が考えられる。本年度1枚ずつに分離し、県立歴史館でX線透過写真撮影を行った。

緡銭の総銭貨数は425枚で、判読できたのは404枚、そのうち最も多かったのは「皇宋通寶」（北宋1038年）で48枚、次に多かったのは「元豊通寶」（北宋1078年）で45枚、「永樂通寶」（明1408年）、「元祐通寶」（北宋1086年）、「熙寧元寶」（北宋1068年）が31枚と続く。

緡銭が埋納された意味は不明であるが、今後周囲の遺構との関係を検証し、類似例をあたりその性格を明らかにしていきたい。（相馬麻織）

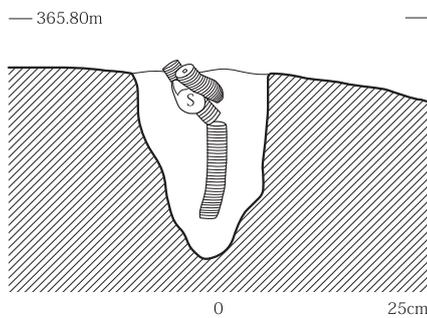


図95 緡銭出土土坑（SK159）断面図



図96 遺構全体図

(4) 川原遺跡

防災・安全交付金（道路）事業・国補ダム
建設（治水ダム）事業

整理作業の概要

川原遺跡は、飯田市の南東部天竜川左岸の低位段丘上に位置する遺跡である。2022年度から調査を行い、古墳時代中期の集落跡、弥生時代後期の方形周溝墓群、縄文時代中期後半～後期前半の敷石住居跡、配石遺構、埋設土器が多く見つかった。

本年度の本格整理作業では、遺物の様相の把握と抽出、土器接合・復元、観察表の作成、委託を含めた土器・石器実測と遺構図面の修正、仮版組を行った。

古墳時代遺物の様相

本遺跡で出土した古墳時代中期の土器の多くは土師器であり、甕・壺・高坏・坏・埴・甑が器種として確認された。特に甕は、その量の多さが特筆される。竪穴建物跡（SB3）では復元できたもので、甕10点、坏23点、埴10点、高坏3点である。竪穴建物跡（SB5）でも7点出土している。また、この時期の甕は、北信地域では、球胴形で丸底のもの、若干胴部が伸びラグビーボールに形が近いものなど複数の形態がみられるが、本遺跡出土のものはほとんどが前者である。この特徴は、地域差なのかは今後検討していく余地がある。

このほかに、SB5から出土した直口短頸壺は、



図97 古墳時代中期土師器甕



図98 直口短頸壺

南信地域では見られない形態である。器高14.5cm、胴部最大径17.5cm、口径7.3cmで中心からずれた位置に丸底の底部があり、座りが悪い。

この直口短頸壺の胴部形態は古墳時代中期の小型丸底壺に類似している。しかし大きさ、頸が短いという点で異なっている。同時期の類似した資料は、管見では国内では見当たらないが、百済地域には近い形態のものがある。本遺跡では百済土器^{わん}盤が出土しているため、この資料も百済土器の影響を受けている可能性もある。

古墳時代遺物の中には、数点ではあるが石器・石製品も出土している。その器種は、石鍬・磨製石鍬未成品・砥石・白玉・砥石などである。

その中でも、砥石は腰から提げていたと考えられている携帯用の小形の提砥^{さげと}で、主に、金属製品の刃を研ぐものと考えられている。提砥の多くは古墳石室内から出土していることが知られているが、この砥石はSB3より検出された。

長軸8.7cm、短軸3.3cm、厚さ0.8cmである。吊り下げるための紐を通したと考えられる孔が一つ空いており、短冊形になっている。石材は黒色の硬質頁岩と考えられる。

表面を細かく観察すると、金属製品を研いだ際にみられる微細な溝痕跡を確認することができ、中央部がすり減っていることから実際に使用されたものであると考えられる。

群馬県金井東裏遺跡からは、甲を着け腰に提砥と刀子を着けたまま亡くなった古墳人の人骨が出



図99 提砥



図100 飛騨地方の影響を受けた壺形土器

土しているのので、本遺跡にもこうした有力者がいたのであろうか。

本遺跡は、古墳時代中期の小集落であるが集落の全域発掘することができた貴重な例である。

今後、この発掘成果に基づき出土遺物の組成や、集落構造について考察を深めていくことは、古墳時代の南信地域社会解明の手がかりとなるであろう。

縄文時代後期前半土器の様相

配石遺構から縄文時代後期前半の土器が出土している。下伊那地域に当該期の遺跡は類例が少なく、歴史的意義や位置づけが難しいため、隣接地域との比較を行うことを目的として、東海・飛騨地方の研究者である中部大学長田友也氏、高山まちの博物館大石崇史氏より指導をいただいた。その成果は以下の通りである。

①東海地方の土器と比較して、「東海系縁帯文土器」と呼ばれる東海独自の土器にみられる文様や技法はみられない。

②飛騨地方の土器と比較して、技法や口縁部形状は共通する部分がみられる。また、胴部に最大径を持つ壺形の器形は、飛騨地方に特徴的であり、本遺跡で出土した壺形土器の器形もそれに近いものがあり繋がりが想定される。

諸要素は、飛騨地方にみられるが、この形態そのものは、同地方にはない。やはり、本遺跡の粗製土器に無文のものが多くことが挙げられるが、飛騨地方の粗製土器は縄文を施すものが多く、こ



図101 飛騨地方の影響を受けた特徴的な口縁部を持つ深鉢形土器片

うした傾向も合致しない。

全体として、飛騨地方の影響を受けた土器であることは明らかであるが、すべてを飛騨地方に関連付けられない。

また、伊那谷、木曾谷にも飛騨地方の影響を受けたと考えられる土器がみられるため、本遺跡の縄文後期前半土器群の様相は、飯田地方特有の状況というわけではなく、現状では、伊那・木曾等飛騨地方周縁地域の特色として捉えたい。

(春日皓介)

参考文献

- 長野県埋蔵文化財センター他1999『榎田遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団2019『金井東裏遺跡』《古墳時代編》

Ⅳ 普及公開活動の概要

	分類	名称	場所等	期日	参加者数(名)		
1	施設公開	夏休み考古学チャレンジ教室	埋文センター	8/1・2	203		
2	現地説明会・ 現地公開		南大原遺跡(北大原地区)	7/16・17	36		
			南栗遺跡	9/13	93		
			南大原遺跡(南大原地区)	9/27	153		
			川田条里遺跡	10/1・2	113		
			正泉寺遺跡	11/8	54		
			南大原遺跡(舞台地区)	11/15	213		
			薮越遺跡	12/3・4	15		
3	講座 「おとなりさん の考古学」	地域史の「点」を「線」に	篠ノ井老人福祉センター	5/15	35		
		縄文ランプの釣手土器	篠ノ井老人福祉センター	6/19	32		
		遺跡めぐり	川田条里遺跡 南向塚古墳公園	7/17	36		
		出土遺物からわかる古代の精神世界	篠ノ井老人福祉センター	8/21	28		
		遺跡と文字史料からみた信濃国の 中世社会	篠ノ井老人福祉センター	9/18	27		
		県立歴史館秋季企画展 見学	長野県立歴史館	10/16	30		
		長野市塩崎遺跡群の調査成果	篠ノ井老人福祉センター	11/20	27		
		発掘された「幻の城」長沼城跡	篠ノ井老人福祉センター	12/18	35		
	出前授業	遺跡研究入門講座	信州大学教育学部	6/4	29		
		南栗遺跡調査報告会	松本市島立三の宮公民館	6/23	16		
		地域素材の教材化Ⅰ ～埋蔵文化財センターを活用した教材研究～	県総合教育センター 南栗遺跡	7/3	19		
		My 探求アドバンス講座	信州大学教育学部	9/18	10		
		歴史学講座	信州大学教育学部	11/11	53		
	職場体験	長野市立篠ノ井西中学校	埋文センター	5/29	5		
		県上田染谷丘高等学校	埋文センター 南宮遺跡	7/1	1		
		長野市立川中島中学校	埋文センター	7/28・29	2		
		土浦日大中等教育学校	埋文センター 南栗遺跡	8/27・27	1		
		県野沢南高等学校	埋文センター 川田条里遺跡	9/25・26	2		
		中野市立高丘小学校	高丘小学校 南大原遺跡	9/30・10/1	26		
		長野市立篠ノ井東中学校	埋文センター	10/9・10	2		
		長野市立篠ノ井西中学校	埋文センター	10/10	3		
	4	速報展・展示会	掘るしんin長沼 展示会・講演会		柳原交流センター	11/3	129
			掘るしん2026	展示会	キッセイ文化ホール	2/7～3/8	359
遺跡報告会等				2/22		117	
5	施設利用			展示室	225		
				図書室	48		
総計					2,177		

◎掘るしん2026・展示室・図書室の利用人数は2026年2月28日現在の数字。

(1) 施設公開

○第17回夏休み考古学チャレンジ教室の開催

実施日：8月1日（金）午後1時～4時

8月2日（土）午前9時～午後3時

目的：夏休みの期間中に、埋蔵文化財センターの施設を公開し、展示室等の見学や当センターの業務を体験することで、当センターの社会的役割及び埋蔵文化財に対する理解を深める。

内容：

- ・施設公開…展示室、図書室の公開、遺物の整理作業（土器の接合、実測、拓本作業）を公開、埋蔵文化財や考古学の質問に回答。
- ・体験…実物の土器及び土器パズルを用いた遺物の接合作業の体験、実物の土器を用いた拓本の体験、縄文原体や竹管、貝殻等を用いた土器施文の体験、ワークショップ「縄文人になろう」と「土器風粘土でいろいろ作ってみよう」の実施。

来場者数：203名（1日81名、2日122名）

当センターの業務理解の促進や埋蔵文化財に対する理解の深化という施設公開の趣旨を鑑みて内容を検討し、当センターの施設や作業の見学を主とするブースと作業の体験を主とするブースを設けた。

地元篠ノ井地区を中心に長野市周辺の幼児及び児童とその家族が多数来場され、当センター業務や埋蔵文化財保護に関する理解、考古学に関する普及啓発に資するイベントとなった。また、本事業は毎年継続して開催しているため、夏休みの恒例イベントとして定着し、地元住民と職員の交流の場にもなっている。

見学を主とするブースは、展示室及び図書室を公開するブース、長野市塩崎遺跡群及び長沼城跡から出土した遺物の実測及び拓本作業の見学と解説をするブース、来場者の考古学や埋蔵文化財についての質問に当センター職員が回答するブースを設けた。

体験を主とするブースは、長野市長沼城跡出土の土器と土器パズルを用いた遺物の接合作業を体験するブース、飯田市川原遺跡出土の土器を用いた土器の拓本作業を体験するブースを設けた。

また、長野県立歴史館主催のブースでは、来場者が長野県立歴史館所蔵の縄文風の服を身に着けて記念写真を撮影する「縄文人になろう」を実施した。さらに、長野県文化振興事業団芸術文化推進室主催のブースでは、講師に神崎遥香氏を招き、乾燥すると土器のような風合いになるテラコッタ粘土を用いて、縄文原体等土器の施文具のほか、身近にある道具や素材を使って文様をつけ、オリジナルの小物を作るワークショップ「土器風粘土でいろいろ作ってみよう」を実施した。

来場者には記念品として、まが玉をデザインしたオリジナルのエコバッグと付箋を配布し、いずれも好評であった。

来場者からは、「縄文時代のことが身近に感じられる楽しいイベントでした。ありがとうございました。」「土器のことや、くふう、せつめいがとてもいてねいなおしえ方でうれしかったです。」「暑い中、大変お疲れ様です。対応される職員の方々が大変丁寧で、楽しくチャレンジ出来ました。」など、好意的な感想をいただいた。

（村井大海）



図102 土器拓本作業体験の様子



図103 「土器風粘土でいろいろ作ってみよう」

(2) 現地説明会等

本年度は現地説明会と現場公開を5遺跡（うち南大原遺跡は3地区）で実施し、参加者は合計677名であった。

なお、本年度は一部遺跡で平日作業中の現場公開を実施したため、安全対策上の理由により参加者にはヘルメットの着用をお願いした。

○南大原遺跡 北大原地区（中野市）

開催日：7月16日（水）～17日（木）参加者：36名

北大原地区の発掘作業を公開した。地元住民の見学のほか、上今井遊水池整備事業の関係機関が来訪した。

○南栗遺跡（松本市）

開催日：9月13日（土）参加者：93名

古代の竪穴建物跡が多数発見された地区と出土遺物について説明会を実施した。参加者からは、竪穴建物跡の構造や出土した食器の使用方法について、関心が寄せられた。

○南大原遺跡 南大原地区（中野市）

開催日：9月27日（土）参加者：153名

南大原地区で発見された古代の竪穴建物跡と出土遺物について説明会を実施した。特に、良好な遺存状態のカマドとその周囲から出土した坏・蓋などの食器に関して、来場者の関心が高かった。

○川田条里遺跡（長野市）

開催日：10月1日（水）～2（木）参加者：113名

古代の水田跡と中世の建物跡の発掘作業を公開した。地元の関心が高く、平日にもかかわらず多数の見学者が来場した。

○正泉寺遺跡（飯田市）

開催日：11月8日（土）参加者：54名

縄文時代の土坑及び古代の竪穴建物跡が発見された地区を対象に説明会を実施した。地元住民に発掘現場を間近にご覧いただく機会となり、また複数の報道機関が説明会の様子を取り上げた。

○南大原遺跡 舞台地区（中野市）

開催日：11月15日（土）参加者：213名

平安時代の竪穴建物跡数が65軒に達した舞台地区で説明会を実施した。参加者からは当時の大規模な集落跡であることへの驚きと、また有力者が所持したと考えられる鏡・陶器に多くの関心が寄せられた。

○薮越遺跡（飯田市）

開催日：12月3日（水）～4日（木）参加者：15名

古墳時代から奈良・平安時代の竪穴建物跡等の発掘作業を公開した。礎石を伴う大型の建物跡を発見したとの説明があり、来場者の注目となった。上郷飯沼地区の住民に貴重な遺構・遺物をご覧いただく良い機会となった。（馬場伸一郎）



図104 遺構説明の様子（南大原遺跡舞台地区）



図105 遺構説明の様子（薮越遺跡）

(3) 速報展・講演会等

①地域展「掘るしんin長沼～長沼城跡発掘調査成果報告・講演会～」

長沼城跡では、長野市教育委員会事務局家庭・地域学びの課（長沼担当）が主導する地元住民向けの歴史講座の一環として、学びの課との共同主催のもと毎年現地説明会を開催してきた。本年度も同講座の講義依頼があったため、4年間の発掘調査成果の報告会に加え、センターの地域展も兼ねた展示会および有識者を招いての講演会も併せて行うことを提案し、開催に至った。詳細は以下のとおりである。

開催日：2025年11月3日（月・祝）

会場：柳原交流センター 大学習室

来場者：129名

基調報告：「4年間の長沼城跡調査成果報告」

長野県埋文センター

伊藤 愛 主任調査研究員

講演会：「長沼城の構造を探る」

講師：滋賀県立大学 中井 均 名誉教授

主催：長野市教育委員会 家庭・地域学びの課（長沼担当）、長野県埋文センター

共催：長沼地区住民自治協議会

協力：長野市埋蔵文化財センター、長沼歴史研究会

内容：講師である滋賀県立大学名誉教授中井均氏には、長沼城跡の発掘調査初年度より調査指導者として毎年発掘現場に足を運んでいただいた経

緯がある。今回の講演会では長沼城跡の調査成果を踏まえて各地の城の事例紹介とともに、長沼城の構造についてご講演いただいた。

中井氏は、長沼城跡が一の門からややずらす形で二の門へ抜ける「蟹鉋状」の枡形虎口を持ち、その前面に丸馬出を配置していることについて、武田氏の城である甲府市躑躅ヶ崎館跡や韭崎市新府城跡を例に挙げ、長沼城跡の「蟹鉋状」枡形虎口と丸馬出の併設はまさに武田流の城郭構造であり、長沼城跡のベースは武田氏段階に成立していた可能性が高いとした。ただし、通常丸馬出は虎口の正面に造られるのに対し、長沼城跡は虎口からややずれた位置に配置されているため、ここに戦国期と近世のずれが生じていることも指摘している。

近世に入り長沼藩が成立すると、藩主として佐久間氏が長沼の地に配されるが、一万八千石という石高から無城大名（城を持たない大名）であり、基本的に在府（江戸在住）であったと中井氏は推察している。その上で、近世城郭の要素である高石垣・天守・瓦のいずれも長沼城跡では見られないことから、佐久間氏は長沼城跡の改修をほとんど行わず、戦国時代の城郭を踏襲し維持管理していた可能性があるとした。さらに、長沼城を描いた近世の絵図において、従来城外を通過していた北国街道が付け替えにより長沼城内に取り込まれた表現がみられる点を挙げ、絵図にみえる城下町の形成は近世段階であるとしている。こうした



図106 講演会の様子



図107 中井氏講演風景

長沼城跡の様相は、近世の小藩の在り方を示す貴重な事例とのことであった。

講演の最後に中井氏は、長沼歴史研究会の活動について触れ、地元住民が地域の歴史を丹念に調べ『長沼城の研究～城跡の検証～』（2014年刊行）を出版したことは、郷土史研究の大きな成果として高く評価し、今後の活動に期待を寄せられた。また、かつて上杉謙信との抗争における防御の要であった長沼城跡が、今後は防災ステーションの建設によって防災の要である「現代の長沼城」になるとして、長沼地区のルーツとなる城や城下町を、地域の誇りと自信に繋げてほしいと締めくくった。中井氏のこの言葉は、東日本台風の大水害を経験した歴史研究会をはじめとする地元住民にとって大きな励みとなるものであった。

なお、当日の基調報告・講演の様子については、録画した動画を YouTube の長野県埋蔵文化財センターのチャンネル内で公開している。

展示会は講演会当日のみの開催とし、長沼城跡で出土した土器・陶磁器、石製品、土製品、金属製品、炭化物など94点を展示したほか、検出遺構や調査風景の写真をパネル展示し、解説を行った。

長沼城跡は、地元住民だけでなく市県外の人々からの注目度も高い。今回多くの聴講者が集まる中で中井氏にご講演いただけたことは、長沼城跡についての理解を深めるだけでなく、今後どのように活用し次世代に繋げていくかを、人々がそれぞれの立場で考える貴重な機会となった。

(伊藤 愛)



図108 展示会場の様子

掘るしん in 長沼 主な展示物

在地産土器	カワラケ、灯明皿、内耳鍋、播鉢、火鉢など
瀬戸美濃焼	皿、天目茶碗、片口鉢、徳利、水滴など
唐津焼	碗、皿、播鉢など
伊万里焼	皿、徳利
珠洲焼	甕
中国産磁器	青磁碗・盤、白磁皿、染付碗・皿、華南三彩小皿など
石製品	基石、五輪塔、硯など
土製品	土錘、埴塼
金属製品	足金物、釘隠し、筭、匙、小銅仏、銭、鉄砲玉、刀子、火打金など
炭化物	コメ、オオムギ、マメ類

長野県埋蔵文化財センター 地域展
掘るしん in 長沼
「長沼城跡発掘調査報告・講演会」

令和7年11月3日(月・祝)

会場 柳原交流センター (長野市大字小島804-5) *事前申し込み必要(電話受付のみ) *入場無料
定員: 100名(先着順)

受付 10:45~

第一部【基調報告】 13:30~14:25
「4年間の長沼城跡調査成果報告」
伊藤 愛 (長野県埋蔵文化財センター主任調査研究員)

展示会 11:00~16:30 学習室B

講演会 13:30~16:00 大学習室 < 第二部【講演】 14:35~16:00
「長沼城の構造を探る」
中井 均氏 (滋賀県立大学名誉教授)

*申込み・問い合わせ:
9月16日(火)より申込み開始 長野市教育委員会 家庭・地域学びの課(長沼担当) TEL: 026-295-9597
受付時間 9:00~17:00(平日のみ) 長沼地区住民自治協議会 TEL: 026-217-2262

主 催: 実行団体の長 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター 共 催: 長沼地区住民自治協議会
長沼地区教育委員会 家庭・地域学びの課(長沼担当) 協 賛: 長野県埋蔵文化財センター、長沼歴史研究会

図109 掘るしん in 長沼チラシ

②「ほるしん2026」展示会・講演会

開催日：2026年2月7日（土）～3月8日（日）

キッセイ文化ホール（長野県松本文化会館）との共催事業として、2025年度に発掘調査を実施した9遺跡について、出土品や写真パネルを展示した速報展を行った。また、会期中には主な遺跡の調査成果の発表として「遺跡報告会」及び「講演会」も開催した。それぞれの詳細は以下の通りである。

○展示会

開催日：2026年2月7日（土）～3月8日（日）

会場：キッセイ文化ホール

2階 ギャラリー（旧レストラン）

来場者：359人（2月末までの人数）

9遺跡を対象に、出土品や写真パネルを展示した。出土品の展示遺跡は中野市南大原遺跡、長野市川田条里遺跡、松本市安塚古墳群・南栗遺跡、飯田市正泉寺遺跡・五郎田遺跡・高屋遺跡・薮越遺跡の8遺跡である。多様なイベントが開催される文化施設であるため、埋蔵文化財に初めて触れる方々にも興味を持って観ていただけるような展示を心掛けた。また、展示会場においては2月22日の一日限りではあったが、塗り絵やペーパークラフトなどのワークショップ、縄文土器の立体パズル体験などを行い大変好評を得た。加えて、飯田市教育委員会の協力を得て、3月17日（火）～5月10日（日）まで『掘るしん in 飯田』として飯田市域で行った発掘調査の速報展を飯田市考古博物館で行った。

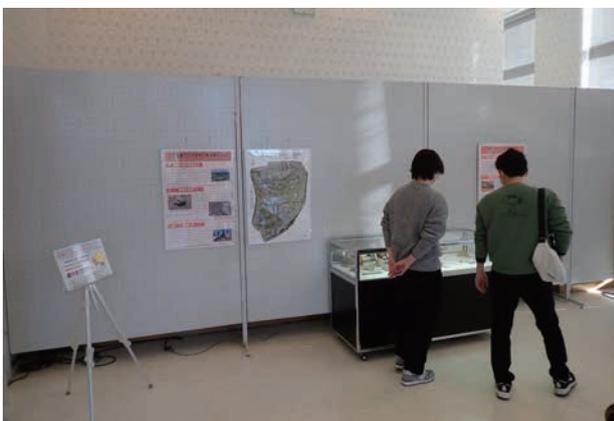


図110 掘るしん2026展示会

○報告会・講演会

開催日：2026年2月22日（日）

会場：キッセイ文化ホール 国際会議室

来場者：117人

報告会：中野市南大原遺跡	報告者 依田
松本市安塚古墳群	報告者 河西
飯田市五郎田遺跡	報告者 中山
飯田市正泉寺遺跡	報告者 丸山

今年度発掘調査を行った4遺跡について、その調査成果の報告を行った。

講演会：

『縄文の音楽探訪～祈り・癒し・音楽療法～』

講師 長野医療衛生専門学校 高橋和奈枝

講演会では、高橋先生が取り組んでおられる、太古の音の調査と音楽の役割について、縄文時代の土鈴などの出土遺物をあげて分かりやすくご講演いただきました。また、ご講演のあとには音楽療法体験ワークショップとして、音楽に身をゆだねて癒しを体験するという、ほとんどの参加者が今まで体験したことのないワークショップを行っていただき、多くの皆さんから大変好評をいただきました。

体験中は、一人一人が一つずつ土鈴に似た楽器を持ち、先生の簡単な説明を受けた後、思い思いのリズムを取りながら順番に楽器を鳴らしていくと、言葉を交わさなくてもコミュニケーションが取れていく不思議な感覚を味わいました。そして、最後には音楽に身をゆだね、遠く離れた場所や、太古の空間へと参加者それぞれが思いを馳せることができました。（西 香子）



図111 掘るしん2026講演会

(4) 展示室・普及啓発用教材等

①展示室（通年公開）

当センターでは、発掘作業・整理作業を行っている遺跡について、速報的に出土遺物と解説パネルを用いて展示している。

本年度は、発掘作業中の4遺跡と本格整理作業を行っている4遺跡の計8遺跡を対象に展示を行った。北信地域からは長野市長沼城跡のカワラケや土錘、内耳鍋などの生活用具のほか、中野市南大原遺跡の玉作り関連資料を展示した。

中信地域からは、松本市真光寺遺跡・真光寺古墳群の須恵器大甕や中世以降と考えられる遺構から出土した土器類や銭貨などを、古代の大集落の南栗遺跡より出土した土器類を展示し、両遺跡ともに松本平の地域史を物語る上で欠かせない資料が並んだ。

リニア中央新幹線建設に伴う発掘調査が進む南信地域では、古墳～古代にかけての大集落である飯田市五郎田遺跡・正泉寺遺跡で出土した土師器・須恵器などの土器、飯田市川原遺跡は土坑から出土した縄文時代の壺形土器を展示した。本年度の見学者数は225名（2026年2月28日現在）であった。

②遺跡カレンダー（普及啓発用教材）

県内各地で行っている発掘作業や遺物を掲載することで、その情報を頼りに県内の遺跡等へ訪れることにより、埋蔵文化財への興味を引き出し、文化財の保護思想の普及や文化財を活用した地域づくりを促進することを目的とし、本年度は、普及啓発用教材として「2026年遺跡カレンダー」を作成した。



図112 展示室

当センターで本年度発掘・整理作業を行った遺跡のうち12か所を選定し、各遺跡の遺構・遺物を中心に写真を掲載した。壁掛け見開きA3サイズ（中綴じ冊子タイプ）、1か月1ページとするカレンダーが完成した。最終ページにはHPへの紐づけをQRコードで行い当センター業務への理解を深めるようはかった。

カレンダーは1000部作成し、県立歴史館や県内市町村・博物館へ配布するだけでなく、当センター速報展などのイベント時にも来場した希望者にもお渡しした。

③情報発信・HP・SNS・YouTube

HPによる発掘調査情報の更新や、X・Instagram・FacebookなどのSNSでの発信、YouTubeによる動画の配信を積極的に行った。SNSは、即時性を意識して遺跡での発見、イベントの告知などを行った。YouTubeでは今年度15本の動画を投稿した。内容は、各遺跡で行った現地説明会の様子のほか「掘るしん」などのイベントの様子となっている。（春日皓介）



図113 遺跡カレンダー



図114 地域展 YouTube

(センターHP <https://naganomaibun.or.jp/> より視聴可能)

(5) 講座・出前授業・職場体験

① 講座

○篠ノ井老人福祉センター生きがいつくり講座

「おとなりさんの考古学入門」(全8回)

- 1) 『地域史の「点」を「線」に』(5/15)
- 2) 『縄文ランプの釣手土器』(6/19)
- 3) 遺跡めぐり『川田条里遺跡・南向塚古墳公園』(7/17)
- 4) 『出土遺物からわかる古代の精神世界』(8/21)
- 5) 『遺跡と文字史料からみた信濃国の中世社会』(9/18)
- 6) 見学『県立歴史館秋季企画展』(10/16)
- 7) 『長野市塩崎遺跡群の調査成果』(11/20)
- 8) 『発掘された「幻の城」長沼城跡』(12/18)

8回目となる本年度は、縄文時代から近世までの時代ごとのテーマでの講座を開催するとともに、埋蔵文化財と地域史の関わりといった従来と視点を変えた講座も実施した。

また、座学だけではなく県立歴史館秋季企画展の見学や、川田条里遺跡・南向塚古墳公園をバスで巡るといった体験型の講座を本年も実施し、大変好評であった。今後もより参加者の興味や関心を引くことができる講座を企画したい。



図115 遺跡めぐり(長野市南向塚古墳公園)

② 出前授業

○信州大学教育学部出前授業等

6月4日(水)、9月18日(木)※、11月11日(火)

内 容:「遺跡研究入門講座」「考古学と埋文セン

ター」※「考古学と埋蔵文化財」

信州大学教育学部との連携協定を元に、同学部の学生を中心に(※9月は高校生向けアドバンス講座)、当センターの業務内容や埋蔵文化財保護にかかる講義を行った。積極的に質問したり、インターンシップに興味を示す学生もあり、今回の講座で発掘調査のみならず文化財保護にかかる業務に興味を持ってもらう機会となった。

○長野県総合教育センター 教科等教育研修

7月3日(木)

内 容:「地域素材の教材化I～埋蔵文化財センターを活用した教材研究～」

長野県内の小中高校の教諭に、南栗遺跡の調査を事例として、記録保存調査にいたる保護協議や遺跡地図等の埋蔵文化財保護行政の仕組みと、調査成果を歴史の中にどう位置付けるかを講義した。また、実際の発掘作業と土器洗浄の体験も行い、受講者は熱心に取り組んでいた。

③ 職場体験

小学校では総合的学習の一環として、当センターの体験や発掘調査現場の見学を実施している。

中学校ではキャリア教育や進路学習の一環として、地元の企業・機関での職場体験学習を実施している。

当センターは学校の要望にできるだけ応えるべく、以下のような複数の形で、可能な限り受け入れている。

ア センターにおける職場体験(中学校)

実施校:長野市立篠ノ井西中学校、同川中島中学校、同篠ノ井東中学校

内 容:遺物の整理と図書整理作業を主として行った。遺物の整理は、土器の洗浄・接合・拓本などを実施した。また、図書整理作業を通して、調査成果としての報告書についても説明をした。

イ 発掘現場における職場体験(小学校)

実施校:中野市立高丘小学校

内 容:高丘小学校6年生23名は発掘体験前日に教室で事前学習を行い、当日に現地で遺跡の説明を受けた後、移植ごとの掘削による発掘体験を実施した。



図116 高丘小学校職場体験風景

ウ 発掘現場・センターにおける探究活動支援

実施校：長野県上田染谷丘高等学校、茨城県土浦日大中等教育学校、長野県野沢南高等学校

内容：センター長野本所で整理作業の整理作業体験を実施するとともに、発掘調査の見学もサポートした（長野市南宮遺跡、松本市南栗遺跡、長野市川田条里遺跡）。



図117 職場体験（県染谷丘高校）

（6）出版物

○長野県の埋蔵文化財情報誌『信州の遺跡』

【第25号】令和7年7月22日発行

- ・最新発掘調査情報 飯田市ママ下遺跡、千曲市屋代遺跡群
- ・信州の近代遺跡 松本市鉄道給水源跡
- ・史跡整備情報 木曾町国史跡福島関跡
- ・埋文本棚『週末の縄文人』
瀧音能之『巨大古墳の古代史』

- ・特集 『諏訪史第一巻』刊行100年記念事業について
- ・考古学の窓 「学史」の振り返りが研究の出発点



図118 『信州の遺跡』第25号

【第26号】令和8年2月2日発行

- ・県内最新調査成果 中野市南大原遺跡
 - ・新たな国史跡 富士見町井戸尻遺跡群、佐久市香坂山遺跡
 - ・信州の戦争遺跡 伊那市旧陸軍伊那飛行場跡、安曇野市有明演習場跡
 - ・特集 イチ推しの遺跡・遺物（古代人の精神世界）
松本市南栗遺跡、飯田市五郎田遺跡、坂城町青木下遺跡、長野市南宮遺跡
 - ・考古学の窓 これからの調査の行く末を
- 『長野県埋蔵文化財センター年報 42』
令和8年3月27日発行
- ・2025年度の事業概要、調査研究ノート ほか（酒井貴子）

V 指導者招へい

期 日	所 属 等	氏 名	内 容
5月16日	長野南警察署交通課		交通安全講習
6月17日	信州大学名誉教授	保柳康一	南大原遺跡発掘調査指導
6月19日・20日	京都大学名誉教授 獨協医科大学医学部 総合研究大学院大学 日本大学松戸歯学部	茂原信生 櫻井秀雄 本郷一美 五十嵐由美子ほか	長沼城跡出土骨鑑定・整理指導
6月26日	(公社)日本文化財保護協会		安全パトロール
8月22日	長野県文化振興課	小池裕貴	長野県の文化財保護行政について
8月26日～28日	京都大学名誉教授 獨協医科大学医学部 総合研究大学院大学 日本大学松戸歯学部	茂原信生 櫻井秀雄 本郷一美 五十嵐由美子	信州大学医学部出土骨整理指導
8月27日	甲府市教育委員会	佐々木満	長沼城跡出土遺物整理指導
9月4日	飯綱町教育委員会	小山丈夫	長沼城跡関連文書資料指導
9月12日	安曇野市豊科郷土博物館長	原 明芳	南大原遺跡発掘調査指導
9月24日	弘前大学人文社会科学部教授	上條信彦	長沼城跡出土炭化物整理指導
10月7日	長野県立歴史館	村石正行	長沼城跡関連文書資料指導
10月20日	明治大学名誉教授	石川日出志	南大原遺跡発掘調査指導
10月20日	信州大学名誉教授	保柳康一	川田条里遺跡発掘調査指導
11月4日	滋賀県立大学名誉教授 静岡市観光交流局歴史文化課	中井均 松井一明	長沼城跡報告書整理指導
11月20日	(一財)長野県文化振興事業団理事	市澤英利	正泉寺遺跡・ママ下遺跡発掘調査指導
12月4日・5日	中部大学非常勤講師 飛騨高山まちの博物館	長田友也 大石崇史	川原遺跡縄文時代遺物整理指導
1月19日	弘前大学人文社会科学部教授	上條信彦	長沼城跡出土炭化物整理指導
1月23日	明治大学名誉教授	石川日出志	川原遺跡縄文時代遺物整理指導
2月9日・10日	富山大学教授	高橋浩二	南大原遺跡出土遺物整理指導

VI 会議・研修会への参加

(1) 会議・委員会等

期 日	内 容	出 席 者	場 所
4月23日	文化財保護行政市町村担当者会議	春日皓介・依田健太 ほか	塩尻市
6月12日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	榎秋明美・山下武喜 馬場伸一郎	名古屋市
6月2日・3日	埋蔵文化財発掘調査の設計の透明化と業務の発注に関する ガイドライン検討委員会協力者会議	馬場伸一郎	京都市
11月20日	関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者会議	馬場伸一郎・春日皓介	さいたま市
12月12日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック会議	真関隆・榎秋明美ほか	長野市
1月22日	関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者会議	春日皓介	千葉市

(2) 研修会等

期 日	内 容	参加者・調査者	場 所
5月22～23日	市町村埋蔵文化財研修（基礎研修）	依田健太・丸山晃平 ほか	松本市
6月28日・29日、7月5日	埋蔵文化財調査士補指定講習会（資格認定）	小出晟生・中山雅士	オンライン
7月17日・18日	衛生管理者講習会	丸山晃平	松本市
7月24～26日	北東北地方縄文遺跡調査	遠藤恵実子・島田亮仁	青森県・秋田県
8月4～6日	地山の掘削及び土止め支保工作業主任者技能講習会	春日皓介	長野市
8月20日ほか	中堅社員研修（長野経済研究所）	伊藤 愛ほか	長野市ほか
9月15日・16日 10月22日・23日・28日	平安時代和鏡調査法研修	上田典男・水科汐華	山形県・兵庫県・ 大阪府・東京都
10月23日	報告書データベース作成に関する説明会	関 杏介	山梨市
11月6日・7日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	小出晟生・相馬麻織	高知市ほか
12月8日～12日	文化財担当者専門研修（報告書デジタル作成課程）	中山雅士	奈良市
12月25日	化学物質管理者	関 杏介	オンライン
1月28日・3月6日	考古資料保存技術講習会	水科汐華・相馬麻織	県立歴史館
1月28日・29日	埋蔵文化財担当職員等講習会	丸山晃平・小山峻輝	オンライン
2月4日	文化財 DX と発掘調査のイノベーション	真関 隆・関 杏介	東京都
2月4～5日	中津川市・瀬戸市	馬場伸一郎・鹿田奨之	岐阜県・愛知県
2月4～6日	地山の掘削及び土止め支保工作業主任者技能講習会	依田健太・大泰司統	上田市
2月16～19日	長沼城跡資料調査	小出晟生・中野亮一・ 小山峻輝	福岡県・佐賀県・ 長崎県
2月25～27日	東海地方古墳～古代土器調査法研修	丸山晃平・高橋草太	愛知県・三重県
2月26日・27日	真光寺遺跡・真光寺古墳群資料調査	西香子・相馬麻織	愛知県・静岡県

Ⅶ 学校・関係機関への協力等

(1) 職員派遣・技術支援等

期 日	依 頼 者	対 応 者	内 容
4月1日～3月31日	伊那市教育委員会	河西克造	史跡高遠城跡保存活用計画策定委員会
4月1日～3月31日	伊那市教育委員会	河西克造	伊那市誌編さん協力員
4月1日～3月31日	佐久市教育委員会	河西克造	国史跡龍岡城跡保存整備委員会
4月1日～3月31日	佐久市教育委員会	中野亮一	大給恒顕彰委員会
7月1日～3月31日	須坂市教育委員会	綿田弘実	須坂市文化財審議委員会
9月29日	栄村教育委員会	綿田弘実	ひんご遺跡出土品整理指導
11月11日	飯島町教育委員会	川崎保	日曾利遺跡にかかる保護協議

技術支援等

信州大学医学部等所蔵考古資料整理支援業務

概要 令和3年12月の信州大学、県教育委員会、埋文センターで締結した「連携に関する覚書」に基づき、令和4年度から開始した技術支援（整理支援業務）の4年目となる。本年度は、出土骨の鑑定の実施と考古資料目録を刊行した。

出土骨の鑑定等 昨年度までに、考古資料（出土骨を含む）財産調べはほぼ終了したが、その内容の把握のための遺物台帳整備を行う必要がある。本年度は、考古資料の遺物整備に努めた。今までも出土骨の鑑定（整理指導）委託をお願いしている茂原信生、櫻井秀雄、本郷一美、五十嵐由里子の各氏に、以下の日程で、実施した。

期日：令和7年8月26日～28日

場所：信州大学医学部

また、同期間に目録作成に必要な医学部及び図書館所蔵考古資料の撮影も行った。

考古資料目録の刊行 目録の主な内容は以下のとおり。

第1章 整理作業の経過

第2章 考古資料一覧

第1節 医学部所蔵考古資料一覧表

第2節 中央図書館所蔵考古資料一覧表

第3節 遺跡（出土地点）及び文献対照表

第3章 研究編

第1節 信州大学医学部の調査研究と日本の考古学（高橋龍三郎）

第2節 旧制松本高等学校旧蔵考古資料の構成と意義（福島正樹）

第3節 川崎市下作延遺跡と弥生土器をめぐって（坂本 彰）

第4節 川崎市高津区下作延遺跡出土の弥生土器について（2）（宮田 毅）

第4章 総括

※カッコ内は、依頼執筆者氏名。

信州大学所蔵資料の内容については、第2章第1節（医学部）、第2節（中央図書館）に掲載されている。現在医学部と図書館所蔵資料は、土器や石器を中心に、出土骨などのいわゆる自然遺物

も含まれていた。遺跡や出土地点がある程度判明しているものが約280か所、長野県内市町村をはじめ17都道府県及び外国出土のものを含むことが判明している。

とくに、医学部所蔵資料は、戦後、第2解剖学教室が発掘調査を行った遺跡出土資料だけでなく、同教室が収集したと考えられる学史的に貴重な資料も含まれている（第3章第1節）。また、同教室に所属されていた藤沢宗平氏が収集した資料も含まれており、なかでも、山内清男の『日本先史土器図譜』（1967）にも掲載されていた南関東の弥生土器の標式資料でもある神奈川県下作延遺跡出土土器が含まれていた（第3章第3・4節）。

また、中央図書館所蔵資料は、旧制松本高等学校以来の資料で、鳥居龍蔵の『諏訪史』（1924）や八幡一郎の『北佐久郡の考古学的調査』（1934）に掲載されていた遺物が含まれており、医学部資料よりさらに古い日本考古学史上、重要な資料も含まれている。

課題 来年度以降、今回発刊した目録をもとに、遺物台帳の内容（種類、年代、属性など）を進め、最終的には遺物の保存活用に資する『報告書』の刊行をはかる。

また、当センター技術支接受託以前の古い木箱や段ボール箱からより保管に適した樹脂製コンテナへの詰め替えが終了しているが、現在は一つの箱の中に複数の遺跡や出土地点資料が混在している状況である。今後の保存活用のために、来年度以降、遺跡や出土地点ごとに整理して収納する予定である。（川崎 保）

(2) 学校等への協力（職場体験を含む）

期 日	名 称	対応者	内 容
4月～R7.1月	長野大学	川崎 保	講座（日本史概論・信州地域史）
5月～R8.2月	測量技術研究会 （AB・do 信州大学工学部）	川崎 保 伊藤 愛	測量技術の見直し・研究
5月15日 6月19日 7月17日 8月21日 9月18日 10月16日 11月20日 12月18日	篠ノ井老人福祉センター （おとなりさんの考古学入門：全8回）	真関 隆 綿田弘実 川崎 保 西 香子 小出晟生 相馬麻織 風間真起子 伊藤 愛	「地域史の『点』を『線』に」 「縄文ランプの釣手土器」 「遺跡めぐり」 「出土遺物からわかる古代の精神世界」 「遺跡と文字史料からみた信濃国の中世社会」 県立歴史館秋季企画展 見学 「長野市塩崎遺跡群の調査成果」 「発掘された『幻の城』長沼城跡」
5月2日 6月9日	かわまちづくり協議会	川崎 保	歴史・文化ワーキング会議
5月13日	日本文化財保護協会総会講演会	真関 隆 上田典男	「地域史の『点』を『線』に」 「中野市南大原遺跡について」
5月29日	長野市立篠ノ井西中学校	小出晟生	キャリア学習・センター施設見学（5名）
6月4日	信州大学教育学部出前講座	伊藤 愛 西 香子	「遺跡研究入門講座」 センター施設見学
6月21日	金鷲会館連続公開講座	伊藤 愛	「発掘された『幻の城』長沼城跡」
6月23日	松本市島立地区 三の宮公民館講演会	廣田和穂	南栗遺跡調査報告
7月1日	県上田染谷丘高等学校	川崎 保・西 香子	職場体験・南宮遺跡見学（1名）
7月3日	長野県総合教育センター	川崎 保・廣田和穂 馬場伸一郎	教員研修「地域素材の教材化Ⅰ」
7月10日	共和地区郷土を知る会	真関 隆 春日皓介 西 香子	「長野県埋蔵文化財センター概要」 「埋文センターの発掘調査」 センター施設見学
7月23日	測量技術懇談会	真関 隆・川崎 保	南栗遺跡見学
7月28日・29日	長野市立川中島中学校	西 香子・伊藤 愛 春日皓介	職場体験（2名）
8月21日	安曇野誕生の系譜を語る会	伊藤 愛	センター施設見学
8月27日・28日	土浦日大中等教育学校	馬場伸一郎・西 香子	職場体験・南栗遺跡見学（1名）
9月18日	信州大学教育学部 My 探求アドバンス講座	伊藤 愛	「考古学と埋文センター」
9月19日	長野市立川田小学校	中野亮一・鹿田奨之 小山峻輝	川田条里遺跡発掘現場見学
9月25日・26日	県野沢南高等学校	西 香子・春日皓介 中野亮一	職場体験・川田条里遺跡見学（2名）
9月30日 10月1日	中野市立高丘小学校	谷 和隆・上田典男 依田健太・町田賢一 山田清朝	事前学習 南大原遺跡発掘調査体験
10月9日	長野市立若穂中学校	中野亮一・鹿田奨之 小山峻輝	川田条里遺跡発掘現場見学
10月9日・10日	長野市立篠ノ井東中学校	西 香子・春日皓介 風間真起子	職場体験（2名）
10月10日	長野市立篠ノ井西中学校	西 香子・春日皓介	職場体験（3名）
10月14日	松本市新村公民館	河西克造	安塚古墳群現地見学会
11月10日	法政大学	春日皓介	センター施設見学

11月11日	信州大学教育学部歴史学基礎講座	春日皓介・相馬麻織	「考古学と埋蔵文化財」
11月17日	地盤工学会信州地盤環境委員会ほか	真関 隆・谷 和隆ほか	南大原遺跡発掘現場見学
11月26日	中野市立豊田小学校	谷 和隆ほか	南大原遺跡発掘現場見学
11月30日	長野県考古学会	馬場伸一郎	考古学セミナー（弥生講座）
12月20日	飛騨高山まちの博物館	馬場伸一郎	語り部養成講座
2月8日	関ヶ原古戦場記念館	馬場伸一郎	山城シンポジウム
2月15日	松本市島立地区 南栗公民館講演会	廣田和穂	南栗遺跡調査報告
3月8日	中野市立博物館	依田健太	ふるさとレポート発表会（南大原遺跡）

（３）調査資料の利用

承諾月日	申請者	内容
2月21日	帝京大学総合博物館	北村遺跡出土資料画像の転載
3月3日	信濃毎日新聞中野支局	南大原遺跡画像の転載
4月24日	公益社団法人 日本文化財保護協会	南大原遺跡出土資料画像の転載
5月12日	山梨県立考古博物館	センター 30周年記念誌資料の転載
7月14日	株式会社すいれん舎	佐久市砂原遺跡画像の転載
9月4日	弘前大学教授 上條信彦	川田条里遺跡土壌の譲受
9月4日	長者ヶ原考古館 山岸洋一	塩崎遺跡群出土資料の閲覧
9月10日	甲府市教育委員会	長沼城跡出土資料の借用
9月17日	松本市新村公民館	安塚古墳群画像の転載
9月18日	株式会社 KADOKAWA	川原遺跡出土資料画像の転載
10月7日	甲府市教育委員会	長沼城跡画像の転載
10月20日	立正大学考古学会会長 時枝務	塩崎城見山砦遺跡・神之峯城跡画像の転載
10月21日	公益社団法人 日本文化財保護協会	南大原遺跡画像の転載
10月23日	松本市新村公民館	安塚古墳群現地見学会記録動画の転載
10月30日	長野市道路課	川田条里遺跡画像の転載
12月12日	公益社団法人 日本文化財保護協会	南大原遺跡画像の転載
12月16日	中野市立高丘小学校	南大原遺跡画像の転載
12月17日・19日	公益社団法人 日本文化財保護協会	南大原遺跡画像の転載
12月18日	弘前大学教授 上條信彦	長沼城跡感化物の閲覧・譲受
12月25日	中野市立博物館	南大原遺跡画像の転載
12月25日	長野市文化財課	川田条里遺跡画像の転載
1月13日	長野市篠ノ井西組区	築地遺跡画像の転載
1月16日	株式会社いき出版	神之峯城跡画像の転載
1月20日	北上市市史編さん室	柳沢遺跡画像の転載
2月5日	埼玉県 遠藤英子	五郎田遺跡出土資料の閲覧

(4) インターンシップ等

令和7年度（インターンシップ）

期 間	所 属	氏 名	遺 跡
8月18日～8月29日（発掘）	金沢大学	久野 真寛	南栗遺跡
8月18日～8月29日（発掘）	金沢大学	中村 彩乃	南栗遺跡
8月18日～8月29日（発掘）	金沢大学	清重 遼馬	正泉寺遺跡
8月18日～8月29日（発掘）	金沢大学	川崎 理愛	正泉寺遺跡
8月18日～8月29日（発掘）	金沢大学	遠藤 愛実	正泉寺遺跡
8月18日～8月29日（発掘）	金沢大学	榮 ちひろ	正泉寺遺跡
8月25日～9月12日（発掘）	金沢大学	久保 葵花	南栗遺跡
8月28日～9月10日（発掘）	金沢大学	松村 和歩	正泉寺遺跡
9月1日～9月5日（発掘）	信州大学	井口 幸菜	南栗遺跡
9月1日～9月5日（発掘）	信州大学	嶋田 美紅	南栗遺跡
9月1日～9月12日（発掘）	立正大学大学院	山田 洸貴	正泉寺遺跡
9月1日～9月12日（発掘）	立正大学大学院	富塚 慧亮	正泉寺遺跡
9月8日～9月19日（発掘）	東海大学	東城 蘭	南栗遺跡
9月9日～9月18日（発掘）	國學院大學	蒲生 龍之介	南栗遺跡
9月11日～9月26日（発掘）	金沢大学	西村 紗瑛子	正泉寺遺跡

(5) 県有施設（県立歴史館）利用の応急的保存処理

令和7年度

期 間	種類・点数	内 容	担 当 者	遺 跡
4月～3月	青銅製品4点 鉄製品61点 その他1点	X線透過観察、有機洗浄・ 脱塩・樹脂含浸等	水科汐華	松本市真光寺遺跡ほか
10月	鉄製品10点	X線透過観察	水科汐華	中野市南大原遺跡
1月	金属製品21点	X線透過観察	水科汐華	飯田市川原遺跡
2月～3月	金属製品189点	X線透過観察	水科汐華	中野市南大原遺跡 松本市南栗遺跡ほか

(6) 派遣等の受入

出 向

期 間	所 属	職	氏 名	遺 跡
4月～3月	北海道埋蔵文化財センター	調査研究員	大泰司統	松本市南栗遺跡
4月～3月	富山県文化振興財団	調査研究員	町田賢一 島田亮仁	中野市南大原遺跡 飯田市高屋遺跡ほか

VIII 組織・事業の概要

(1) 組織

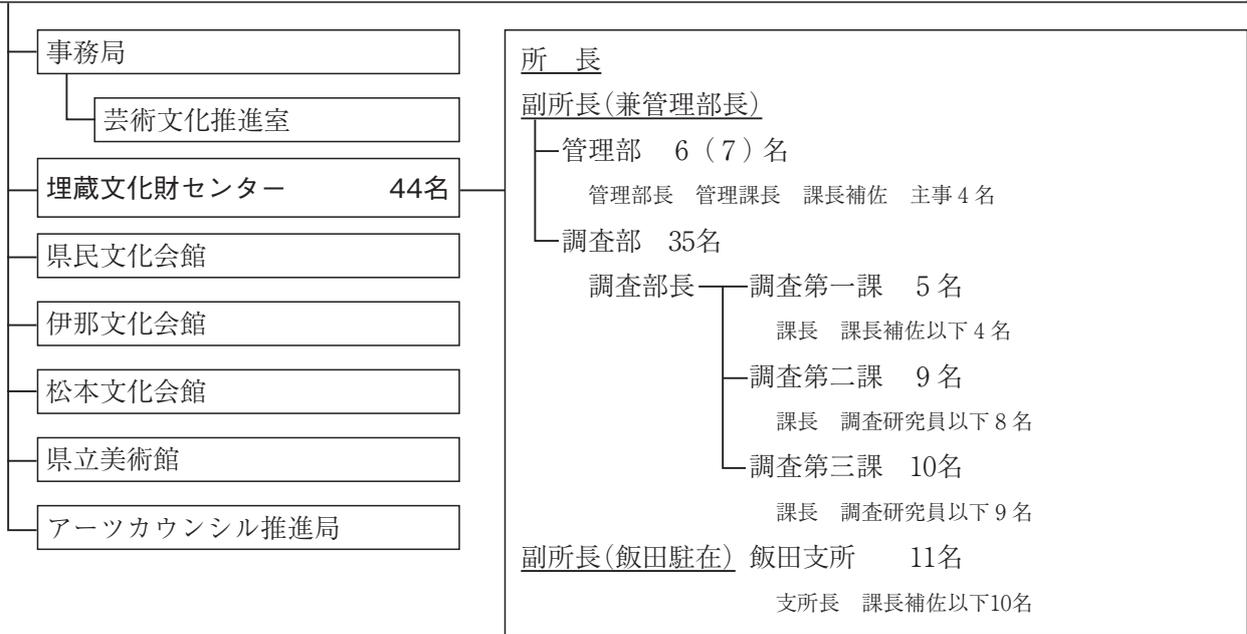
令和7(2025)年10月1日現在

一般財団法人長野県文化振興事業団

【評議員】 堀内征治 笠原甲一 小出貞之 石川利江 直江 崇

【理事会】

理事長	：吉本光宏	副理事長：金澤 茂	常務理事：山本晋司
理事	：市澤英利	唐木さち	松山 光
	合木こずえ	加藤久美子	丸茂洋一
監事	：小川直樹	北山良一	笠原美智子



(2) 職員 (臨時職員を除く)

令和7(2025)年10月1日現在

	所長	真関 隆			
	副所長	栩秋明美 山下武喜 (飯田駐在)			
管理 部	管理部長(兼)	栩秋明美			
	管理課長	神田弘一			
	管理課長補佐	岡沢利樹			
	主事	日向 育 中澤克子 酒井清美 石田宏美			
調 査 部	調査部長	川崎 保			
	飯田支所長	贅田 明			
	調査課長	[第一課]	谷 和隆	[第二課]	馬場伸一郎
		[第三課(兼)]	川崎 保		
	調査課長補佐	[第二課]	廣田和穂	[第三課]	西 香子
		[飯田支所]	長谷川桂子		
	主任調査研究員	[第三課]	伊藤 愛	[飯田支所]	村井大海
	調査研究員	[第一課]	依田健太	町田賢一 (富山県財団より出向)	山田清朝
		[第二課]	大泰司統 (北海道埋文より出向)	鈴木時夫	小山峻輝
		[第三課]	二ノ宮由大	春日皓介	水科汐華
		相馬麻織	綿田弘実	風間真起子	
	[飯田支所]	関 杏介	丸山晃平	鳥田亮仁 (富山県財団より出向)	
		藤原直人	和田晋治	遠藤恵実子	
			中山雅士	高橋草太	
調査指導員	[第一課]	上田典男	[第二課]	河西克造	
	[第三課]	市川隆之		中野亮一	
学芸員	[第二課]	鹿田奨之			

(3) 事業

調査箇所		事業個所		委託事業者等	事業内容	精算 (千円)	
受託事業	発掘・整理作業	R18 (坂城・更埴バイパス)	長野市 塩崎遺跡群	国交省関東地整局 長野国道事務所	整理作業	26,268	
		R158 (松本波田道路)	松本市 真光寺遺跡ほか1遺跡		整理作業 発掘作業	230,100	
			松本市 南栗遺跡	国交省長野国道事務所 ネクスコ中日本	発掘作業	435,412	
		上今井遊水地整備事業	中野市 南大原遺跡	その1	国交省北陸地整局 千曲川河川事務所	発掘作業	389,125
				その2			389,070
				その3			388,273
		長沼地区河川防災ステーション整備事業	長野市 長沼城跡	国交省北陸地整局 千曲川河川事務所 長野市	整理作業	74,800	
		若穂スマートIC	長野市 川田条里遺跡	長野市	発掘作業	205,367	
		座光寺上郷道路 (広域連携)	飯田市 正泉寺遺跡ほか2遺跡	長野県 飯田建設事務所	発掘作業	179,102	
	R153飯田市北改良	飯田市 高屋遺跡ほか1遺跡	長野県 飯田建設事務所	発掘作業	93,148		
飯田富山佐久間線	飯田市 川原遺跡ほか1遺跡	長野県 飯田建設事務所	整理作業	51,810			
リニア中央新幹線	飯田市 ママ下遺跡ほか2遺跡	東海旅客鉄道株式会社	発掘作業	565,661			
技術支援	信州大学	県内遺跡	信州大学	整理作業	2,000		
	研修等	長野県	奈良文化財研究所 職員自己研鑽研修等	—			
自主事業	普及啓発	施設公開 (夏休み考古学教室) 7月		—	4,093		
		出土品展 & 報告会 11月・2月					
		遺跡説明会及び発掘体験					
		広報誌「信州の遺跡」25・26号の刊行					
		普及啓発用教材の作成「遺跡カレンダー」ほか					
		出前授業・地域普及啓発事業への協力				—	
	SNS等を利用した啓発活動の充実強化		—				
その他	インターンシップの受入		—	—			

Ⅸ 調査研究ノート

- (1) 飯田市川原遺跡出土の晩期土器とその文様
調査研究員 関 杏介
- (2) 飯田市西浦遺跡出土和鏡について
調査指導員 上田 典男
- (3) 安塚古墳群の中世火葬遺構 —本年度の調査成果から—
調査指導員 河西 克造
- (4) 長沼城絵図の基礎的考察 —絵図類型と城下空間—
調査研究員 小出 晟生
- (5) 長野市柳原地区における治水石標と地役権設定契約
—近代治水思想を可視化する地域合意の物証—
所 長 真関 隆
- (6) 長野県の近現代遺跡
—軽井沢町旧三笠ホテル浴槽遺構出土のレンガについて—
調査研究員 依田 健太

(1) 飯田市川原遺跡出土の晩期土器とその文様

関 杏介

1 本稿の目的

2022年度から2024年度に当センターが行った飯田市川原遺跡の発掘調査で縄文時代晩期前半の土器が2点出土した。

飯田下伊那地域では飯田市中村中平遺跡や根羽村日影平遺跡、天龍村上の平遺跡で縄文時代晩期前半の土器がみつまっているが、それ以外では類例に乏しい。また、中村中平遺跡や日影平遺跡、上の平遺跡で出土している晩期前半土器をみると大洞C1式並行期土器は非常に乏しい状況である。今回新たに川原遺跡出土土器の中から大洞BC式～大洞C1式並行の土器がみつかったため、資料紹介を行いたい。なお、川原遺跡の概要については、長野県埋蔵文化財センター年報39号、40号、41号に掲載されている。本誌にも報告があるため、そちらに譲りたい。

2 川原遺跡出土晩期前半の土器

川原遺跡から出土した晩期前半の土器は2点ある。いずれも縄文時代後期の遺構検出面から出土したものである。

第1図-1は三叉文の土器である。深鉢と思われるが小破片のため正確な器形は不明である。

文様帯は2条の沈線で区画されている。この2条の沈線の下位にナナメの沈線が入っていることから、この土器は2段以上の文様帯で構成されるものと考えられる。文様帯の一部のみが出土しているため、正確な文様は不明だが、飯田市中村中平遺跡で出土しているような、あやくり状の入組文に三叉文が伴うモチーフの文様（小林・馬場1994）と思われる。佐野I a式に比定される。

第1図-2は頸部が「く」の字にくびれる小形の鉢である。

上下沈線間の列点で、文様帯の上下を区画する。文様帯には連鎖状三叉文が施文される。この三叉文は文様帯を区画する列点文の沈線からのび

互いに入り組む。この土器と同時期の北陸の中屋式にみられる「フ」の字状入組文に近い形をしている。長野県や新潟県上越地方ではこのような形の連鎖状三叉文には縄文が伴いあやくり帯縄文になることが多い。

近年、松本市エリ穴遺跡の報告書が刊行されたことや、群馬県の石川原遺跡、横壁中村遺跡、唐堀遺跡の調査により多くの佐野式土器が出土したことで多くの資料が蓄積されている。そこで次項以降で、今回川原遺跡でみつかった土器（第1図-2）にみられるような連鎖状三叉文やあやくり帯縄文、形が似ているあやくり状入組文について、分布や時期について検討したい。

3 連鎖状三叉文、あやくり帯縄文、あやくり状入組文の分布

佐野式土器に見られる三叉文には宮崎型三叉文などのいわゆる“非連鎖的三叉文”と、2つの三叉文が入り組み合うように施文される“連鎖状三叉文”の2種類がある。第1図-2は“連鎖状三叉文”に属する。今回はそのような「フ」の字形の三叉状の入組文をはじめとする連鎖状三叉文の分布を検討する。

その分布をみると、新潟県上越地方、長野県北信地方の遺跡だけでなく、群馬県石川原遺跡や群馬県唐堀遺跡、松本市エリ穴遺跡、山梨県金生遺跡でも出土しており、非常に広い範囲でみつまっている。なお、第1図-2のような「フ」の字形連鎖状三叉文は新潟県上越地方の細池遺跡や寺地遺跡、上中島遺跡、籠峰遺跡や、石川原遺跡、唐堀遺跡、金生遺跡でみつまっている。

また、あやくり帯縄文は寺地遺跡、上中島遺跡、籠峰遺跡や新潟県十日町市の樽沢開田遺跡、高山村湯倉洞窟遺跡の他、エリ穴遺跡、大桑村大明神原遺跡、石川原遺跡や唐堀遺跡にもある。

あやくり状入組文は寺地遺跡や籠峰遺跡、長野

県北信地方の佐野遺跡、茶臼山遺跡、群馬県の唐堀遺跡にある。唐堀遺跡の例は連鎖状三叉文の文様帯の上下に施文している。

4 連鎖状三叉文、あやくり帯縄文、あやくり状入組文の時期

まずはあやくり状入組文の時期について検討したい。あやくり状入組文は佐野遺跡の神田五六採集資料の中に“非連鎖的三叉文”の宮崎型三叉文と同一個体に施文された例がある（第1図-3）。宮崎型三叉文は長野市宮崎遺跡2号住居で大洞BC式が伴っており、佐野I a式に比定される（中沢2008）。その宮崎型三叉文と同一個体に施文されていることから、あやくり状入組文も佐野I a式併行と考えられる。しかし、佐野遺跡などに小形化したあやくり状入組文（第1図-4・5）があり、これらは頸部が「く」の字にくびれた器形の土器や上下沈線間の列点文による文様帯区画など佐野I b式以降に伴うことが多くなる要素をもつ例が多い。小形化したあやくり状入組文は佐野I b式期まで下る可能性がある。

次にあやくり帯縄文の時期について検討したい。あやくり帯縄文の出土状況を見ると、大桑村大明神遺跡で出土している（第1図-6）。大明神遺跡は佐野I a式～佐野I b式の土器でまとまるため、あやくり帯縄文は佐野I a式～佐野I b式の時期と考えられる。また千曲市円光房遺跡1号土器集積において主文様に帯縄文をもつ壺がある（第1図-7）。円光房1号土器集積は大洞BC式、大洞C1式が伴っており、佐野I a式～佐野I b式の時期に比定される資料である。このことから帯縄文は佐野I a式～佐野I b式の資料と考えられる。

加えて、あやくり帯縄文は佐野I a式がまとまる新潟県正面ヶ原A遺跡L5-1号土坑出土資料や同遺跡2号住居出土資料、宮崎遺跡2号住居出土資料にはみられない。このことから、あやくり帯縄文は佐野I b式と考えたい。

最後に、連鎖状三叉文の時期について検討したい。連鎖状三叉文は宮崎遺跡2号住居出土資料の

中に1点ある（第1図-8）。また、佐野遺跡第1・2次調査出土資料に鍵の手文と同一個体に施文された例がある（第1図-9）。鍵の手文は佐野I b式の文様であり（中沢2008など）、連鎖状三叉文は佐野I b式期にもあると考えられる。また、エリ穴遺跡14号住居出土資料に花卉状雲形文と同一個体に施文された例がある（第1図-10）。花卉状雲形文は宮崎遺跡第2トレンチ第10層で大洞C2式初頭の浅鉢が伴って出土しており、佐野II式古段階に比定される（中沢2008）。以上から、連鎖状三叉文は佐野I a式で出現し、佐野II式古段階まで継続する文様と考えられる。

上記より、あやくり状入組文は佐野I a式～佐野I b式、連鎖状三叉文は佐野I a式～佐野II式古段階、あやくり帯縄文は佐野I b式の文様と考えられる。

川原遺跡で出土した第1図-2の文様は、連鎖状三叉文に含められるだろうが、あやくり帯縄文にも類似する文様である。連鎖状三叉文とあやくり帯縄文の時期から、佐野I b式に比定できる。

5 まとめ

本稿では川原遺跡から出土した縄文時代晩期前半の土器とその文様について分布・編年を検討した。

第1図-2の文様のような「フ」の字形の連鎖状三叉文の類例はそのほとんどが北信地方や新潟県上越地方にあり、北陸に近い。今回川原遺跡でみつかった土器は北陸の影響を受けた土器であろう。今後は資料の増加を待って日本海側をはじめとした北の地域と、太平洋側の地域の文化がどのように交わっているか検討していきたい。また、佐野式土器研究に関して、課題としてよく挙げられるのが、大洞BC式～C1式期に北陸に分布する中屋式との関係である。北陸の中屋式と長野県の佐野式には鍵の手文や入組文等のいくつかの文様や、深鉢の器形が、頸部が「く」の字に屈曲する深鉢で共通する。このため中屋式と佐野式の差異が不鮮明となっている。今回取り上げた「フ」の字状の三叉状の入組文やそれに類するあやくり

状入組文、あやくり帯縄文はまさしくその共通する文様のひとつである。今回は前述した3種の文様の分布について検討したが、他にも列点文など共通する文様はあり、佐野式・中屋式双方の視点から、それぞれの持つ要素について整理する必要がある。

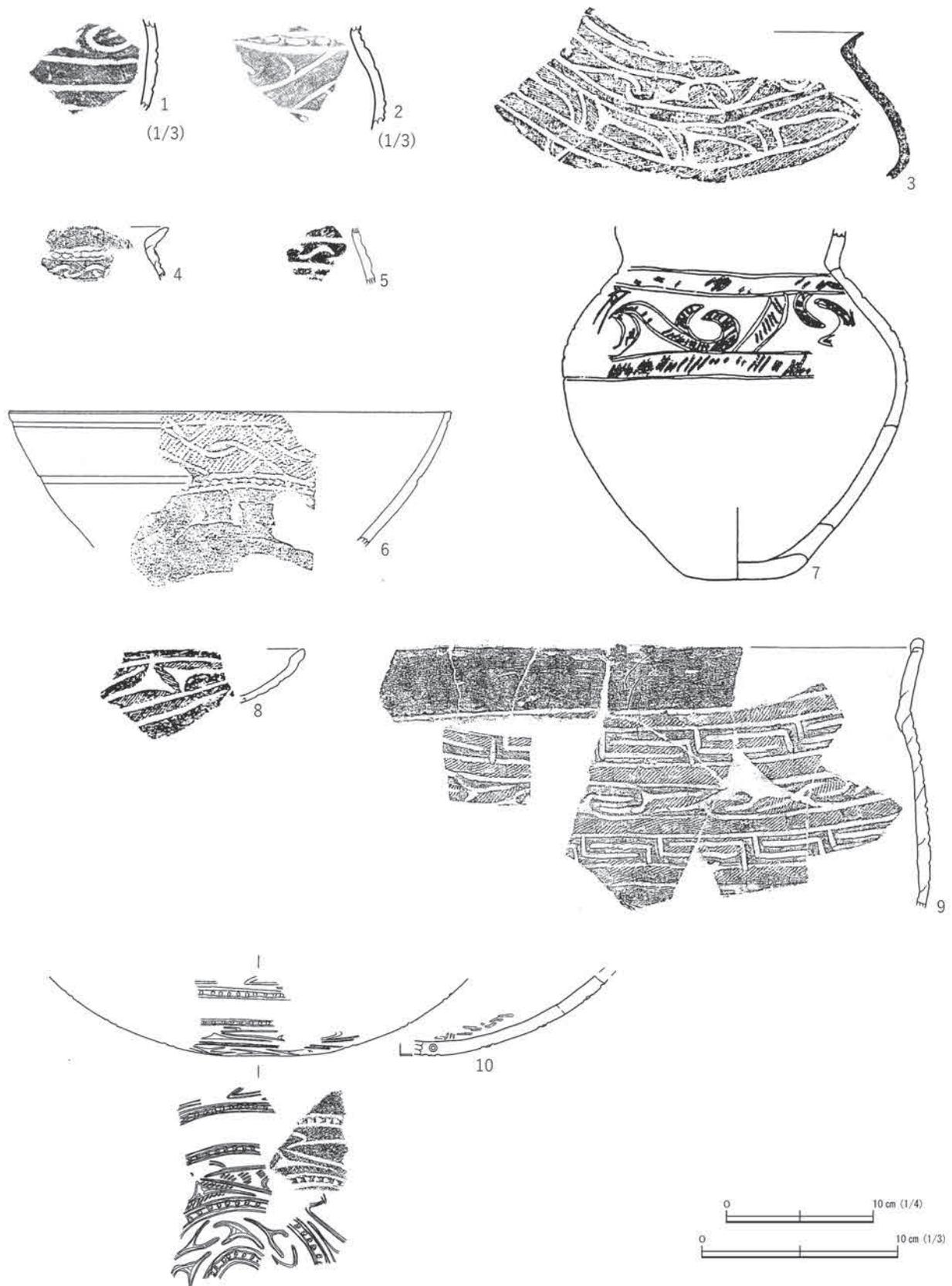
今回多少強引な編年となってしまったが、連鎖状三叉文とあやくり帯縄文、あやくり状入組文の時期について考察した。特に宮崎型三叉文などに代表される“非連鎖的三叉文”と“連鎖状三叉文”は存続する期間が異なるものと考えてよい。さらに言えば、連鎖状三叉文は正面ヶ原A遺跡L5-1号土坑や同遺跡2号住居になく、宮崎遺跡2号住居にはあることから、非連鎖的三叉文と“連鎖状三叉文”は出現する時期も異なる可能性が考えておけるが、更なる検討を要する。佐野式土器の編年については、器形の変遷を踏まえながら改めて整理したい。

本稿執筆にあたり、川原遺跡の整理を担当している綿田弘実、春日皓介の両氏から、川原遺跡出土晩期土器の実測の機会並びに助言を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

<書籍等>

- 佐藤雅一2010「正面ヶ原A遺跡の調査概要」『正面ヶ原A遺跡からみる縄文社会—北信越の縄文時代後期後葉から晩期前葉—予稿集』津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 中沢道彦2004「佐野式土器研究の現状と課題」『第17回縄文セミナー—晩期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 中沢道彦2008「佐野式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 中村豊1997「浮線文土器の成立過程」『立命館大学考古学論集』I 立命館大学考古学論集刊行会
- 百瀬長秀1992「長野県」『第5回縄文セミナー—縄文晩期の諸問題』縄文セミナーの会
- 渡辺裕之2004「新潟県における縄文晩期中葉の様相」『第17回縄文セミナー—晩期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 渡辺裕之2010「正面ヶ原A遺跡からみた縄文時代晩期の土器様相」『正面ヶ原A遺跡からみる縄文社会—北信越の縄文時代後期後葉から晩期前葉—予稿集』津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 渡辺裕之2016「縄文土器—晩秋の輝き—縄文晩期とその土器」『魚沼地方の先史文化』津南町遺跡発掘報告書刊行会
- 渡辺裕之2021「縄文時代晩期前葉の文化様相—考古資料からみた信濃川流域の考古文化—」『千曲川—信濃川流域の先史文化』津南町教育委員会
- <報告書>
- 青木和明・矢口忠良1988『宮崎遺跡』長野市教育委員会
- 青木重孝・寺村光晴・安藤文一1974『細池遺跡』糸魚川市教育委員会
- 石橋正敏・古澤安史ほか2014『樽沢開田遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
- 小林正春・馬場保之ほか1994『中村中平遺跡』長野県飯田市教育委員会
- 佐藤敦・江端高行・相羽重徳2002『寺地遺跡』北陸新幹線関係発掘調査報告書I 新潟県教育委員会
- 新谷和孝1988『大明神遺跡』大桑村教育委員会
- 鈴木佑太郎・藤巻幸男ほか2021『石川原遺跡』(3) (公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 関孝一・大原正義・永峯光一ほか2001『湯倉洞窟』高山村教育委員会
- 関口博幸・松村和男ほか2022『唐堀遺跡』(2) (公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 田川幸生1989『佐野遺跡(第8次)』長野県下高井郡山ノ内町教育委員会
- 立木由理子・吉沢環・植田弥生・木越邦彦1999『国道18号上新バイパス関係発掘調査報告書IV』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 親跡喬・野村忠司ほか2000『籠峰遺跡発掘調査報告書II—遺物編』中郷村教育委員会
- 寺村光晴・青木重孝・関雅之ほか1987『史跡寺地遺跡』新潟県青海町
- 永峯光一ほか1967『佐野』山ノ内町教育委員会
- 新津健1989『金生遺跡II—縄文時代編』山梨県教育委員会
- 原田政信・森嶋稔1990『円光房遺跡』戸倉町教育委員会
- 三村竜一・百瀬長秀・原田健司2019『エリ穴遺跡—遺物編2—第4分冊』松本市教育委員会
- 森尚登・島田恵子1980『明専寺・茶臼山遺跡』牟礼村教育委員会
- 八幡一郎1932「信濃国下高井郡佐野の土器」『考古学』3巻3号 東京考古学会
- 家根祥多・青木政幸・岡本洋2000『長野市宮崎遺跡第1～5次調査概報』立命館大学文学部学芸員課程
- 横山かよ子2000『茶磨山遺跡』牟礼村教育委員会



1~2：川原遺跡 3~5・9：佐野遺跡 6：大明神遺跡 7：円光房遺跡 8：宮崎遺跡 2号住居
10：エリ穴遺跡 14号住居及び関連グリッド

第1図 川原遺跡出土晩期土器及びあやくり状入り組み文・あやくり帯縄文・連鎖状三叉文土器類例

(2) 飯田市西浦遺跡出土和鏡について

上田 典男

1 はじめに

2022年8月10日、飯田市西浦遺跡¹⁾の平安時代の竪穴建物跡(SB107)から和鏡(以下、西浦鏡と称す。)が出土した。鏡面・鏡背とも腐食に伴う土砂の付着が著しかったため、2022年8月25日、長野県立歴史館の器材・設備を借用して、エタノール洗浄、実体顕微鏡観察、X線透過撮影を実施し、2024年1月18・19日実体顕微鏡下による錆等の除去、同年2月6日防錆処理(ベンゾトリアゾール処理)を実施した。

この間、2023年6月6日、立正大学文学部教授時枝務氏に、当該和鏡は大きさから言って「羽黒鏡」のグループで、径が小さいタイプであること等のご指導をいただいた。

洗浄、錆取り、X線透過撮影を経ても、一向に鏡背の文様が鮮明にならず、〇〇鏡と命名できない状況であるため、せめて類例を探すべく、時枝先生の言葉を頼りに、2025年9月から「羽黒鏡」を所蔵する博物館等への資料調査を、和鏡の応急処置を担当した水科調査研究員とともに実施した。

本稿は、その資料調査のまとめでもあり、今後の報告書作成にあたっての基礎資料となることを指向するものである。

2 和鏡の出土状況

和鏡が出土した竪穴建物跡(SB107)は、カマドが位置する東壁北端から南壁、西壁の検出面で竪穴壁に被熱痕跡が確認された。しかし、上屋構築材等が炭化して遺存する状況は見られず、単なる焼失家屋とは言い難い。ただし、カマド前から南東隅の貯蔵穴にかけて、大量の炭化物・焼土ブロックが床面上や埋土中に分布しており、上屋等撤去後、何らかの火入れが行われ、その後、竪穴全体を埋め戻し、カマド正面に小穴を掘り込んで、鏡面を上にした状態で和鏡が埋納されたと考えられる。カマドの破壊及び上屋等の撤去から西



図1 西浦遺跡出土和鏡のX線画像



図2 西浦遺跡 SB107完掘写真



図3 和鏡の出土状況

浦鏡の埋納までが、カマド及び竪穴の廃絶儀礼として捉えられないか。

西浦鏡については、容器に入れられた、布等で包まれた等の痕跡は認められず、直接土中に、鏡面を上、ほぼ水平にした状態で出土した。

竪穴埋土・床面からは、明和27号窯式の灰釉陶器が多数出土しており、小平編年に照らすと、SB107の時期は14期、11世紀中葉の所産と想定される²⁾。竪穴の埋没と西浦鏡の埋納が一連の廃絶儀礼と考えれば、西浦鏡の製作年代は、11世紀中葉以前とすることができる。

また、西浦遺跡では中央新幹線建設工事に伴って2024年度までに計15,000㎡弱を調査してきたが、当該期の竪穴建物跡はSB107のみであり、10世紀以降の飯田盆地の集落の在りように合致している。

3 西浦鏡について

(1) 諸属性について³⁾

径8.4cmの円鏡で、重量は、79.8gを測る。縁式は、直角式細縁で、断面形状は、直角三角形を呈する。縁高は、0.8cmで、それに比し、鈕頭がわずかに低い。鈕座ははっきりしないが、X線画像を見ると蓮華座鈕または花形座鈕であった可能性がある(図1)。界圏は、単圏細線で、鏡背面の文様は、内外区それぞれ別の文様構成をとる。現在、把握できる範囲では、内外区ともに唐草文が主体で、鳥文や蝶文は判別し難い。鏡面はほぼ水平で、平滑である。X線画像からは、周縁寄りに1/3程度湯回り不良が確認でき、微小な鬆が全体的に散在することが見て取れる(図1)。

なお、当センターの『年報』39で、西浦鏡について「周縁を折り曲げたような細工が等間隔に6カ所確認された」と報告した。しかし、これは、工業用X線透過装置の受光盤が持つ複数のイメージセンサーの境界が、隙間や段差として画像上に現れたもの⁴⁾を、「周縁を折り曲げたような細工」と誤って捉えてしまったものである。ここで、事実として、周縁の折り曲げ等は皆無である、と訂正しておきたい。



図4 錆取り後



図5 処理後

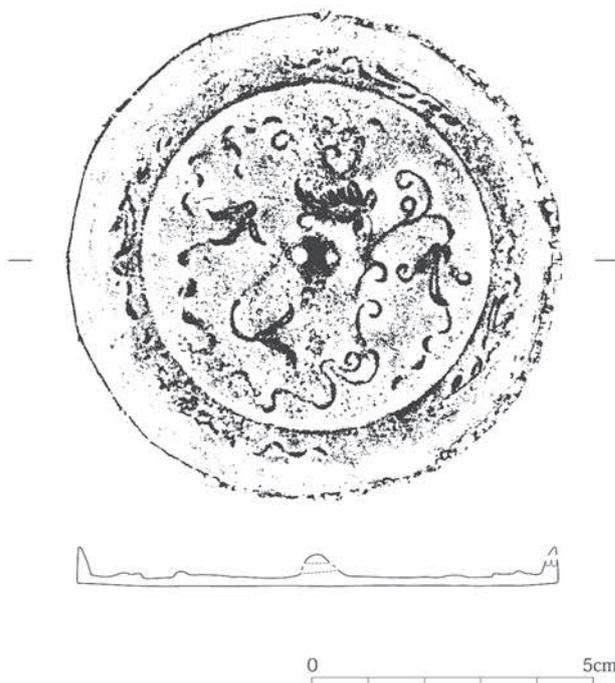


図6 西浦鏡拓影

(2) 鏡背文様について

前述のとおり、鏡背の文様は内外区とも唐草文が主体である。ここでは、唐草文主体と判断した経緯をまとめておく。

図7で示したA～Dについては、立体的であり、個々にまとまっているため、和鏡の文様に多く見られる鳥文（鳳凰か）のようにも見える。

このうち、AとBはX線画像を見る限り、同一の文様または同一のモチーフとすることができる（図8）。うねりながら両側に開く部分は、鳳凰または尾長鳥の尾羽を表し、2羽が連なって飛翔している様かと期待してしまう。

一方、図9の拓本で見る限り、BとCは似通っており、Cも鳥として見てよいか。

Aには筋状に凹凸があり、これを翼と見てよいか。しかし、この位置に翼があると、鳥としての全体形状のバランスが良くない。では、筋状の凹凸は何を表しているのか。和鏡の諸例から、松葉、山吹の葉、撫子の花卉等が想定される。

図9左は、出羽三山歴史博物館が所蔵する「草花飛雀文鏡」（『羽黒山古鏡圖譜』圖版番號51）の一部であるが、左右の托葉と葉身が描かれている。葉身は、主脈を中心に左右とも側脈が分別できるよう細かく描き分けられている。

これとA（図9右）を対比すると、左右の托葉に加えて、筋状の凹凸は側脈の表現であり、Aは植物の葉を表していると考えてよさそうである。とすれば、Bも植物の葉である可能性が高い。また、これらの核となるような文様に連なる捻転またはS字状にうねる細かい隆起線は、蔓草の蔓を表現していると考えられる。特に、Dは蔓と連続し、蔓から派生する葉を表現しているように見える。また、Cは、鈕（座）から延びた蔓の延長上に連なる葉ではなかろうか。そうみると内区の唐草文は、様式化していないものの、鈕を始点に左回りに旋回し、鳥文や動物文等の主体となる文様の配置が無い分、内区全体に伸び伸びと展開していると捉えられよう。

一方、外区の文様は、「並弁唐草⁵⁾」と称されるものに似る（図11）。西浦鏡も外区を全周せ

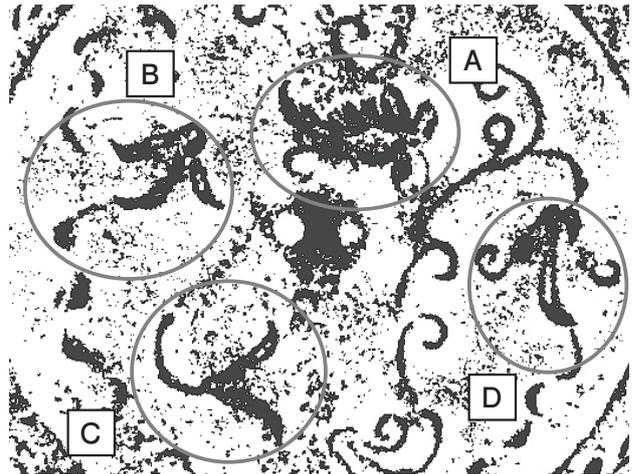


図7 核となる文様

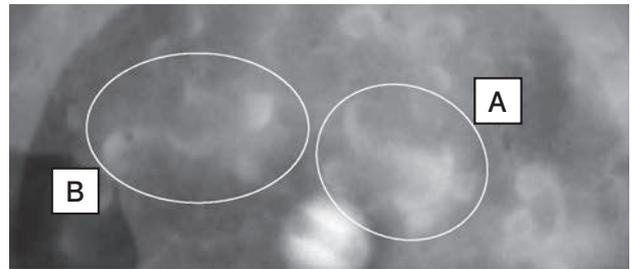


図8 X線画像上のAとB



図9 文様の対比

左：草花飛雀文鏡の一部 右：西浦鏡のA

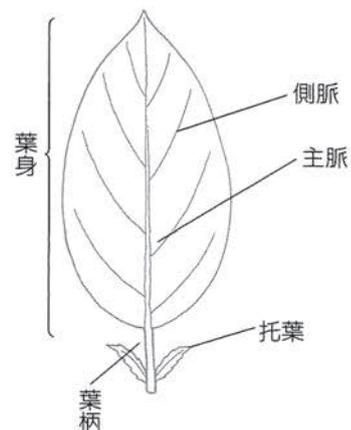


図10 葉の構造（久志・内藤1998より）

ず、4単位にまとまる可能性がある。類例として、和泉市久保惣記念美術館が所蔵する「唐草鴛鴦文鏡」(図13)や東京国立博物館が所蔵する「蔓草双鳥鏡」などが挙げられよう。

西浦鏡の鏡背文様が唐草文のみであることについては、(財)黒川古文化研究所研究員 川見典久氏にご教示いただき、その唐草文が左回りに巡回することについては、東京国立博物館主任研究員 清水健、山本亮両氏にご教示いただいた。

以上のことから、西浦鏡の名称を「唐草文鏡」としたい。

(3) 西浦鏡の時間的位置付けについて

西浦鏡(唐草文鏡)は、竪穴建物跡の出土土器・陶器から、年代的に11世紀中葉以前に製作された鏡と位置付けることが可能である。鏡背文様の唐草文は、唐式鏡に主体的に用いられる文様であり、内外区が別々の文様構成をとることも含め、和鏡として古い様相、唐式鏡に近い様相を色濃く残しており、竪穴建物跡出土土器で示された11世紀中葉以前という時間軸に合致する。

2025年、中野市南大原遺跡の10世紀前半の竪穴建物跡から、鏡面を上にして、水平状態で、径8.4cmの八稜鏡が出土した⁷⁾。X線画像を見ると、核となる鳥文も見えず、唐草文も見られない(図14)。草花文が主体となる文様構成と見ることができよう。

南大原遺跡の八稜鏡は、鏡胎の形が唐式鏡で、鏡背文様が和鏡と捉えることができよう。西浦鏡と南大原遺跡の八稜鏡は、鏡胎の形式と鏡背文様の組み合わせが新旧逆転しているが、いずれの鏡も、唐式鏡から和鏡へ鏡式が遷移する過渡期の所産とみてよいのではなかろうか。

4 今後の課題～まとめにかえて～

今回の資料調査を通じて、西浦鏡の鏡名を鏡背面の文様等から「唐草文鏡」とすることができた。出土状況からは、製作年代の下限を11世紀中葉と押さえることができ、今後、様々な角度から分析を進めていく上での出発点となるものと考え

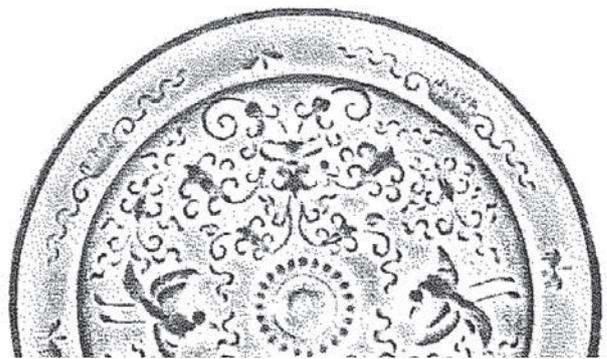


図11 「唐草千鳥鏡」(広瀬1974より)



図12 西浦鏡の外区文様



図13 「唐草鴛鴦文鏡」(和泉市久保惣記念美術館蔵)

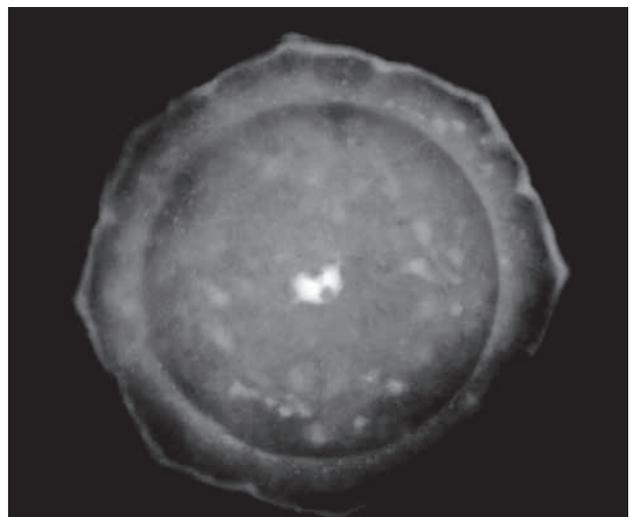


図14 南大原遺跡出土八稜鏡のX線画像

る。

西浦遺跡が所在する下伊那地域では、中世以降の和鏡は複数発見されているものの、平安時代の事例としては、阿智村京の森経塚出土和鏡が知られるのみ⁶⁾で、西浦鏡は発掘調査で得られた唯一の平安時代の和鏡といえる。

長野県出土の古代の鏡⁸⁾は、経塚出土品・伝世品を含めて88面ある。その内、和鏡は、5遺跡8面、経塚出土品23面、伝製品等4面である。また、八稜鏡は34遺跡47面で半数を占める⁹⁾。八稜鏡の中には、「大陸製、あるいは大陸製鏡を踏み返した鏡である可能性が高い¹⁰⁾」と指摘される塩尻市吉田川西遺跡の瑞花双鳥文八稜鏡がある。

上記の数量及び内容をどう捉えていくか。今後、集成作業と個々の鏡の詳細把握や消費地としての位置付けを行っていく必要がある。

また、踏み返しの鏡については、流通があったのか、現地で製作されたのか。長野市松原遺跡¹¹⁾では、梵鐘・馨・扉金具の鋳型とともに11世紀前半の青銅製品の鋳造炉を伴う竪穴建物跡（工房跡）が確認されており、踏み返しの鏡が長野県内で製作された可能性もあるだろう。

鏡の出土状況については、鏡面を上、かつ水平にした状態で埋置された西浦遺跡例・南大原遺跡例があり、逆に鏡背面を上、かつ水平にした状態で埋置された松本市兎川寺遺跡例¹²⁾もある。

上記したように検討課題は多く、本稿を通過点として、西浦遺跡の竪穴建物跡の埋土から和鏡が出土したという事実を踏まえ、和鏡自体の分析はもとより、和鏡の出土状況を含めて、祭祀行為や該期の集落内の在り方についても、分析を進めて行く必要がある。

謝辞

普段、土器や石器などを相手にしている筆者にとって、鏡は未知の領域であり、文様の見方や名称等、初めてのことばかりであった。本稿の端緒となるご指導をいただいた立正大学文学部教授時枝 務先生に感謝申し上げます。また、資料調査で伺った出羽三山歴史博物館、(財)黒川古文

化研究所、和泉市久保惣記念美術館、東京国立博物館では数多くの実物を熟覧させていただききました。同時に、対応していただいた各機関の職員の皆様には多大なるご教示をいただきました。ご芳名を記して謝意を表する次第です。

渡部 幸、川見典久、橋詰文之、上別府洋子、清水 健、山本 亮

註

- 1) 飯田市西浦遺跡の発掘調査は、東海旅客鉄道株式会社による中央新幹線建設工事に伴うもので、2021年に確認調査、2022年から現在に至るまで本調査を継続しており、来年度も本調査が計画されている。
- 2) 小平和夫2003による。
- 3) 中野政樹1969・広瀬都巽1974・久保智康1999を参考に記載した。
- 4) 長野県立歴史館文化財専門主事 白沢勝彦氏のご教示による。
- 5) 広瀬都巽1974の中で「(33)唐草千鳥鏡」(平安後期)の図版解説で外区の文様を「雲文の転化と見られる並弁唐草」と称している。
- 6) 岡田正彦2007による。
- 7) 中野市南大原遺跡の発掘調査は、国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所による上今井遊水地整備事業に伴うもので、2023年から本調査を継続しており、来年度も本調査が計画されている。2025年の調査概要については、本誌掲載の「南大原遺跡」を参照されたい。八稜鏡は径8.4cmで、焼失家屋の炭化した屋根材の上から出土した。
- 8) 原 明芳2014と川崎 保他2022から抽出した。
- 9) 原 明芳2014による。その後も、本稿で紹介した南大原遺跡の他、長野市篠ノ井佃遺跡等で新資料が出土しており、改めて集成する必要がある。
- 10) 長久智子2010による。氏は、瑞花双鳥文八稜鏡の型式分類を行う中で、吉田川西遺跡 SK128出土の八稜鏡を「縁や鈕、界圍の形式から日本製ではなく」「9世紀から10世紀にかけて大陸で製作されたとみられる作例」としている。
- 11) 上田典男他2000による。
- 12) 竹原 学1999による。「銅鏡埋納遺構」の時期は、周囲の遺構の状況から9世紀後半と想定されている。鏡は、径4.9cmの円鏡で、鏡背には等間隔に5単位の低い円形の突起がみられる。

引用・参考文献

和泉市久保惣記念美術館 1984『和泉市久保惣記念美術館蔵鏡拓影』

- 今永清二郎 1987『日本の文様』8 唐草・蔓 小学館
- 上田典男 2023「(10) 西浦遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』39 2022年度
- 上田典男 他 2000「上信越自動車埋蔵文化財発掘調査報告書 松原遺跡 古代・中世」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』53
- 内川隆志 2003「和鏡の型式と変遷」『考古学ジャーナル』No.507 ニューサイエンス社
- 岡田正彦 2007「下伊那地方の唐式鏡・和鏡」『飯田市美術博物館研究紀要』17
- 加古千恵子 他 1987「多利遺跡群発掘調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』第46冊 兵庫県教育委員会
- 川崎 保 他 2022「(4) 下諏訪町ふじ塚遺跡の和鏡」『長野県埋蔵文化財センター年報』38 2021年度
- 川見典久 2020「和鏡賞鑑」『研究図録シリーズ』7 (財) 黒川古文化研究所
- 久保智康 1987「平安後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』下
- 久保智康 1999「中世・近世の鏡」『日本の美術』394至文堂
- 小平和夫 2003「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』第55巻第2号 信濃史学会
- 財団法人 黒川古文化研究所 2005『所蔵品選集 青銅の鏡—日本—』
- 竹原 学 1999「長野県松本市兎川寺遺跡緊急発掘調査報告書」『松本市文化財報告』No.137
- 中野政樹 1969「和鏡」『日本の美術』42 至文堂
- 長久智子 2010「9世紀における瑞花双鳥文八稜鏡の初現形式」『愛知県陶磁資料館研究紀要』15
- 原 明芳 2014「塩尻市野辺沢出土の毛抜形太刀と八稜鏡をめぐって」『長野県立歴史館研究紀要』第20号
- 原 明芳 他1989「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3 吉田川西遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』3
- 原田一敏 2001「牡丹双鳥鏡考—和鏡における絵画意匠の導入と同一文様の様式的変遷」『MUSEUM』第570号 東京国立博物館
- 久志博信・内藤登喜夫1998『日本の山野草ポケット事典』日本放送出版協会
- 広瀬都巽 1974『和鏡の研究』角川書店
- 広瀬都巽 他 1914『和鏡圖譜』東京尚古出版社
- 藤原直人 他 2009「御社宮司遺跡 中村・外垣外遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』88
- 前田洋子 1981「和鏡の変遷」『考古学ジャーナル』No.185
- 前田洋子 1984「羽黒鏡と羽黒山頂遺跡」『考古学雑誌』第70巻第1号
- 村木二郎 2006「和鏡」『鎌倉時代の考古学』高志書院
- 矢口忠良 他 1975「浅川西条」『長野市の埋蔵文化財』第2集 長野市教育委員会
- 山下峰司 1995「4. 灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 米山一政 1982「北日名経塚」『長野県史考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)

(3) 安塚古墳群の中世火葬遺構

—本年度の調査成果から—

河西 克造

1 はじめに

本年度、安塚古墳群の調査では、遺跡範囲の西端（2・3区）で中世以降の礎石建物跡（堂宇と推測）と火葬遺構¹⁾が確認された（本誌18～21頁参照）。火葬遺構では、火葬の実像に迫る知見が得られたため、本稿ではその知見に若干の私見を加えて披歴したいと思う。安塚古墳群の整理作業を行ううえでの予察である。

2 安塚古墳群の火葬遺構

火葬遺構は10基確認された（表1）。これらは、遺構の規模と属性、出土遺物（火葬骨、炭化物）から、遺体を焼却する際に使用された穴（荼毘所）と理解できる。

火葬遺構の形状は長方形が大半である。規模は狭川真一氏が福岡県を中心とした調査事例（139基を対象）を分析し、一般的な規模と指摘（狭川2011）したものよりやや大きい。深さは、検出面（基本土層Ⅳ層）から底面まで0.5mを測るものがある（SK1072、図1）。火葬遺構は中世の包含層（基本土層Ⅱ層）から掘り込まれており、SK1072の深さにⅡ層の厚さ（約0.15m）を加えると約0.65mの深さを有することになる。Ⅱ層は上面を近世以降の耕作で削平されているため、約0.65m以上の深さを有したことは間違いない。遺体が死



図1 調査中の火葬遺構（SK1072）

後硬直する前に腕と足を折り曲げれば入る規模で、風（酸素）を入れないと十分火が燃えないと想起されたものである。以下、火葬遺構を構成する要素（施設）の様相をうかがうこととする。

2 棺台の状況

一般的に、火葬遺構の底面付近には棺を安置するために設置したと理解されている棺台の石（以下、「棺台」と呼ぶ）がある。安塚古墳群では、7基の火葬遺構から棺台が確認された。棺台は、底面に設置されているものと底面よりやや上位に設置されているものがあり、後者には、後述する坑底溝（棺台と棺台の間にある溝）が埋まった後に設置されているものがある。

棺台の配置方法は、①2～4個の石が2列に並置（4基）、②石が積まれて2列に並置（1基）、③石敷き（1基）、④石敷きが左右非対称（1基、図2）、以上4種類が確認された。

調査では、棺台の取り上げ時に被熱状況を観察した。大半の石に被熱痕跡が確認されたが、被熱状況では興味深い所見が得られた。

火葬遺構（SK1071）の棺台の被熱状況を示したものが図2である。棺台には、①表面に被熱痕

表1 火葬遺構一覧（計測値は突出部を除く）

遺構名	形状	規模 (m)	深さ (m)	楕崎分類
SK1050	不整形	0.9×0.7	0.04	I か
SK1051	長方形	1.5×0.8	0.3	I
SK1052	長方形	1.3×0.8	0.3	II
SK1053	長方形か	1.5×不明	0.3	II か
SK1055	長方形	1.2×0.9	0.4	II
SK1067	長方形	1.4×0.9	0.4	II
SK1071	長方形	1.5×0.9	0.3	II
SK1072	方形	1.5×0.9	0.5	II
SK1099	長方形	1.5×1.0	0.2	I
SK1100	長方形	1.1×0.9	0.2	II

跡、②裏面に被熱痕跡、③両面に被熱痕跡、以上3種類が確認された。調査では、棺台の裏面が火を受ける状況は確認されていない。棺台の裏面や両面に被熱痕跡があることは、棺台を反転して利用（複数回利用）したことが推測される。ちなみに、SK1071の棺台は、坑底溝が埋まった後に設置されている。棺台の下には微細な火葬骨があり、棺台と棺台の間には火葬骨粉が入り込む状況を確認した（図3）。

3 突出部と坑底溝の状況

一般的に、火葬遺構には「突出部」「張り出し部」「袖」などと呼称されている煙突状の張り出しが設置されているものがある（安塚古墳群では「突出部」と呼称した）。平面形状がT字状になる火葬遺構である。

安塚古墳群では、7基の火葬遺構で突出部が確認された。この突出部は、火葬遺構の長辺西壁に設置されている。安塚古墳群は扇状地の扇端部に立地しており、扇頂部側（長野県と岐阜県の県境側）から強い風が吹く。安塚古墳群周辺で調査された古代の集落では、竪穴建物跡の西側にカマドを設置したものは稀であった²⁾。したがって、西側に煙出しの施設を設置しても、煙出しとしての機能を十分果たさないと考えられた。

安塚古墳群では、突出部の形態に3種類ある。①火葬遺構の西壁から約1mの長さを有するもの（SK105、図4）、②①と同じ形状で長さが約0.3mのもの、③三角形に突出するもの、である。①②には被熱痕跡がなく、突出部内を火が通過したことは考えにくい状況であった。また、③では、突出部の底面から炭化材（丸太材か）が出土し（SK1071、図5）、炭化材のまわりでは被熱痕跡が確認された。この丸太材は、突出部の先端から火葬遺構内に向けて斜行する状態で出土した。

以上の状況から、①②の突出部は空気を入れるための通気口、③の突出部は焚口であったと考えられる。

次に坑底溝の状況について触れる。

坑底溝は8基の火葬遺構で確認された（内7基

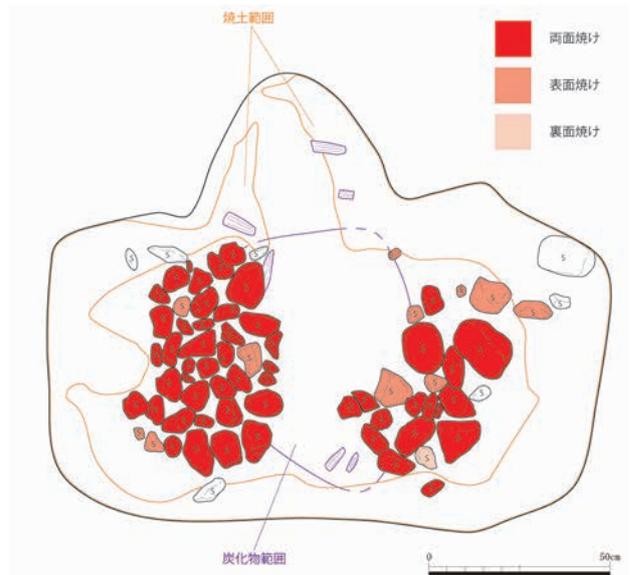


図2 棺台の被熱状況図 (SK1071)



図3 棺台のインプリント (白い部分は火葬骨粉、SK1071)



図4 突出部の断ち割り断面 (SK1055)

は突出部が存在)。この坑底溝は、突出部とつながるものと、つながらないものがあり、後者は突出部の底面が火葬遺構の底面より約10cm上位にある。突出部の底面と坑底溝の底面がつながるか否かが意味することは、今後検討する予定である。

坑底溝には、火葬骨と銭貨、炭化材を含む炭化

物が埋る。炭化材は自然木が主体で、坑底溝に入れ込んだ状況を示す事例がある。棺台の上に安置した棺もしくは遺体を燃やした木材と考えられる。さらに、坑底溝が埋まった後に設置された棺台が確認された（図6）。火葬遺構の複数回利用を示す事例となる。

4 炭化材の出土状況

火葬遺構は遺体を焼却した遺構であるため、火葬骨と炭化物（炭化材）、焼土の出土状況に注視した。ここでは、炭化材について触れる。

出土した炭化材は、火葬遺構の下位から①突出部の中、②坑底溝の中、③棺台と棺台の間（図7）、④棺台と壁の間（図7、8）、⑤棺台のやや上位（図9）、以上5箇所からまとめて出土した。炭化材の状況を見ると、③は④より若干低いレベルから出土しており、②③は棺台と同じ方向に（図7）、④は棺台と直交する方向にのびる状況が確認された。炭化材の方向は、棺台を境に明らかな違いがみられた。これは、②③が棺台に設置されていたものを下から焼くための木材、④は棺もしくは遺体の焼却時に前もって設置した薪のような木材と推測される。火葬遺構で最も上位から出土した⑤は、同じ方向を向く炭化材が数本単位でまとまる傾向はみられたが、全体的に統一した方向で出土していない。⑤は、微細な火葬骨、炭化物、焼土が多量含まれる層の中から出土していることから、遺体焼却中に火葬遺構内に入れた木材と推測される。

5 火葬遺構（穴）の機能

火葬では、火葬遺構のなかに棺もしくは遺体を入れて焼却したか、もしくは『善信聖人絵伝』（小松ほか1994）に描かれているように、地面に木材を井桁状に組んで焼却したかは、見解の相違がある。今回の調査では、どちらとも言える所見が得られたが、火葬骨、炭化物、炭化材、焼土の遺存状況が良好であり、穴の中で遺体を焼却した状態（最終の火葬）がそのまま遺存しているのではないかとの印象を受けた。本稿では、遺物の出



図5 突出部での炭化材出土状況（SK1071）



図6 坑底溝が埋った後に設置された棺台（SK1055）



図7 炭化材の出土状況（SK1052）



図8 炭化材の出土状況（SK1053）

土状況に筆者の私見を加えて焼却方法を考えてみたい。なお、穴の上位に堆積する埋土では、複数回利用した痕跡は確認されていない。

棺台と棺台の間から部位が推定できそうな火葬骨が出土したことと（図10）、銭貨の出土場所は、棺台と棺台の間が最も多い（図11）ことから、棺台の上に棺もしくは遺体を置いて焼却したと考えられる。棺もしくは遺体は、突出部から坑底溝に入れた木材と壁から棺台方向に入れた木材で焼却したと考えられる。また、棺台の上から出土した炭化材は、火葬時に投げ入れた木材と推測される。要するに、遺体を火葬遺構内に入れて焼却したとの理解である。『善信聖人絵伝』に描かれた親鸞上人の火葬風景のように、地面に木材を井桁状に組み、その上で棺を焼却したわけではないことになる。この火葬方法の違いは、中央と地方の差であるのか、階層の差であるのかは、今後の検討課題になる。

6 おわりに（火葬遺構にみられた複数回利用）

火葬遺構の複数回利用の存在を発見したのは、偶然である。試掘トレンチにかかった火葬遺構があり、その断面観察と火葬遺構を断ち割った断面観察において、坑底溝が棺台の下の立ち上がることを確認した時であった。火葬遺構の複数回利用を捉えるためには、棺台が設置されている火葬遺構の底面付近を、部分的に断ち割るような調査法を採用するか、もしくは棺台を取り上げた際のインプリントを注視することで、坑底溝と棺台の関係が把握できると思われる。

形而上である「火葬」行為を、形而下の「考古資料」から解明することは容易ではない。安塚古墳群の発掘調査において、細かな観察を繰り返すことで、「もの」から宗教行為の実像に迫る方法を模索する必要性を再度痛感した次第である。

註

- 1) 安塚古墳群では、「火葬」に関係した遺構を「火葬遺構」と呼称した。
- 2) 令和5年度に行った松本市島立南栗遺跡の調査所見。



図9 炭化材の出土状況（SK1067）



図10 棺台と棺台の間での火葬骨の出土状況（SK1052）



図11 棺台と棺台の間から出土した銭貨（SK1051）

参考文献

- 小松茂美ほか1994「善信聖人親鸞伝絵」『続々日本絵巻大成』伝記・縁起篇1
- 植崎修一郎2007「群馬県出土中世火葬遺構」『研究紀要』25（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 河西克造2009「甲信の中世墓」『日本の中世墓』高志書院
- 築瀬裕一2009「房総の中世墓」『日本の中世墓』高志書院
- 狭川真一2011「火葬土坑の検討」『中世墓の考古学』高志書院
- 吉澤 悟2013「火葬土坑・火葬場」『事典 墓の考古学』吉川弘文館

(4) 長沼城絵図の基礎的考察

—絵図類型と城下空間—

小出 晟生

1 はじめに

長沼城は、長野市穂保の千曲川自然堤防上に位置する城郭である。1568年（永禄11）に武田信玄が縄張を整備し、上杉方に対する前線基地として機能した⁽¹⁾。武田氏滅亡後は、上杉景勝の支配を経て豊臣蔵入地となった。さらに関ヶ原合戦後は、森忠政、松平忠輝の支配を経て、1616年（元和2）に佐久間氏を藩主とする長沼藩が設置された。ところが佐久間氏は1688年（貞享5）に改易され、長沼城は廃城となった。その後、耕地開発や水害によって城の遺構は埋もれ、地表面観察から縄張を確認することは困難になる。長野県埋蔵文化財センターが2021年度から2024年度にかけて行った発掘調査により、縄張の大まかな構造を捉えられたものの⁽²⁾、発掘調査の及んでいない城下町や千曲川堤防の下にある本丸跡の実態は判然としない。

だが幸いにも、近世の長沼城を描いた絵図が複数枚伝来している。それらは、長沼城の縄張復元研究に活用されてきた⁽³⁾。しかし、これまでの研究は、城郭本体の縄張を復元すること関心が集中しており、絵図それ自体の性格や長沼城下町については十分検討されていないように思える。長沼城絵図には城郭のみならず城下空間も描かれ、文献史料が限られる中、長沼城下町の実像に迫る

稀有な資料と考えられる。そこで、本稿では長沼城絵図の分析から、空間表現の特徴と絵図の類型化を試みたい。あわせて絵図の表現する城下空間の形成過程について検討する。

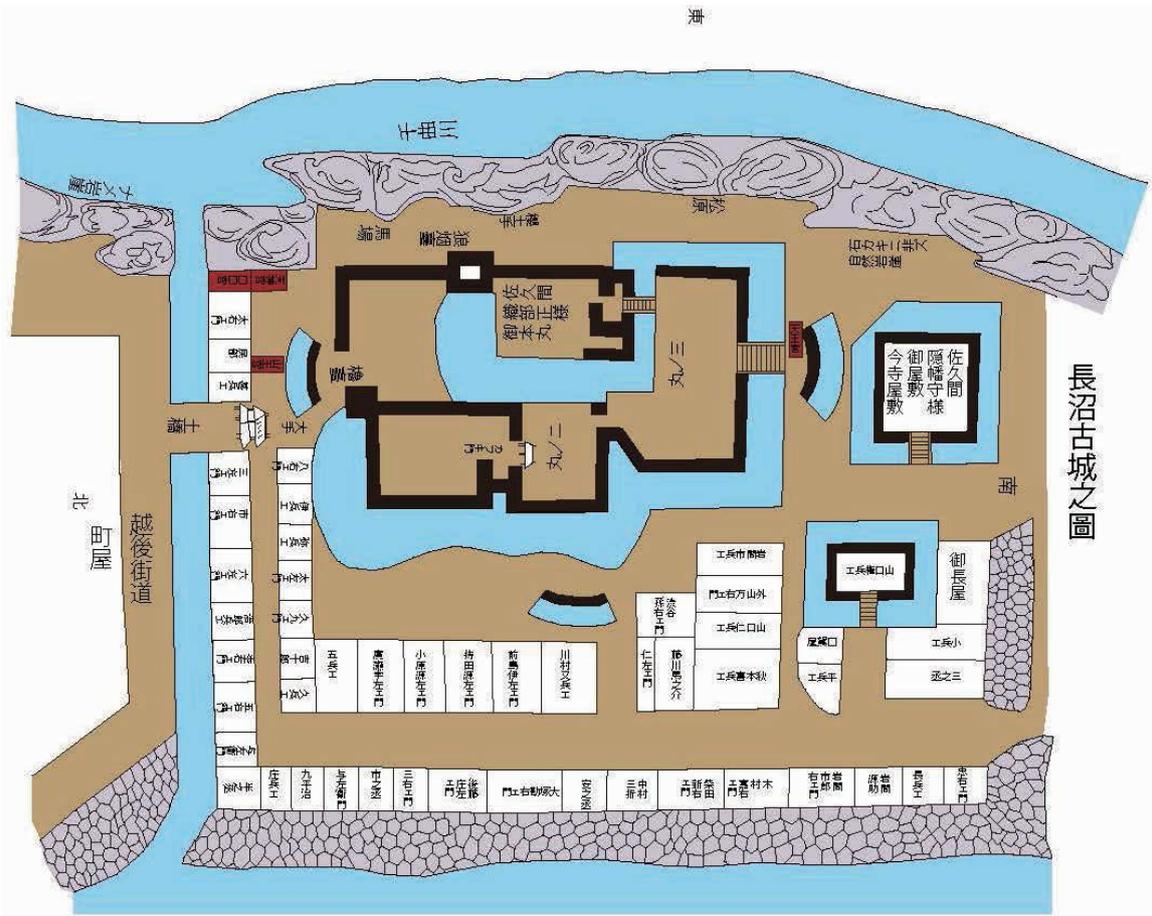
2 絵図の所在と伝来

管見の限り、近世に長沼城を描いた絵図は8点確認できる。ところが【図表1】のとおり、絵図の大半は作成年代及び作成主体が明らかではない。このうち、伝来がある程度判明しており、なおかつ文字注記の多い二枚の絵図に注目して論を進めたい。

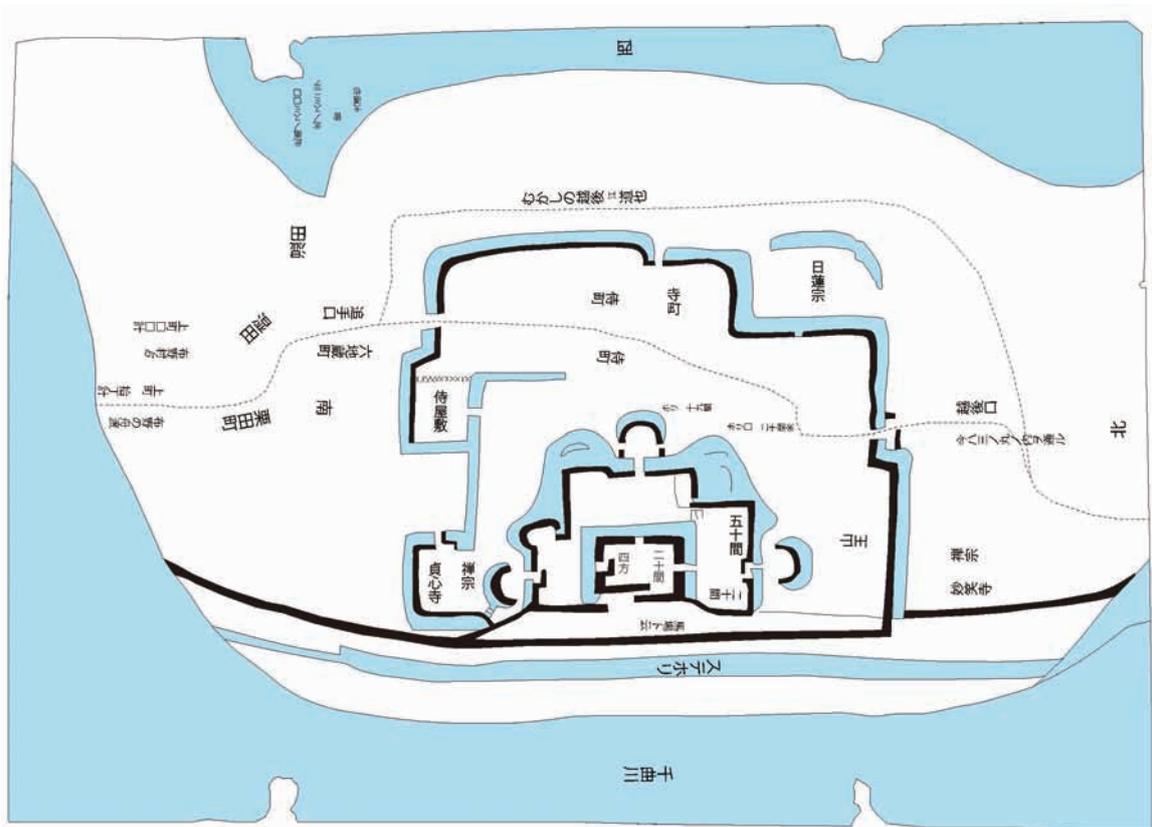
一枚目は、『長野市誌』の編纂過程で鬼頭康之氏によって紹介された山口公二氏所蔵「長沼古城の図」である（【図表2】）⁽⁴⁾。山口家は旧長沼藩士であり、長沼藩の家老をつとめたとされる⁽⁵⁾。「長沼古城之図」に描かれた家臣団屋敷のうち、最も規模が大きく、堀を伴った屋敷地を持つ「山口権兵衛」が山口家の先祖とみられる。絵図の本丸部分には、「佐久間織部正様御本丸」との記述があり、「佐久間織部正」は長沼藩の四代藩主勝茲に比定される。鬼頭氏によると、絵図自体は写であるが、原本は勝茲が長沼藩主であった1685年（貞享2）10月から1688年（貞享5）5月の間に作成されたとしている。このように、本絵図は長

No.	名称	所蔵元	作成年代	類型
1	長沼古城之図	長野市穂保山口公二氏所蔵	原本は貞享2年(1685)10月～貞享5年(1688)5月の間?	山口家本系
2	信州長沼城	長野市立博物館寄託（大日方家文書）	不明	大日方家本系
3	信州長沼城	浅野文庫「諸国古城之図」所収	17世紀～18世紀	山口家本系
4	水内郡長沼古城図	瀬下敬忠「千曲之真砂」所収	宝暦3年(1753)	山口家本系
5	日本古城絵図 信州長沼	国立国会図書館蔵	近世中期～後期	山口家本系
6	長沼之古城	長沼公民館所蔵（令和元年水害で流出）	不明	大日方家本系
7	水内郡長沼城図	長野県立図書館所蔵	不明	山口家本系
8	長沼城の図	旧豊野町中尾家所蔵	不明	山口家本系

【図表1】長沼城絵図一覧



【図表2】「山口家本」 トレース図



【図表3】「大日方家本」 トレース図

沼城の廢城前に描かれた可能性があり、現存する最も古い長沼城絵図と考えられている⁽⁶⁾。以後、煩雑を避けるため、「長沼古城の図」を「山口家本」、描写の類似した絵図群を「山口家本系統」と呼ぶ。

二枚目は、旧松代藩士大日方家に伝来した絵図である（【図表3】）。この絵図の作成経緯について明らかではないが、大日方家に伝来している絵図を「大日方家本」、描写の類似した絵図群を「大日方家系統」と呼ぶ。

3 絵図分類の概要

先に【図表1】で掲げた8枚の絵図は、曲輪形状と城下町の描写の特徴から「山口家本系統」と「大日方家本系統」の二類型に分類できる。【図表1】のうち、「山口家本系統」と考えられるのは、No.1、No.3、No.4、No.5、No.7、No.8の6枚で、「大日方家本系統」と考えられるのはNo.2、No.6の2枚である。

「山口家本系統」の絵図は、城郭内部の情報を細かく記していることに特徴がある。「山口家本系統」の絵図の共通点としては、①曲輪の形状・位置関係②家臣団の屋敷割の記載③「越後街道」の位置関係の三点があげられる。また、絵図によって濃淡はあるものの、「大日方家本系統」の絵図に比べて、惣構内部に描かれた家臣団の屋敷割を細密に描いている。特に、本家の「山口家本」に記された家臣名は延宝7年（1679）の検地帳に登場する人名と一致しており、絵図の信頼性を裏付ける⁽⁷⁾。また、これまでの発掘調査成果を踏まえても⁽⁸⁾、長沼城の縄張りの描写は、「大日方家本系統」に比べて正確だった。このことから、「山口家本系統」の絵図は、長沼城の城郭そのものを描写することを主目的としていたと考えられる。

一方、「大日方家本系統」の絵図は、本家である大日方家のものと、長沼公民館が所蔵するものの2枚が確認できる。両者の共通点としては、①全体的に丸みを帯びた曲輪・堀の描写②城下町全体の描写④城郭内の簡潔な文字注記、の四点を指

摘しておきたい。城郭本体を事細かに記した「山口家本系統」と異なり、「大日方家本系統」は城の縄張りを抽象的に描いている印象を受ける。また、1枚の絵図に上町から津野村までの領域を描いており（【図表4】）、実際のスケールより南北方向を圧縮して描いている。後述するように、上町から津野村の範囲は近世における長沼城下町の範囲と重なる。「大日方家本系統」の文字注記には、藩士名など個人名が一切記されていない一方、寺社・街道の名称、隣村までの距離、千曲川渡河点など地理的な情報が事細かに記されている。本家「山口家本」が藩士名や曲輪の名称を細かく文字注記しているのとは対照的である。つまり、「大日方家本系統」の絵図は、城郭そのものというより、長沼城下町の空間把握を目的として作成されたと考えられる。

このように、「山口家本系統」と「大日方家本系統」の間で差違が生じた要因として、それぞれ



【図表4】「大日方家本」の現地比定

の絵図の作成目的が関わってくる。「山口家本系統」の場合、長沼藩士の家に伝来した絵図であり、城郭内部の様相や藩士の所在を記録しておく必要があったと推測される。一方、「大日方家本系統」は城下町の空間構造を把握することが第一の目的であり、長沼城の縄張や藩士の個人名などの情報は二の次だったと考えられる。このような背景の違いが、両系統における描写対象の差異として表れた。

本稿では、矢守一彦氏の分類に従い、城郭そのものを描いた「山口家本系統」を「城郭絵図」、城下町を描いた「大日方家本系統」を「城下絵図」と分類する⁽⁹⁾。

4 長沼城下町の成立

それでは、長沼城絵図に描かれた城下町は如何にして形成されたのだろうか。笹本正治氏は、16世紀後期における善光寺門前町の衰退と長沼城下町・海津城下町の発展を指摘する⁽¹⁰⁾。笹本氏によると、北信濃最大の中世都市であった善光寺の本尊が武田信玄によって持ち去られた結果、善光寺門前町は衰退し、地域の経済的な中心地も海津・長沼の両城下町に移ったという。長沼城下が「都市的な場」として発展していたことは、1581年（天正9）に伊勢御師宇治久家が記した『信濃国道者之御祓くばり日記』から裏付けられる⁽¹¹⁾。同史料によれば、長沼城下には土豪、武家被官、商人など多様な階層の人々が集住し、出身地も様々であった。

長沼城下町のうち、「栗田町」の地名は現在の長野市栗田に由来すると思われるが、栗田町の小字名に「三河町」が残る。ここから、三河国出身者の移住が想定される。井原今朝男氏が指摘するように、三河は一向宗が多く、低湿地を開発する技術に長じていた⁽¹²⁾。中世後期の長沼が一向宗のネットワークに編成されており、千曲川氾濫原の開発は一向宗門徒が担った可能性が高い。【図表5】に示すように、中世起源の寺院の大半が浄土真宗であることも示唆的である。実際、越中の放生津・越後の直江津など北陸地方の中世港湾では、一向宗寺院が真っ先に低地開発に乗り出している⁽¹³⁾。

16世紀後期に都市的景観を呈した長沼城下町は、17世紀初頭に再編されたとみられる。明治期の地籍図や現景観を観察すると、長沼城下町は街道に沿って短冊型地割を形成している。しかし、原田伴彦氏が戦国期の諏訪社門前を「散居の都市集落」と位置付けたように⁽¹⁴⁾、16世紀段階では、寺社や武家居館が散在する景観が展開していたと考えられ、短冊型地割による画一的な城下町プランの成立を想定することは難しい。だが近世に描かれた「山口家本」を見ると、総構に圍繞された家臣団屋敷の一部には短冊型地割が認められる。1679年（延宝7）の「内町検地帳」を参照すると⁽¹⁵⁾、総構内部の家臣団屋敷の間口規模は、上級の藩士で15～20間、中下級藩士は2～10間であった。上級藩士であれば20間、中下級藩士は5間の規模が多く、長沼藩政期には一定の規格を備え

所在地	名称	宗派	長沼城下における存続年代（西暦世紀）										備考		
			14	15	16前期	16後期	17前期	17後期	18	19	20				
穂保	貞心寺	曹洞宗													寛永年間に長沼城下へ移転。
津野	正覚寺	浄土真宗													元来、水内郡東條村に所在。永禄年間越後長岡へ退転。元和年間に長沼城下へ移転。
津野	妙笑寺	曹洞宗													天正年間に長沼城下へ移転。
大町	林光院	曹洞宗													妙笑寺末寺。慶長11年に創建。
大町	靈山寺	真言宗													天正年間に長沼城下へ移転。
大町	西蔵寺	浄土真宗													蓮如滞在の伝承あり。
津野？	浄興寺	浄土真宗													戦乱で越後高田へ退転。
赤沼	蓮正寺	浄土真宗													戦乱で越後与板へ退転。
穂保	守田神社	日吉山王													正保年間に現在地へ移転。
穂保	天神社	天神													正保年間に現在地へ移転。

【図表5】長沼寺社変遷表（寺社の創建年代は『長野県町村誌』『長沼村史』を参照）

た地割が成立していた。

それでは、近世につながる城下町の景観はいつ形成されたのか。「山口家本」を観察すると、「本丸」「二の丸」「三の丸」が城郭部分であり、その外側に「侍屋敷」を囲繞する惣構が存在する。「大日方家本」の文字注記には「越後街道」を惣構の内部に引き込んだ旨が記されており（【図表3】）、ある時期に地割の造成と街道の付替えが行われた可能性が示唆される。

1583年（天正10）以降、北信濃は上杉氏の支配下となり、上杉景勝によって宿駅・伝馬制が定められた。1583年（天正11）には「牟礼―香白坂―長沼」ルートが越後に向かう正式な街道を定められ、脇道の通行が禁止された。

【史料1】上杉景勝制札⁽¹⁶⁾

制札

右、信州・越国往復之人民、経_レ横道_ニ之事、堅令_ニ停止_ニ畢、所詮自_ニ牟礼_ニ香白坂_ニを直_ニ長沼_ヘ可_レ令_ニ往還_ニ之由、仰出、被_レ成_ニ御朱印_ニ者也、

天正十一年

(上杉景勝)
朱印

三月 日

奉行中

【史料1】は領主による流通統制を意図した政策であるが、16世紀後期の長沼が越後へ通じるメインルートに位置づけられたことは重要である。断定はできないものの、絵図に記された街道の付け替えが行われたとすれば当該期の可能性が高い。

上杉氏の会津転封後の長沼は、豊臣蔵入地に編成された。豊臣蔵入地が交通・商業上の要衝に設定されたことを踏まえれば、豊臣政権下でも長沼の重要性は揺るがなかった。関ヶ原合戦後に北信濃を支配した松平忠輝は、長沼宿を伝馬宿に指定し、上杉景勝と同様に脇道の通行を禁止にした。

【史料2】松平忠輝北国街道商人荷物定書⁽¹⁷⁾

定

信州・越国往復之商人荷、従_ニ牟礼_ニ香白坂直_ニ長沼新町江_ニ可_レ令_ニ往還_ニ候、自然経_ニ横道_ニ輩_ニ於_レ有_レ之者可_レ為_ニ曲事_ニ候、今度坂中江海道を明、発_ニ新

田_ニ可_レ申之由雖_ニ訴訟申上候_ニ、任_ニ先例証文旨_ニ、各令_ニ談合_ニ如_ニ前々_ニ申付候上者新田をも発、伝馬以下弥無_ニ油断_ニ可_レ相勤_ニ者也、

慶長拾六^{辛亥}

八月廿一日 山田隼人正

(以下5名署名略)

牟礼百姓中

「長沼新町」という記載から、忠輝期に宿場として本格的な町立が行われたと思われる。こうした前史があるからこそ、長沼城は幕藩体制下で命脈を保ち、長沼藩の設置へとつながった⁽¹⁸⁾。

ひとまず、絵図にみられる長沼城下町の景観は、17世紀初頭以降に形成された姿と考えたい。例えば、【図表5】のとおり、長沼城周辺には多くの寺院が分布するが、中世に起源を持つ寺院が戦乱によって16世紀後期に廃絶・退転した一方、17世紀初頭に外部から長沼城下に転入した寺院も多く、大半は現在まで継続している。寺院の転出入が16世紀末～17世紀初頭に集中することは、城下町の整備・再編と密接に関わると考えられる。

5 長沼城下町の空間構成

16世末に成立した長沼宿は、長沼城の南側に位置する「上町」に設置された。「大日方家本系統」の長沼公民館本（【図表1】のNo.6）には、「今ハ長沼ト別ニ名付ル所無、今ハ上町・六地藏町・内町・栗田町・津野村等□村ヲ合テ惣名ヲ長沼ト云也、飯山へ在ル駅次ハ上町ニ勤之、」という文字注記があり、「長沼」を構成する各町のうち上町が宿の機能を担っていたことがわかる。おそらく、【史料2】で町立が行われた「長沼新町」が長沼上町に該当すると思われる。

さらに城下空間は、惣構内部の武家地「内町」とその他の町人地（上町・六地藏町・栗田町）に分散していた（【図表5】）。各町は北国街道に沿って街路型の街並を展開しており、碁盤状の面的な広がりは見られない。これは千曲川氾濫原という地形的制約に加え、上町のみが宿場機能を担うなど、長沼城下の各町が宿場機能、商業機能など

を別個に担っていたことも要因であろう。

明治期に編纂された『長野県町村誌』「津野村」の項目には、「永禄十一年武田信玄長沼築城の際、町割あり。長沼栗田町、長沼六地蔵町、長沼内町、長沼上町、長沼津野村の四ヶ町一ヶ村となり、本村を長沼津野村と称す。」という記載がある⁽¹⁹⁾。永禄11年に長沼城下町の町割が施されたという記述は鵜呑みにできないものの、津野村は農村にも関わらず長沼城下町の一部と認識されていたことは注目される。事実、正保郷帳の石高を比較すると以下のとおりである。

【史料3】『信濃国村郷帳』⁽²⁰⁾

※関係部分のみ抽出

一高式百六石式斗九升五合	内町
一高七百式拾七石三斗五升九合	津野村
一高四百六拾三石式斗式升	上町
一高四百石式斗五升	栗田町
一高五百三拾四石式斗七升五合	六地蔵町

津野村の石高は727石と突出しており、家臣団屋敷を持つ内町の262石や宿場である上町の463石と比較してその差は歴然である。つまり、津野村は農村としての機能が卓越していた。

こうした城下町の形態は、従来、近世城下町成立のメルクマールとされた一元的な城下町空間というより⁽²¹⁾、川名禎氏が指摘する「分散型城下町」の形態に近いと思われる⁽²²⁾。川名氏が「分散型城下町」の事例として紹介した下総国関宿城下町は、戦国期の城下を継承した分散的な形態を特徴としており、武家地がもつ城への求心性と町人地の分散性という二元的な傾向を持っていた。また関宿城下町では、町場のみならず、一部の農村も城下町に内包され、その一部を構成していたという。

長沼城下町においても、惣構内部に圍繞された武家地とそれ以外の町人地という二元的空間構造は「分散型」と位置づけることができよう。そもそも長沼城下町の町場は、北国街道に沿って街路村状に展開し、寺社も各町に散在している。一般

的な近世城下町に見られる、武家地、寺社地、町人地が基盤目状に広がる景観とは異なる。また、城下空間に津野村という農村が組み込まれていることも示唆的である。

このように絵図に描かれた近世の長沼城下町は統一的な都市計画を持たず、中世的要素を色濃く引き継いだ分散的な構造を有していたと考えられる。長沼城下町がこのような形態をとった背景には、①氾濫原の微高地という地形的制約②長沼藩の経済状況などが影響したと考えられるが⁽²³⁾、長沼城下町の本格的な検討は今後の課題としたい。

6 おわりに

本稿の内容を整理すると次のとおりである。

- I 近世において長沼城を描いた絵図は、①「山口家本系統」②「大日方家本系統」の二類型に分類できる。
- II 「山口家本系統」は長沼城の縄張りそれ自体を描く「城郭絵図」であり、「大日方家本系統」は城下町の地理的空間を描くことを目的とした「城下絵図」である。「山口家本」は城郭内部の描写を主題とした一方、「大日方家本」は広域的な地理情報を主題としている。
- III 絵図に描かれた近世の長沼城下町は、家臣団屋敷のみ惣構によって圍繞され、町人地と分離した分散型城下町である。長沼城下町は中世的な空間構造を多分に継承していると考えられるが、絵図に描かれた交通路や地割の景観は17世紀初頭に再編された姿である。

本稿で述べてきたことは、まだ表面的な分析にとどまり、絵図の景観表現については、更なる検討が必要である。近世に作成された城郭図の多くが軍学の影響を受けており、現地景観を反映しているとは考え難い絵図も多い⁽²⁴⁾。

しかし、長沼藩が17世紀後期に廃絶したことに加えて、水害常襲地帯であったため、絵図の描写の正否を検証するための史料が不足していることも否めない。文献史料の限られた状況で絵図を検

証するには、発掘調査との整合が重要になるのではないだろうか。今後は発掘調査成果を踏まえた絵図の史料批判が求められる。

註

- 1) 長沼城の築城年代については、所説ある。1568年（永禄11）に武田信玄によって築城されたとする見解が通説的である（『甲陽軍鑑』）。しかし、同年に上杉輝虎は長沼城の築城について「長沼再興之由」と評しており（『信濃史料』第13巻）、1568年の築城（改修？）に先行して武田氏もしくは島津氏の城館が存在した可能性は高い。
- 2) 長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査の概要は『長野県埋蔵文化財センター年報』第38号～第41号を参照。
- 3) 主な研究として、河西克造「水内郡長沼城の再検討―城郭構造を中心として―」（『市誌研究ながの』第17号、2010年）、長沼歴史研究会編『長沼城の研究―城跡の検証―』（長沼歴史研究会、2014年）、遠藤公洋「長沼城」（中澤克昭・河西克造編『甲信越の名城を歩く長野編』吉川弘文館、2018年）など。なお遠藤氏は長沼城を描いた絵図について、「山口家本系統」を「A型」、「大日方家本系統」を「B型」に分類している。しかし、「B型」は【図表1】No.6の長沼公民館本1枚のみの紹介にとどまり、No.2大日方家本の存在は確認されていないようである。
- 4) 鬼頭康之「長沼古城之図」（『市誌研究ながの』第1号、1994年）。「長沼古城之図」という注記が絵図の原本を写した際に書き込まれたものなのか、そもそも絵図の成立は廃藩前なのか、という判断は保留する。
- 5) 小山丈夫氏の教示による。
- 6) 他の「山口家本系統」絵図（「諸国古城之図」など）と比較して、家臣名や城郭内部の小字・通称地名を事細かに描写している点の特徴である。特に、「石カキニ非ズ自然石崖」「桜土手」「狼煙臺」「櫓臺」など現地を知る者ならではの文字注記が見受けられる。「佐久間因幡守様御屋敷」に「今寺屋敷」とあるのは、佐久間勝年（初代藩主勝之長男）の屋敷跡に17世紀中期に移転した貞心寺を指す。
- 7) 延宝7年の検地帳は、前掲註3の『長沼城の研究―城跡の検証―』に翻刻が掲載されている「内町検地帳」（『内町区有文書』）を参照。なお、文書の原本は2019年（令和元年）の台風19号水害で流出した。
- 8) 前掲註2。
- 9) 矢守一彦『都市図の歴史 日本編』（講談社、1974年）。矢守氏は図郭の包囲する対象領域から（i）城郭絵図と（ii）城下絵図に分類し、（ii）を（1）城地と城下を含む城下町プラン全体と（2）城下のみ（城地の部分を空白とする）に分類した。
- 10) 笹本正治「中世末から近世初頭の善光寺門前町」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第78集、1999年）。
- 11) 『信濃国道者之御祓くばり日記』（『長野市誌』第12巻資料編 原始・古代・中世）
- 12) 井原今朝男「太田荘をとりまく地域社会の変貌」（『豊野町の歴史 豊野町誌2』豊野町誌刊行会、2000年）。
- 13) 仁木宏「中世港町における寺社・武家・町人一北陸を中心に―」（仁木宏・綿貫友子編『中世日本海の流通と港町』清文堂出版、2015年）。また周知のとおり、伊勢長島の一方向一揆は木曾川河口のデルタ地帯を拠点としている。
- 14) 原田伴彦「戦国時代前後の諏訪門前都市集落」（『都市形態史研究』思文閣出版、1985、初出1951年）。
- 15) 前掲註7
- 16) 牟礼区有文書『長野市誌』第12巻資料編。
- 17) 牟礼区有文書『長野県史』近世資料編第7巻3。牟礼村百姓の新田開発が認められた一方、坂中峠に新道を開くことが禁じられ、「先例」のとおり牟礼―香白坂―長沼ルートの通行が命じられている。
- 18) 16世紀末から17世紀初頭にかけて、幾度領主が入替わっても維持された長沼城は、1688年（貞享5）に長沼藩主佐久間氏が改易されるとあっけなく廃城となる。その背景に、荒廃した善光寺門前町の再発展によって、長沼城下町の地位が低下した可能性を指摘しておきたい。
- 19) 長野県編『長野県村誌』第1巻（長野県町村誌刊行会、1936年）。明治17年（1884）に成立した地誌の活字版である。
- 20) 『長野県史』近世資料編第9巻。
- 21) 小島道裕「戦国期城下町の構造」（『日本史研究』第257号、1987年）。
- 22) 川名禎「分散城下町の成立とその統合原理―下総国関宿城下町の復元を通じて―」（『歴史地理学』第50巻第5号、2008年）。
- 23) 前掲註22によると、関宿城下町が分散形態となった要因に関宿藩の譜代藩としての性格があげられる。関宿城に入府する大名は中小藩であり、経済的に恵まれていない上に、譜代藩のため幕府の要職にあった。このため、城下町経営に専念できず、既存の町場を城下に編入する必要があった。
- 24) 例えば、「山口家本系統」絵図のうち【図表1】No.3の浅野文庫「諸国古城之図」における城郭の描写は、甲州流兵法の影響を受けていることが指摘され、長沼城の絵図も現地景観を知らない人物によって作成された可能性が高い（井原今朝男「信濃国」矢守一彦編『浅野文庫蔵諸国古城之図』新人物往来社、1981年）。事実、本家「山口家本」と比較して、「諸国古城之図」をはじめ他の「山口家本系統」絵図は文字注記の量が圧倒的に少なく、「越後街道」の描写も簡略化されている。また家臣団の屋敷割に個人名は記されておらず、より軍学的な絵図と

いえる。そのような意味で、「山口家本系統」絵図のうち、山口家所蔵の絵図（No.1）の描写が最も信頼できる。

【付記】

本稿を執筆するにあたり、滋賀県立大学名誉教授中井均氏、飯綱町教育委員会小山丈夫氏、國學院大學名誉教授吉田敏弘氏、國學院大學准教授川名禎氏からご指導、ご助言をいただきました。感謝申し上げます。

脱稿後、村石正行氏のご教示により、新たに長野県立歴史館寄託「長沼城古城図」の存在を確認した。本稿で取り上げた二系統の絵図とは全く異なる描写がなされており、今後あらためて検討を要する。

(5) 長野市柳原地区における治水石標と地役権設定契約

——近代治水思想を可視化する地域合意の物証——

真関 隆

1 本稿の目的

近代日本の治水は、堤防の嵩上げや河道固定を基本とする「洪水を防ぐ」思想によって語られることが多い。しかし一方で、自然の挙動を正確に観察したうえで、異常時の氾濫を前提に被害の最小化を図るといった治水思想が存在した。これは、近年の気候変動に伴うと言われる大規模な洪水の頻発を背景に、「洪水を防ぐ」思想から変化した、「洪水を制御し共存する」思想に近い。本稿で扱う千曲川左岸に位置する旧上水内郡柳原村（現在の長野市柳原地区）に残された大正期の石標は、その思想を端的に示す物証である。

長野県埋蔵文化財センターは、2016（平成28）年から3年間、国が所管する「一般国道18号（長野東バイパス）改築工事」に伴い、この地区にある小島・柳原遺跡群の発掘調査を行った（図1）。この遺跡群をかつて「善光寺往来道」と呼ばれた市道柳原117号線が横断しており、その道路脇にあった石標は認知されていたが、設置に至る背景の解明には至らなかった。なお、この遺跡群からは県内で初めて奈良時代末から平安初期のものと思われる「塔鏡形合子（とうまりがたごう

す）」（香を入れて仏事で使われた青銅製容器）の蓋が出土した。

この石標の意味について、東北大学国際災害科学研究所特任教授の原口強氏は、「堤防を敢えて低くすることで通常の洪水から地域を守り、異常時は越水を許容し、氾濫を広域で受け入れることで壊滅的被害を軽減する治水。自然を正しく観察し、具体的な処方を行った物証」と解説している（原口2022）。



図1 小島・柳原遺跡群発掘調査地点位置図

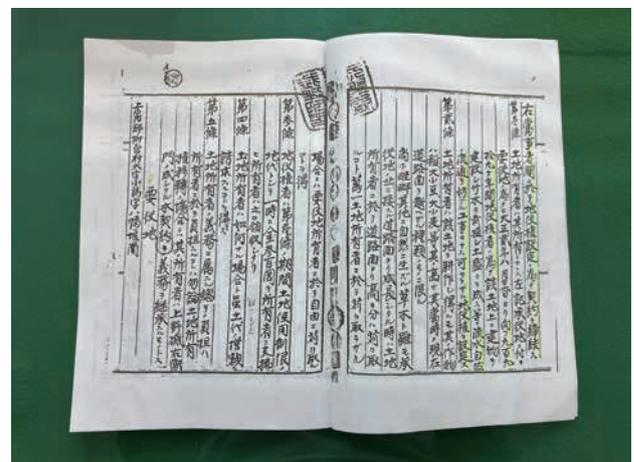
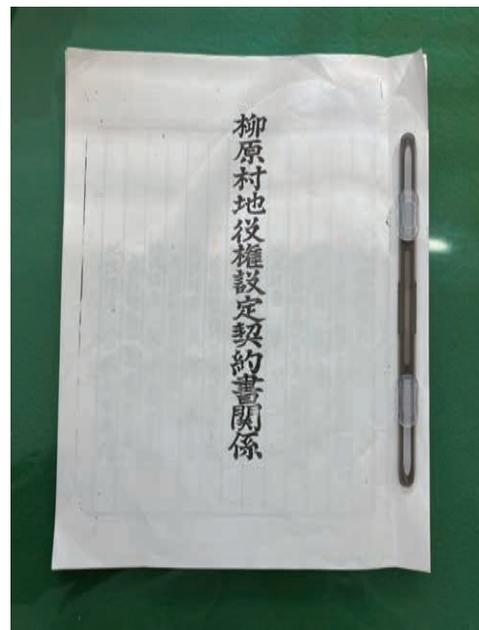


図2 『柳原村地役権設定契約書関係』（写）部分

本稿は、この評価を出発点としつつ、石標の設置に至る背景を、地区に残る『柳原村地役権設定契約書関係』（図2）を糸口に紐解き、当該治水思想が地域合意として成立していたことを明らかにすることを目的とする。

2 柳原地区の成り立ちと地勢

柳原地区は、千曲川左岸に形成された自然堤防上に位置し、古くから洪水の影響を受けやすい土地であった。

ここで、柳原地区の行政区域の合併の歴史と地勢を概観する。

近世の初めにあった小島村・中俣村・布野村・村山村（後に里村山村、再び村山村と改称）の4村のうち、1876（明治9）年5月30日に中俣村と布野村が合併し「柳原村」となった。

1885（明治18）年には連合戸長役場が設置され、長沼地区と連合し「長沼大町ほか六カ町村」として一つの行政区となった。

4年後の1889（明治22）年4月1日、市制・町村制の施行に伴い小島村・柳原村・村山村の三か村が合併し柳原村が誕生した。この合併案に対し、小島村は当初一村独立を主張したが、上水内郡長は100戸未満であった同村の独立に反対し、



図3 柳原地区と石標位置

千曲川の治水費用は関係集落で負担することとして組替えを認めなかったとされる。

1954（昭和29）年4月1日、町村合併促進法により60有余年続いた柳原村は、長野市周辺の10か村とともに長野市に編入合併した（長野市1997a）。

これら旧4村の地理的位置関係は、西から東へ小島・中俣・村山が並び、それらの南側に布野が接する（図3）。布野の南には中俣の飛び地（久保河原）があるが、千曲川の川筋の西進に伴い、現在よりも東に存在した布野が中俣へ貫入してこの飛び地が生じたとされる（上水内郡柳原村史編纂委員会1955）。

東に千曲川が流れ、裾花川の旧流路で自然流路を利用した条里水田の主要な用水であったとされる南北八幡川（堰）（福島正樹2002）の下流に位置する旧4村にとって、水害を防ぐための築堤と排水は古くから宿願の事業であった（長野市1997a）。

3 水害の歴史と地区の対応

千曲川の水害のうち記録上最大なものは、1742（寛保2）年8月2日の「戌の満水」であり、これに次ぐのが1896（明治29）年7月21日の洪水とされている。長野市誌には「明治二十九年七月中の降雨はまれにみる大雨量で、とくに二十日から二十一日にかけてもっとも激しく、二十一日から犀川・千曲川の両河川が増水し大洪水となった。最低地の水高三〇尺有余（約9m）の増水となり、水勢は猛烈をきわめ、各地の橋梁を墜落させ、要所の堤防を決壊させた。」とある（長野市1997b）。布野では堤防が押し切られ、中俣の須坂街道堤防は40～50m決壊した。須坂街道堤防は、現在の市道柳原117号線（旧県道長野・須坂線）とほぼ一致し、これを挟む中俣と布野の両地域では、水害の集中を避けるための堤防の高さが長きに亘り争われていた（長野市1997a）。

堤防が決壊した同年12月、布野は住民総出で北八幡川南側下流の千曲川沿いに一夜堤防（驚異的な突貫工事で完成させた堤防の意）を築いた。こ

の付近は「北国往還松代通り（雨降り街道）」の福島宿に近い「布野の渡し」がある交通の要衝で、かつ水害の難所でもあった。この堤防を巡り、布野は中俣・村山・小島の3地区と長沼村から取り払うよう訴えられ、2年後の1898（明治31）7月24日付けで、上水内郡長森田斐雄を「調和取扱人」として、布野による原状回復と4地区からの訴えの取下げを、柳原・長沼両村長を含む関係地区総代で約定している（布野他関係総代1898）。

この案件を一つの契機として、後述する治水に関する住民の合意形成とそれを担保する法的な文書整備、合意内容を線に刻んだ石標という永続的な構造物を設置する取組へと繋がっていく。

4 治水契約内容の変遷

明治29年の洪水から7年後の1903（明治36）年7月26日、布野と中俣の間で、旧県道長野・須坂線の一部（中俣の村山境より西25間（45m）を起点に50間（90m）を、現在よりも2寸5分（7.6cm）引き下げ、北側を石垣とし出水時は自然溢水にすることを取り決めた。

しかしながら、工事は捗々しく進まず、1913（大正2）年5月24日付けで、政治家・実業家小坂善之助の長男である小坂順造の立会により、4地区の間で新たな契約を結んだ。内容は、明治36年の取り決めに廃棄し、城橋（中俣）から中俣・村山境の間の県道258間（469m）の実測図を作成し原型を永久に確保すること（損傷時は県責任で修繕）、県道に接する上野磯右衛門所有の土地における自然流水の確保は別途契約すること等である（長野市1997a）。

こうした経過を辿り、1913（大正2）年8月26日付けで、地役権者18名と承役地2筆を所有する上野磯右衛門との間で、別途契約するとしていた地役権設定の契約が結ばれるに至った。なお、地役権は、自己の土地（要役地）の便宜のために他人の土地（承役地）を一定の目的（通行、取水等）で利用する権利である（民法280条）。

5 契約内容と史料的价值

この契約の逐条的検討は補論として後述するため、ここでは地役権設定の契約内容とその価値を検討する。

堤防地権者および周辺の広範な土地所有者の間で、治水に関する契約が取り交わされていたことが本契約から確認されている。この契約は、単なる土地使用や補償に関する取り決めにとどまらず、越水や氾濫が生じ得ることを前提として、その受容と責任分担を明示的に規定している点に大きな特徴がある。

契約は、特定の代表者や行政のみが意思決定主体となっているのではなく、旧県道・長野須坂線周辺の農地（要役地26筆）の所有者18名が連署している。『柳原村史』第三編村政史に記載の歴代村長等と照らし合わせると、これらの所有者はいわゆる公職経験者（村長、村議会議員、区長）が多いことが分かるが、地域の実情に通じた住民代表が広く参加し、治水方針について合意を形成した結果が法的文書として残されているのである。

この契約書は、後述する石標設置に関する覚書と一体となって石標が示す治水基準を社会的・法的に裏付ける史料であり、両者は相互に補完関係にあると言える。つまり、石標が物理的・視覚的な基準を示す物証であるのに対し、契約書等は、



図4 石標から中俣交差点を望む

その背後にある合意形成の過程と内容を具体的に示しているのである。

6 大正期に設置された治水石標

この契約からほぼ一年後の1914（大正3）年11月12日付けで、県当局と小島・中俣・布野の惣代連名で結ばれた覚書では、旧県道長野・須坂線の実測を行い、治水上の基準を明確にするため、路面の中心と水平に線を刻んだ石標を置くことを定めている。石標に刻まれた二本の水平線は、将来設置される道路や工作物の高さを一定範囲内に制限するための基準であり、以後、この基準は維持されてきた。

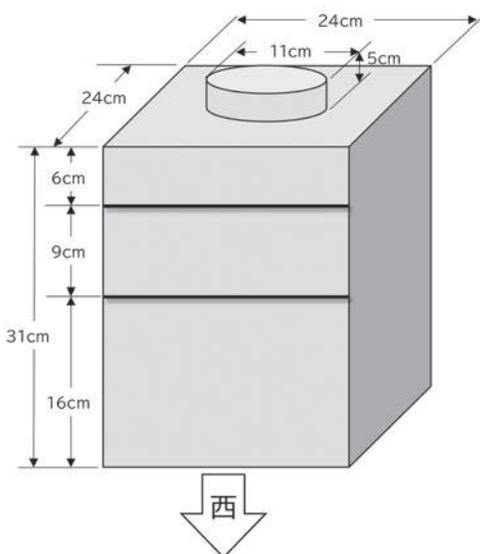


図5 石標（拡大）と模式図

なお、この覚書第二項には、道路中心と道路南北の天端の差を三寸とし、道路改良があったとしてもその差を維持するとあり、二本の水平線はそれを示しているものと考えられる。

現在の石標は、長野東バイパスの中俣交差点北東側の電柱近くに設置されている（図3・4）。24cm四方の四角柱で、天頂の円形部分を含む地上高36cm、西側の面のみ9cm間隔の線2本が刻み込まれている（図5）。

石標は、こうした契約や覚書の内容を土地に可視化した存在であったと理解できる。すなわち、契約が文字によって規定した治水思想を、恒久的に現地に示す役割を果たしたのである。

さらに、この石標があることで、現在の構造物との相対的な位置関係の記録を辿ることができるわけであり、遺物によって過去と現代を繋ぐことができている事例とも言える（石丸敦史2021）。

7 越水を前提とした治水思想の実像

本稿冒頭で触れた原口氏の解説の神髄は、この石標を単なる構造物ではなく、「治水思想を刻印した物証」として位置付けた点にある。すなわち、平時の洪水は防ぎつつ異常洪水時には越水を許容するという選択は、自然を制御するのではなく、自然の力を前提として被害を分散させる発想に立脚している。このような思想は、地域社会の合意なしには成立し得ない。

この見解は、石標と契約原本を併せて検討することで、より具体的な実像として理解することができる。

すなわち、柳原地区における治水は、行政が一方的に決定した施策ではなく、自然の特性を踏まえた上で、地域社会が主体的に選択し合意した結果であった。その合意は、石標という物理的遺構と契約や覚書という文書史料の双方によって、現在まで伝えられている。

8 おわりに

本稿では、発掘調査における遺物の出土を契機

として、千曲川左岸・柳原地区に現存する大正期の石標と、それと不可分の関係にある治水契約を取り上げ、越水を前提とした治水が地域合意として成立していた実態を整理した。

石標と契約は、地域社会が自然災害と向き合い、被害を最小限に抑えるために選択した知恵を、現在に伝える貴重な文化的資産である。両者を併せて検討することで、近代治水史における一つの到達点が、具体的な地域実践として浮かび上がるのである。

旧県道・長野須坂線はかつて「善光寺往来道」と呼ばれたとおり、古人は東から千曲川を渡りこの道を通して善光寺へ参詣した。「塔鏡形合子」の出土例がある北関東からの玄関口としてのこの地の位置付けについては、稿を改めて取り組みたいが、ここでは触れるにとどめる。

補論 地役権設定契約書の逐条的検討

補論 1 史料の概要

史料名：地役権設定契約書

年代：1913（大正2）年8月26日

特徴：多数の地役権者による連署、契約期間999年という異例の長期設定

補論 2 契約文と現代語訳・注記

【原文】（地役権者18名の住所・氏名、地役権設定者1名の住所・氏名（略））

右當事者間ニ於テ地役権設定者ノ為メ契約ヲ締結ス

【原文】第壹條 土地所有者ハ其所有ニカカル左記承役地ニ付キ要役地ノ為メニ大正貳年八月二十六日ヨリ向フ九百九拾九ヶ年間地役権者ノ為メ該土地上ニ建物ヲ建設シ竹木ヲ植栽シ土盛りヲ成ス等流水自然ノ流通ヲ妨グル工事ヲナス可カラザル地役権ヲ設定ス

【現代語訳】土地所有者は、左記の自己所有の承役地について、要役地のために、大正2年8月26日から向こう999年間、建物の建設、竹木の植栽、盛土など、流水の自然な流れを妨げる工事を

行わないという地役権を設定する。

【注記】本条は本契約の核心であり、流水の自由を確保することを明確な目的としている。期間を999年とする点は、短期的な対策ではなく、世代を超えた合意であったことを示す。

【原文】第貳條 土地所有者ハ該土地ヲ耕作シ得ルモ其ノ作物ハ稻、大小豆、大小麦、等其ノ高サ其當時ノ現在道路面ヲ超ヘザル種類ノモノニ限ル尚ホ畦畔其他ニ自然ニ生ズル草木ト雖モ承役地ノ並ニ接スル道路面ヨリ成長シタル時ハ土地所有者ニ於テ道路面ヨリ高キ分ハ苻リ取ルコト萬一土地所有者ニ於テ苻リ取ラザル場合ニハ要役地所有者ニ於テ自由ニ苻リ取ルコトヲ得

【現代語訳】土地所有者は耕作を行うことができるが、作物は当時の道路面の高さを超えない種類に限られる。また草木が道路面より高く成長した場合は刈り取らなければならないが、履行されない場合は要役地所有者が刈り取ることができる。

【注記】農業利用を認めつつ、治水機能を最優先する点に、本契約の現実的かつ合理的性格が表れている。

【原文】第参條 地役権者ハ第壹條ノ期間土地使用制限ノ地代トシテ一時ニ金参百圓ヲ所有者ニ支拂ヒ所有者ハ之ヲ領収シタリ

【現代語訳】地役権者は第1条に定める期間の地代として土地所有者に300円を支払う。

【注記】地役権設定が無償の制限ではなく、対価を伴う私法上の合意として成立していたことを示す。

【原文】第四條 土地所有者ハ如何ナル場合ト雖土地ノ増額ヲ請求スルコトヲ得ズ

【現代語訳】土地所有者はいかなる場合でも地代の増額を求めることはできない。

【注記】地代条件の変更を禁じることで、地役権契約の長期的安定性と不可逆性を確保する規定である。

【原文】第五條 土地所有者ノ義務ニ属スル總テノ負担ハ所有者ニ於テ負担スルコトハ勿論土地所有權移轉ノ場合ニハ其ノ所有者ハ上野礮右衛門ノ成シタル本契約ノ義務ヲ繼承スルモノトス

【現代語訳】土地所有者の義務となる全ての負担は土地所有者が負担し、土地所有権が第三者に渡っても現土地所有者の義務は繼承される

【注記】地役権に伴う義務が土地そのものに付随し、所有者の交代後も当然に承継されることを明示する規定。治水に関する土地使用制限を個人の約束にとどめず、将来にわたり恒久的に維持する仕組みを示している。

【原文】（要役地26筆の地番・地目・面積・所有者・地価、承役地2筆の地番・地目・面積・所有者（略））

右契約ヲ證スル為メ此證書參通ヲ作り各自署名捺印ノ上各々其一通ヲ保有ス（布野區壺通小嶋區壺通上野礮右衛門壺通）

大正貳年八月貳拾六日

（地役権者18名の住所・氏名・印、地役権設定者1名の住所・氏名・印（略））

謝辞

本稿をまとめるにあたり、石標の意義について、東北大学国際災害科学研究所特任教授・原口強氏より重要な示唆を賜った。

また、本稿の中核となる地役権設定契約書については、元村山区長藤森利治氏及び土地家屋調査士・測量士松本誠吾氏から貴重な写を頂戴するとともに、柳原地区の治水の歴史について直接お話を伺い多くの示唆を頂戴した。なお、これらの資料調査には長野市立図書館、柳原地区住民自治協議会のご高配を賜った。

加えて、県文化振興課柳澤亮、同石丸敦史の両氏には調査に関して資料提供やご教示をいただいた。現地調査にあたっては当センター川崎保、酒井貴子の、また契約書等の翻刻には小出晟生の助力を得た。ここに記して深く感謝申し上げる。

引用・参考文献

石丸敦史2021「信州の近代遺跡」『信州の遺跡』第17号 長野県埋蔵文化財センター

上水内郡柳原村史編纂委員会1955『柳原村史』昭和30年8月28日発行

長野市1997a『長野市誌 第八巻 旧市町村史編 旧上水内郡 / 旧上高井郡』長野市誌編さん委員会

長野市1997b『長野市誌 第五巻 歴史編 近代1』長野市誌編さん委員会

原口強2022『洪水と人々の暮らし～語り部としての埋蔵文化財～』全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会 令和4年11月1日

福島正樹2002『古代における善光寺平の開発について―旧長野市街地の条里遺構を中心に―』国立歴史民俗博物館研究報告 第96集

布野他関係総代1898「示談約定書」『柳原地役権設定契約書関係』内 明治31年7月24日付

図の出典

図1 「小島・柳原遺跡群出土の塔鏡形合子」長野県埋蔵文化財センタープレスリリース資料 平成29年2月3日

図3 「柳原地区散策マップ」柳原地区住民自治協議会 平成22年7月（境界線・石標位置・河川名称を筆者加筆）

図2・4 筆者撮影

図5 筆者撮影・作図

(6) 長野県の近現代遺跡

—軽井沢町旧三笠ホテル浴槽遺構出土のレンガについて—

依田 健太

1 はじめに

旧三笠ホテル（軽井沢町）は、木造の純西洋式ホテルとして1904（明治37）年に着工し、1906（明治39）年から戦中、戦後の中断期を除いて1970（昭和45）年まで営業した。設計は牛久シヤトー（茨城県）を手掛けた岡田時太郎（1859-1926）、監督は軽井沢最初のホテル（万平ホテル）を開業した佐藤万平（1868-1958）となっている。1974（昭和49）年、北側へ約50メートルの曳屋がおこなわれ、その際に浴室棟、食堂棟などの付属屋が撤去された。

1980（昭和55）年、軽井沢町に寄贈され、同年に重要文化財指定された。2020年（令和2年）から保存修理工事がおこなわれ、併せて2023（令和5）年におこなわれた防火・活用整備工事中の2025（令和7）年3月17日に曳屋時に撤去された浴室棟の一部が発見され、出土した遺物の一部が軽井沢町教育委員会によって回収された。後に浴槽遺構は砂で覆い不透水シートを被せ埋め戻しがおこなわれた。現在、「旧三笠ホテル浴槽遺構」として埋蔵文化財包蔵地に指定されている。

2 浴槽遺構について

浴槽遺構は計3据え発見された。それぞれDの字型をしており、1据えのサイズは長軸約2.2m×短軸約1.1m、高さ約0.5m。1段目は長方形の長手積みの土台で、現存が認められる6段目まではイギリス積みを基調とするが、遺構本来の高さは不明となっている。

レンガは、浴槽の縁など一部を除き白の釉薬が塗られた面のみを浴槽の内側に用いている。

3 出土レンガについて

《図2・資料1》浴槽の1段目の土台部分に使用されていたものとサイズ、色調も同じことから土台部分のものと判断される。

表面調整においてムラがみられることや、ナデをおこなった箇所がみられる。厚さが55mmとなっており、1924（大正13）年3月のJIS規格8号以降、1987（昭和62）年8月までレンガの厚さが60mm規格とされたため、それ以前のものと考えられる。また、表面に機械生産で生じるピアノ線痕がみられないことから手づくりによるものとみら



図1 浴槽遺構全体写真 軽井沢町教育委員会提供

表1 出土レンガ観察表

資料番号	長辺	短辺	厚さ	色調	形成	刻印
1	207mm	96mm	55mm	Hue2.5YR 橙 6 / 8	手抜き?	なし
2	220mm	108mm	59mm	Hue2.5Y 明黄褐 7 / 6	機械抜き	なし
3	194mm(残存部)	150mm	107mm	Hue10Y 灰白 8 / 1	機械抜き	なし



図2・資料1 軽井沢町教育委員会提供



図4 資料3・軽井沢町教育委員会提供



図3・資料2 軽井沢町教育委員会提供

れ明治期のレンガの可能性が高い。

《図3・資料2》 長手の一面のみに釉薬が施されており、この面を浴槽内側に使用していたと判断される。両方の長手面を白色とすることから浴槽の4段目に使用されていたものとみられる。

レンガの中心部が凹状で斜めの格子状となっている。この部分にはレンガ同士を接着した目地材の剥離跡が確認された。漆喰目地の材料である石灰の付着がみられないことや、1891（明治24）年の濃尾大地震以降、目地を漆喰からセメントへ移行したことから、目地にはセメントが使用されていたと想定される。

《図4・資料3》 形状から浴槽の縁と判断される。白い釉薬がアーチ面に塗られたレンガをセメントで硬く接着している。接着している剥き出し

のセメント部分は粗い仕上がりとなっている。表面の釉薬はかなり均一で、経年劣化から生じる釉薬への貫入は確認されなかった。

4 まとめ・おわりに

紹介した資料1のレンガはサイズ、表面調整から明治期の可能性が高いが、1970（昭和45）年まで半世紀以上も営業したホテルの浴槽という遺構の性格を考えると浴槽の改修工事の有無、図面、文献史料によって複合的にレンガの時期を判断する必要があるのではないか。

資料紹介にあたり、軽井沢町教育委員会様ご提供の写真を使用させていただきました。軽井沢町教育委員会生涯学習課文化振興係、軽井沢町歴史民俗資料館をはじめ関係者様に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 考古学ジャーナル 2014『特集 煉瓦にみる東京の近代史 No.664』
- 斎藤進 2007「市谷本村町遺跡の煉瓦遺構」『考古学が語る日本の近現代』同成社
- 長野県史刊行会 1990『長野県史 美術建築資料編 建築』長野県史刊行会
- 日本煉瓦製造株式会社社史編集委員会 1990『日本煉瓦100年史』日本煉瓦製造株式会社

長野県埋蔵文化財センター年報42 2025年度

発行日 2026（令和8）年3月27日

編集発行 （一財）長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

電話：026-293-5926 FAX：026-293-8157

E-mail：maibun@naganobunka.or.jp

印刷 信毎書籍印刷株式会社